



写真1 C区全景(北西から)



写真2 C区1号竪穴住居跡L字形カマド検出状況(南東から)

#### 矢田野遺跡

##### 写真1 C区全景（北西から）

手前に見えるのが1号竪穴住居跡である。一帯は広く平坦化され耕作地となっているが、往時の遺跡は台地北面に立地していた。プレハブ奥に見える小松ドーム周辺には南加賀古窯跡群が存在しており、本遺跡から出土した須恵器の多くもそこからもたらされたものである。

##### 写真2 C区1号竪穴住居跡L字形カマド検出状況（南東から）

一辺7.5mの方形竪穴住居跡西壁でL字形カマドが検出された。カマド構築材には黄色地山土と褐色土の混合土を使用し、焚き口部では軟質の凝灰岩も用いている。カマド左袖長は約1m、カマド右袖は明瞭には検出されなかった。煙道は右方向に伸びている。焚き口の被熱範囲からみて右奥に検出された袖様の部分は、煙道へぬける火を押さえるためカマド内に造り出した障壁と考えられる。甌等を出土した焚き口部は厚さ10cm程に被熱するが、これより奥に被熱は認められない。

卷頭写真一 畝田・寺中遺跡他 二〇〇一年度出土木簡

3号木簡

・「郡」<sup>(符乙)</sup> 大野郷長<sup>(等乙)</sup> 件



・「罪科知」火急<sup>(主政)</sup>



4号木簡

「追 召 阿マ准下女  
山邊志祁良」



8号木簡

「右大辨史田家牛加比マ官万呂」



6号木簡

・「幅マ連弘万呂白米一石」



・「御物」



金沢市畝田・寺中遺跡他の2001年度調査では、計6点の木簡が出土した。木簡が出土したのはO2調査区の河跡で、1999年度調査で多量の墨書土器を出土したSD008と同じものである。いずれも奈良時代に廃棄されたものと考えられる（『情報誌』4号参照）。

3号木簡（上段右）郡符木簡と呼ばれるもので、加賀郡司から大野郷長に宛てて発給された命令書である。裏面には郡司の三等官・四等官である主政・主帳の自筆署名を持つ。木簡の破損部には故意に切って折った痕跡があり、シュレッダーのようにして廃棄されたものであろう。

4号木簡（上段中）人を呼び出す（召喚する）ために記された木簡で、「追 召」の下二人が呼び出しの対象者である。真中で縦に折られている。

6号木簡（上段左）荷物等に付けられた木簡（荷札）で、幡マ弘万呂が白米（精米された米）1石に付けたものである。裏面には別筆で「御物」とあり、税物とは異なった用途が考えられる。

8号木簡（下段）「右大弁史田家」に属する牛加比マ宮万呂が何らかの荷物に付けた荷札木簡。右大弁史田家については不明だが、右大弁（史）は中央官人（太政官弁官局に属する）であり、本遺跡と中央との関わりをうかがわせる資料である。

# 石川県の埋蔵文化財動向 現状と課題

所長 谷内尾 晋司

石川県では、県が国、県、それに伴う公社・公団の開発事業に対応し、市町村が当該市町村および民間の開発事業に対応している。平成13年度は県内で69件、125,000㎡の調査が実施されている。最盛期の平成10年度の76件、約240,000㎡に比べ調査面積の落ち込みが著しい。調査面積減少の主な要因として、県では、国土交通省関係の国道バイパス関係の継続調査が一段落し、新規の開発事業が減少していることや、市町村では金沢市や、その近郊市町での区画整理事業がピークを越え、また、新たな調査基準により、調査対象が街路敷きのみとされたことも大きい。全国的にもここ近年、発掘調査件数が減少傾向にあり、経済状況の低迷、自治体の財政状況の悪化等による公共事業の抑制下にあつては、今後も当分こうした傾向が続くと思われる。ある意味では、開発事業に追い立てられた過密なスケジュールの県内の行政発掘も落ち着きを取り戻したともいえよう。

一方、こうした調査面積の減少は、各自治体の埋蔵文化財担当職員の削減や、他部門への配置転換など新たな問題を生み出している。平成14年度の埋蔵文化財担当職員数は県51名、市町村69名で、平成10年度に比べ、県で7名、市町村で4名の減員となっており、今後さらなる減員を迫られるものと予想される。開発事業に伴う発掘調査は、行政処理の一環として実施されるものであり、県教委や各自治体が多く埋蔵文化財担当職員を配置し、自ら発掘調査を実施してきた。埋蔵文化財担当職員の増員にあつては、定数管理上、新規の専門職採用には限度があることから、県においては、教員職による考古専攻生の新規採用や学校現場から教員を異動する方法がとられ、また、市町村にあつては、金沢市や小松市など一部の市町を除き、新規に専門職採用するところは少なく、一般行政職員を長期研修（県埋文センターで1年間）で埋蔵文化財担当職員して養成配置する方法がとられた。

なお、この長期研修制度により県下の市町村に埋蔵文化財担当職員の配置が促進されたが、小規模な町村にとっては、年間を通じて恒常的な発掘調査が有るわけではなく、調査経験に乏しい不慣れた職員がたった一人で調査現場を取り仕切ることとなり、十分な記録保存の処置がなされないまま調査が進められた例も少なくなく、一部町村では憂慮される状況も生じている。市町村が担当する事業には、一過性の強い開発事業が多く、こうした一時的な調査に対応するため、さらなる専門職員の増員は町村の財政事情からして困難であることから、津幡町等では民間調査機関が導入されている。

民間調査機関の安易な導入は、市町村の体制整備を遅らせる、地域に何も残さないなどの理由から県では回避してきた。また、その背景には、利益追求を前提とする民間調査機関の調査は適正さに問題があり、調査は行政主体で行うのが原則であるという根強い考え方が一部にあつたことも事実である。しかし、何年に一度あるかないかの調査のために、町村に調査体制の整備や継続を求めるのはもはや限界があり、民間調査機関の調査能力が向上した現在、その導入を検討する段階に来ているといえよう。そのためには、発掘調査の標準化、調査費の積算基準の明確化、民間の調査に対する管理監督体制など、導入にあつての条件を整備する必要があることは言うまでもない。

また、財団法人を設立し、その人件費を含めた運営費の多くを調査事業費に依存してきた県にとって、調査面積減少すなわち調査事業費の減少は、深刻な課題となっている。現場での発掘調査の促進が埋蔵文化財担当職員の増員を必要とした要因であつたことは否定できず、長らく担当職員の増員にあつては職員1名あたりの調査面積が必要人数の根拠とされてきた。従つて県から財団の派遣職員数の査定にあつては、調査量が減少すれば、その分が余剰人数と見なされ、減員の対象とされている。

しかし、これでよいのであろうか、遅れば開発事業に支障をきたすことから現場での発掘調査が最優先され、出土品整理や調査報告書の作成が後回しにされた現実は致し方なかったとしても、本来の埋蔵文化財保護行政の目的であったはずの調査成果の公開活用や普及啓発部門が軽視されてきたことは忘れてはならない。発掘調査が一段落した今こそ、こうした部門の強化に人員を割くべきである。

マスコミ等で毎日のように発掘調査による新発見が大きく報道され、埋蔵文化財が知的好奇心を充足させるものとして国民生活の中に一定の存在感を形成しつつあり、開発事業の進捗を阻害するものとして白眼視される時代はもはや過去のものになっている。とはいえ、埋蔵文化財の調査や保護には、開発事業者や地域住民の理解と協力が不可欠であることには変わりなく、「あんなところで何を掘っているのか」「茶碗のカケラを集めて何をするのか」といった素朴な疑問に答える必要がある。多くの経費を費やし発掘調査された膨大な出土品や調査資料の活用、利用を考えると、益々普及啓発事業の充実が重要な課題となっている。

県では、平成13年5月に埋蔵文化財センターに付随して「古代体験ひろば」がオープン、新センター整備事業が完了した。埋蔵文化財センターの役割は、調査研究、出土品や写真等の記録資料の保管管理、公開活用・普及啓発を3本柱とし、その運営管理を財団が行っている。平成13年度には約1万8千人の利用者があり、発掘調査の成果を活用した体験学習の場として、県民に着実に定着しつつある。一方、金沢市、松任市、羽咋市、野々市町等の市町村においても体験発掘、出前考古学講座、縄文土器づくりなどの愛護普及事業が積極的に実施され、参加者も多く好評で、県民が文化財行政に何を求めているかを、原点に帰って考える段階にきていることを示している。

今、埋蔵文化財担当職員がもっとも精力を傾けている部分は、発掘調査や報告書の執筆である。その間をぬっての遺跡説明会等の愛護普及活動は厳しいものがあるが、その努力を惜しんではならない。今後、担当職員に求められるのは、遺跡の持つ地域史的価値を見抜く専門的見識は当然であるが、



遺跡発掘体験教室（千代・能美遺跡）

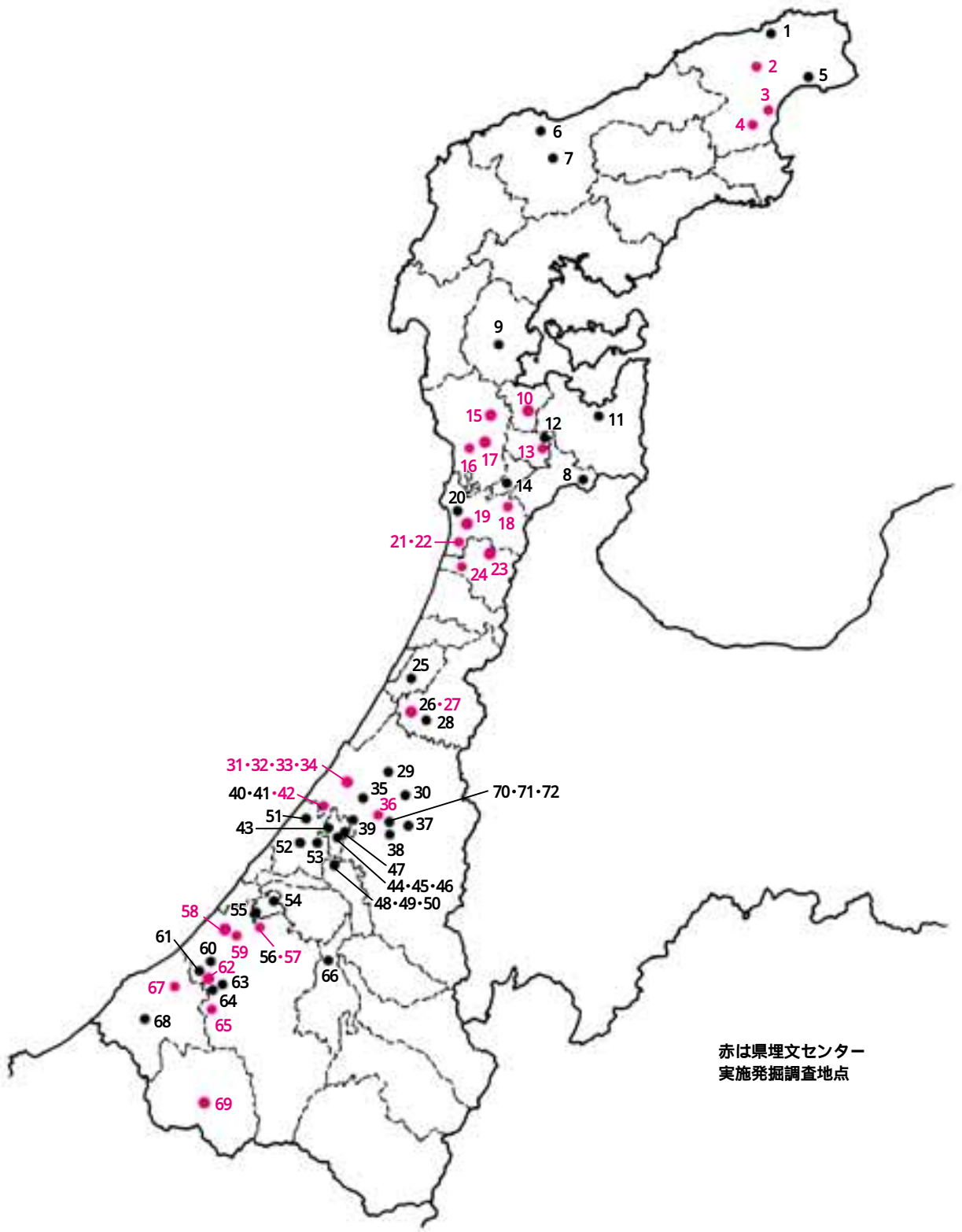
保護普及事業における指導者、さらに行政マンとしての社会的経済的バランス感覚である。敢えて極論するなら単なる技術者や遺跡や遺物の研究だけに没頭する職員は、発掘調査量が減少すれば、文化財保護行政にとって、もはや不要な存在である。また、担当職員としての経験を積んだ教員は、考古専攻者がなかなか出来ない、学校現場との連携等を担う積極的な問題意識と力量を持っている。今後、センターの学習機能を強化するためには貴重な人材であり、積極的に学校現場との人事交流を進めるべきである。

なお、埋蔵文化財の発掘調査は、調査を必要とせしめた開発事業者が負担するいわゆる「原因者負担」で行われている。財団法人は、事業者からの調査受託費に運営費を含め、その中で調査成果の公開等の啓蒙普及事業を発掘調査と一連のものとして位置づけ実施してきた。調査受託費の減少に伴いこうした方法も困難となるであろう。これまで保護部局は、開発事業の原因者に対し、遺跡が開発行為で破壊される代償として、その記録保存に係る経費の負担について協力を求め、原因者はそれに応じてきた。明確な調査基準と積算根拠が求められている現在、少なくとも、発掘調査された膨大な出土品、調査資料を活用し、県民にその成果を還元する経費は原因者に依存するのではなく、そのための人件費を含め文化財保護部局で負担するのは当然である。調査面積の減少が、調査担当職員の削減や啓蒙普及事業等の弱体化を生むとするなら、今まで築き上げてきた石川県の埋蔵文化財保護行政は開発事業に依拠した幻想にしかすぎなかったことを証明することとなる。

現場での発掘調査が落ち着きを取り戻した現在、今までの埋蔵文化財行政をその財政的基盤を含め、本来の姿に立ち返って見直す必要がある。「掘るための埋蔵文化財センター」から「研究及び保存活用のための埋蔵文化財センター」に転換を図らねばならない。かつて石川県が県立のセンターを財団法人化したおり、都道府県設置の最後の財団と噂されたが、開発事業に依拠した発掘調査を主たる事業とする財団としての埋蔵文化財センターは、もはや必要としない時代は近いのかもしれない。



現地説明会の様子（畝田ナベタ遺跡）



掲載遺跡位置図 ( S = 1 / 800,000 )

平成13年度 県内遺跡発掘調査一覧

No.	遺跡名	所在地	調査面積 ㎡	調査期間	主な時代					備考	
					縄文	弥生	古墳	古代	中世		近世
1	馬繰カメガタン窯跡	珠洲市馬繰町元飯田	20	H13.11.1~H14.3.26							範囲確認調査
2	だいじょう寺畑遺跡	珠洲市若山町大坊	1,900	H13.5.18~8.31							
3	南方遺跡	珠洲市上戸町南方	260	H13.8.3~9.5							
4	柏原A遺跡	珠洲市宝立町柏原	300	H13.6.4~8.2							
5	正院ショウズ遺跡	珠洲市正院町正院	650	H13.7.2~8.31							
6	宅田上野山遺跡	輪島市宅田町	12,000	H13.7.5~8.28							
7	市ノ瀬遺跡	輪島市市ノ瀬町	270	H13.9.3~9.18							
8	石動山	鹿島郡鹿島町	140	H13.9~11							史跡整備
9	上町マンガラ遺跡	鹿島郡中島町字上町	1,000	H13.5.29~12.20							
10	吉田南側B遺跡	鹿島郡田鶴浜町吉田	550	H13.11.9~12.14							
11	万行遺跡	七尾市万行町	3,700								
12	川田古墳群	鹿島郡鳥屋町字川田									史跡整備
13	新庄遺跡	鹿島郡鳥屋町新庄	80	H13.11.6~11.14							
14	テラダヤチ遺跡	鹿島郡鹿西町金丸	500	H13.3.26~7.31							
15	館開野開遺跡	羽咋郡志賀町館開	1,200	H13.9.5~11.12							
16	末吉館畑遺跡	羽咋郡志賀町末吉	180	H13.5.8~5.18							
17	穴口遺跡	羽咋郡志賀町穴口	720	H13.9.7~10.12							
18	四柳ミッコ遺跡	羽咋市四柳町	400	H13.5.8~7.4							
19	東の場タケノハナ遺跡	羽咋市東の場町	2,000	H13.10.4~H14.1.8							
20	寺家遺跡	羽咋市柳田町、寺家町	67	H13.5.30~10.2							範囲確認調査
21	兵庫遺跡	羽咋市兵庫町	330	*							
22	粟生B遺跡	羽咋市粟生町	150	*							
23	杉野屋専光寺遺跡	羽咋郡志賀町杉野屋	4,000	H13.5.8~12.21							
24	荻島遺跡	羽咋郡志賀町荻島	240	H13.6.6~7.10							
25	鉢伏茶白山遺跡	河北郡宇ノ気町鉢伏	1,000	H13.7.9~H14.3.26							
26	加茂遺跡	河北郡津幡町字加茂	150	H13.10.11~12.26							範囲確認調査
27	加茂遺跡	河北郡津幡町字加茂	8,000	H13.5.15~H14.1.4							
28	北中条遺跡	河北郡津幡町字北中条	7,800	H13.5.21~H14.3.29							
29	神谷内古墳群	金沢市神谷内町	1,500	H13.16~9.21							平安時代の火葬土坑
30	東長江遺跡	金沢市東長江町、御所町	400	H143.1~3.28							平安時代の河跡と中世の建物跡
31	畝田・寺中遺跡	金沢市畝田西他	11,000	H13.4.11~12.20							
32	畝田C遺跡	金沢市畝田西他	2,800	H13.5.1~9.27							
33	無量寺C遺跡	金沢市無量寺町	800	H13.6.22~10.15							
34	畝田ナベタ遺跡	金沢市畝田西他	16,200	H13.5.10~12.20							
35	駅西本町1丁目遺跡	金沢市駅西本町1丁目	500	H13.12.20~H14.1.18							住居跡、土坑、河跡
36	金沢城跡	金沢市丸の内	2,500	H13.4.23~7.19							
37	田上南遺跡	金沢市田上町	2,020	H13.6.11~10.4							貼床、カマド跡の残る壁穴建物
38	大桑B遺跡	金沢市大桑町	500	H13.10.15~11.6							大型の石組井戸
39	横川・本町遺跡	金沢市横川3丁目	400	H13.4.13~5.21							弥生時代の墓地
40	中屋サワ遺跡	金沢市中屋町、福増町	15,000	H13.6.4~H14.3.27							縄文時代の漆製品
41	中屋東遺跡	金沢市中屋町	400	H13.9.19~11.7							東大寺領横江庄関連遺跡
42	中屋遺跡	金沢市中屋町他	140	H13.4.25~6.14							
43	三日市A遺跡	石川郡野々市町三日市町	4,230	H13.10.15~H14.3.27							
44	三納アラミヤ遺跡	石川郡野々市町字三納	1,150	H13.7.9~10.29							
45	三納トヘイダゴシ遺跡	石川郡野々市町字三納	4,300	H13.4.9~11.30							
46	三納ニシヨサ遺跡	石川郡野々市町字三納	550	H13.10.30~11.30							
47	横川・本町遺跡	石川郡野々市町本町1丁目	220	H13.4.10~4.23							
48	部入道A遺跡	石川郡鶴来町部入道町	930	H13.5.9~10.11							
49	部入道B遺跡	石川郡鶴来町部入道町	1,420	H13.5.9~10.11							
50	部入道C遺跡	石川郡鶴来町部入道町	1,313	H13.5.9~10.11							
51	宮永B遺跡	松任市宮永町	170	H13.5.25~5.31							
52	出城城跡	松任市成町	400	H13.7.30~8.31							
53	乾三月田遺跡	松任市乾町	450	H13.10.19~11.20							
54	秋常山古墳群	能美郡寺井町字秋常	600	H13.6.23~11.16							史跡整備
55	小長野C遺跡	能美郡寺井町字小長野他	600	H13.10.9~11.21							
56	千代・能美遺跡	小松市能美町	1,400	H13.10.3~H14.1.31							
57	千代・能美遺跡	小松市能美町	2,000	H13.6.8~10.15							
58	小松城跡	小松市丸内町	1,570	H13.5.8~11.30							
59	幸町遺跡	小松市幸町	700	H13.6.25~8.8							
60	串町遺跡	小松市串町	940	H13.10.15~12.7							
61	矢田借屋古墳群	小松市月津町	1,478	H13.7.16~H14.3.26							
62	矢田野遺跡	小松市矢田野町	1,200	H13.8.20~11.15							
63	戸津八幡神社前遺跡	小松市戸津町	85	H13.10.11~11.22							
64	二ツ梨豆岡向山古窯跡	小松市二ツ梨町	800	H13.10.11~H14.3.26							
65	那谷B遺跡	小松市那谷町	500	H13.10.19~11.20							
66	鳥越城	鳥越村	300	H13.7.2~12.10							史跡整備
67	猫橋遺跡	加賀市片山津町	2,000	H13.5.28~8.31							
68	南郷堂林麩寺跡	加賀市南郷町	430	H13.6.18~10.15							範囲確認調査
69	九谷A遺跡	山中町字九谷町	1,650	H13.8.28~12.14							
70	宝町遺跡受水槽地点	金沢市宝町	260	H13.4.24~5.7							
71	宝町遺跡保険学科校舎 地点	金沢市宝町	1,581	H13.4.10~6.29							
72	宝町遺跡中央設備室 地点	金沢市宝町	351	H13.7.2~7.27							

# 平成13(2001)年度下半期の発掘調査

調査部長 小嶋芳孝

平成13(2001)年度は、県教委から24件の発掘調査と40件の出土品整理事業を受託した。調査面積の総計は、63,370㎡である。内訳は、建設省(国土交通省)事業に伴う調査が3件、県農林水産部関係が13件、県土木部他が8件である。本書では9～12月の調査を主に紹介する。

志賀町館開野開遺跡では、14～15世紀の館跡を検出している。ほ場整備事業で掘削される範囲に限定された調査のため全貌を把握できなかったが、薬研堀や箱堀が建物群を囲んでいたことが判明している。この地区は中世徳田氏の拠点と伝えられており、本遺跡が居館跡だった可能性が高い。当初は排水路だけに限定した調査だったが、田面造成工事で削平される箇所でも建物跡や堀跡が現われ、遺跡の範囲は当初の想定を大きく超えて広がっていることが明かとなった。文化財課と協議の結果、田面工事については造成による削平は現状以上に深くならないので、遺構上面を記録して埋め戻すこととなった。

羽咋市東の場遺跡は弥生時代後期の環濠集落跡で、住居跡を10棟以上検出している。邑知瀧周辺の弥生時代後期社会を考える上で、重要な遺跡である。

志雄町杉野屋専光寺遺跡は、志雄町教育委員会が1996年に遺跡の東半部を調査して井戸や掘立柱建物・「東院寺」と墨書した土器や軒丸瓦などが出土している。今回の調査では回廊を思わせる南北に長大な建物を検出したほか、県内の古代遺跡では例を見ない一辺30センチを越える角柱を用いた建物も検出している。また「東院寺」と墨書した土器も出土している。加賀から能登に伸びる古代道路が、この遺跡の付近で能登国府へ向かう道と気多神社から福良津へ向かう道・越中国府へ向かう道に分岐する三叉路になっていたと推定しており、古代能登の交通の要衝に立地した古代寺院の可能性が高い。

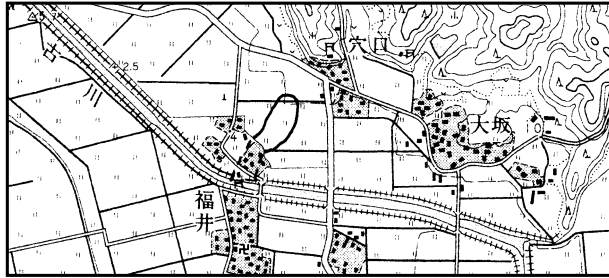
金沢西部第二土地区画整理事業に係る調査では、畝田寺中遺跡で古墳時代中期～後期の溝や河跡、奈良時代の建物跡などを検出している。畝田ナベタ遺跡では二×九間の東西棟と五×三間の総柱建物など、大型建物が集中する地区を調査した。大型建物群の北部には南北に連なる建物群があり、長倉の可能性も考えている。この建物群の東を区切る溝から、金箔貼帯金具が出土している。詳細の検討は前号に記したが、契丹または渤海で製作された可能性が高い資料と考えている。今年度の調査により、畝田ナベタ遺跡は平安前期の港湾周辺に配置された官衙的な遺跡の可能性が一層高まった。無量寺C遺跡は畝田ナベタ遺跡の北にあり、9世紀初頭の二×五間の東西棟と二×三間の総柱倉庫を検出している。この遺跡では以前に井戸なども検出されており、加賀国府津と推定される戸水C遺跡の周辺に配置された初期臨海型荘園の実体を探る上で重要な調査となった。

小松市矢田野遺跡では、7世紀第 四半期のオンドル付設住居跡を検出している。オンドル付設住居が小松市額見町遺跡だけでなく矢田野台地にまで広がっていたことが明らかになり、江沼地域における渡来集団のあり方を考える上で重要な調査となった。

あなぐち  
穴口遺跡

所在地 羽咋郡志賀町穴口地内  
調査面積 720m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年9月5日～平成13年10月12日  
調査担当 宮川勝次 加藤克郎



遺跡位置図 ( S = 1 / 25 ,000 )

穴口遺跡は志賀町を南西方向に流れる於古川沿いの微高地上に所在する。調査では、弥生時代～中世の遺構・遺物を確認しており、特に弥生時代は中期から後期にかけての土器が多量に出土しており、甗、壺、高坏などの他に、山陰系甗もみられた。また、竪穴住居2棟や多数の土坑、溝などを確認し、建物柱穴には、柱根や礎板が遺存していた。中世は曲物の井戸を確認しており、土師皿が曲物内に据え置かれた状態で出土している。その他、古墳前期の甗、古代の須恵器、石鏃や砥石などがみられた。近接して縄文時代中期頃の穴口貝塚が存在する。

(宮川)



完掘状況



竪穴住居跡



壺出土状況



高坏出土状況

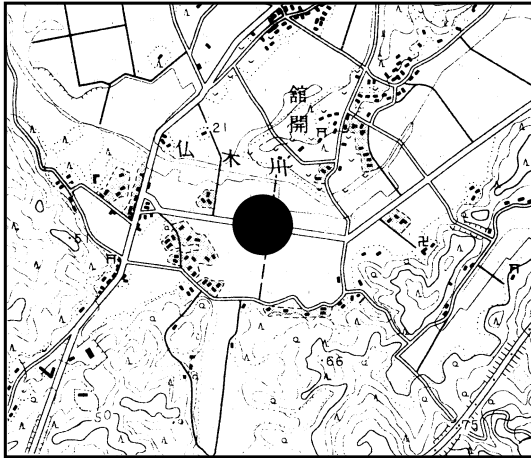


礎板出土状況

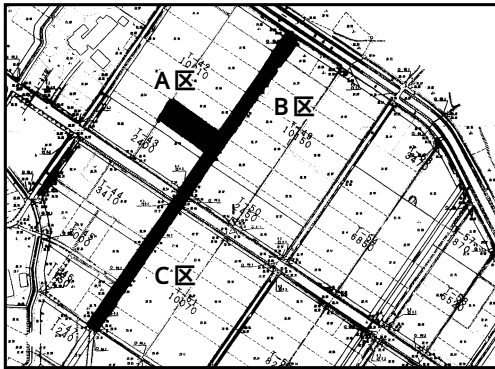
たち びらき の びらき  
館 開 野 開 遺 跡

所在地 羽咋郡志賀町館開地内  
調査面積 1,200m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年9月5日～同年11月12日  
調査担当 久田正弘 大西 顕 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 6,000)

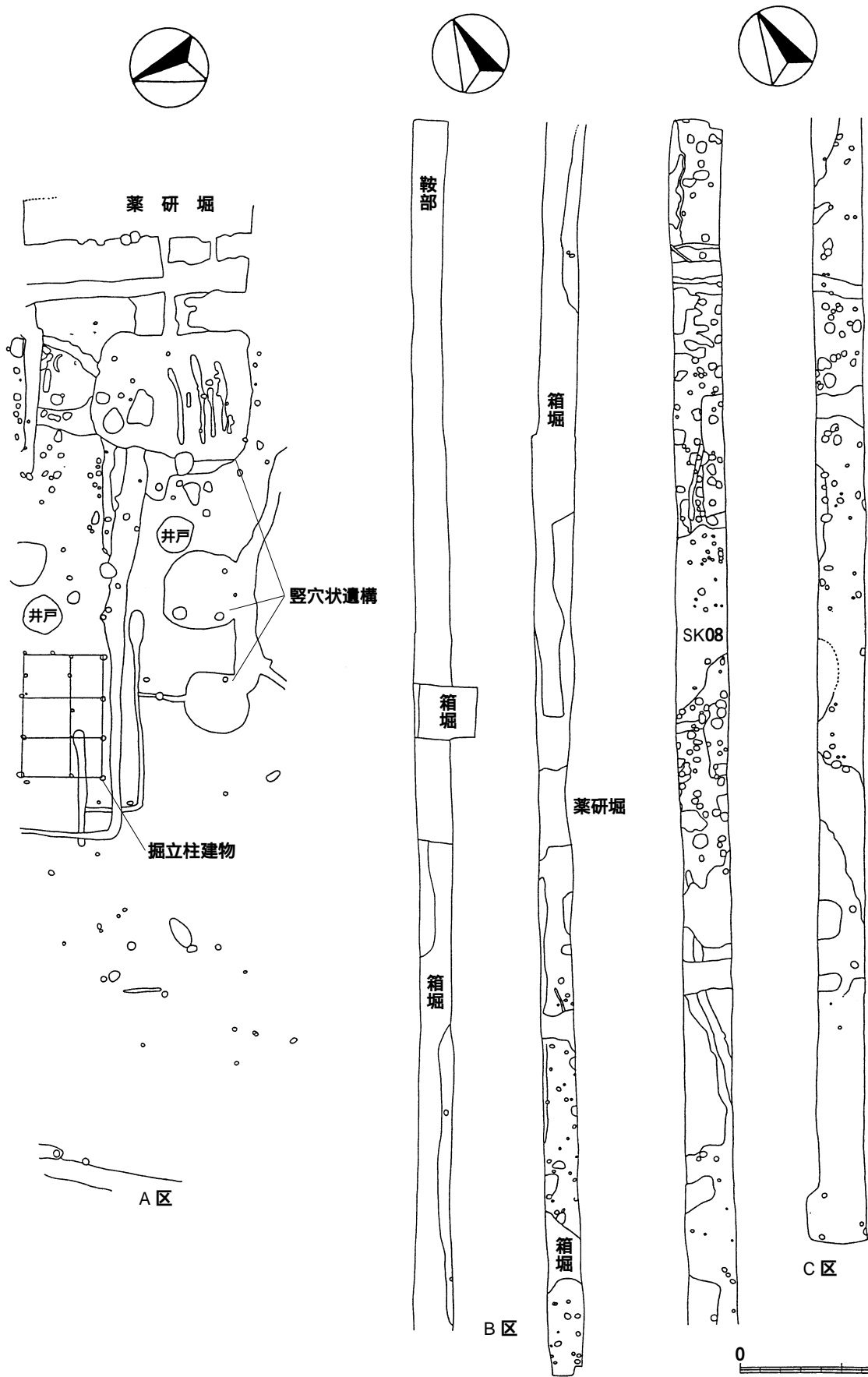
館開野開遺跡は遍照岳や眉丈山系のなだらかな丘陵地に囲まれた小盆地内に位置し、米町川の支流仏木川によって形成された沖積地の微高地上に立地する。14世紀～15世紀を中心とした居館跡であり、本調査は県営ほ場整備事業（土田地区）に係る発掘調査である。

A区では堀、竪穴状遺構、掘立柱建物、溝、井戸等を検出した。堀は幅1.8m、深さ1.3mを測り、V字状の断面を呈する薬研堀である。埋土は大きく5層に分かれ、暗灰色粘土の自然堆積層、褐色粘土の人為的埋土層、黒灰色粘土の腐植物層、淡褐色粘土の人為的埋土層、淡灰色粘土の自然堆積層の順で堆積していることを確認した。竪穴状遺構は隅丸方形と円形の2種類を確認した。隅丸方形の竪穴状遺構は1辺8m、深さ20cmを測る。周辺から多量の鉄滓が出土しており、鉄製品を作るときの作業場ないし倉庫と考えられる。円形の竪穴状遺構は直径4m、深さ20cmを測る。幅50cm、深さ10～20cmの溝と連結しており、両者は同時期に機能し、互いに密接な関わりをもっていたことが窺える。円形の竪穴状遺構から珠洲焼、鉄滓等が出土し、溝からは完形の土師皿が伏せた状態で出土している。

掘立柱建物は3間×2間を測る。その南側をL字状に曲折する溝が隅丸方形の竪穴状遺構へと続く。幅30cm、深さ10～20cmを測り、排水溝ないし区画溝と考えられる。井戸は木や石の枠のない素掘りのものであった。隅丸方形・円形の竪穴状遺構、掘立柱建物の各遺構の脇で確認している。掘立柱建物に近接した井戸は直径2m、深さ2.7mを測り、略円形を呈する。井戸の底面から、口縁を一部欠損したほぼ完形の珠洲焼のすり鉢が出土した。井戸祭祀関連遺物の可能性がある。

B区では堀、溝、ピット等を検出した。堀は薬研堀と箱堀を確認した。箱堀は幅2.7m、深さ70cmを測り、逆台形状の断面を呈する。埋土は大きく3層に分かれ、腐植物を含む濁青灰色粘土の自然堆積層、黒灰色粘土の腐植物層、暗灰色粘土の人為的埋土層の順で堆積していることを確認した。堀に囲まれた区画はB区東方向に延びており、東西120m、南北50mを測る大規模なものであった。堀の区画内は調査区外であったため調査できなかったが、規模からみると、以前この地を治めていたと伝えられている中世の豪族徳田氏関連の遺構である可能性は高いと考えている。B区北端は鞍部であり、箱堀と連結している。C区では土坑、溝、ピット等を検出した。SK08は南北径8m、深さ40cmを測る。C区の東西方向に延長しており、正確な平面規模は確認できなかった。緩やかに落ち込む皿状の断面を呈し、土師皿、陶磁器、下駄、漆椀等、多量の遺物が出土している。C区南端の遺構密度は低く、集落の縁辺部と考えられる。

(谷内)



調査区全体図 (S = 1 / 300)

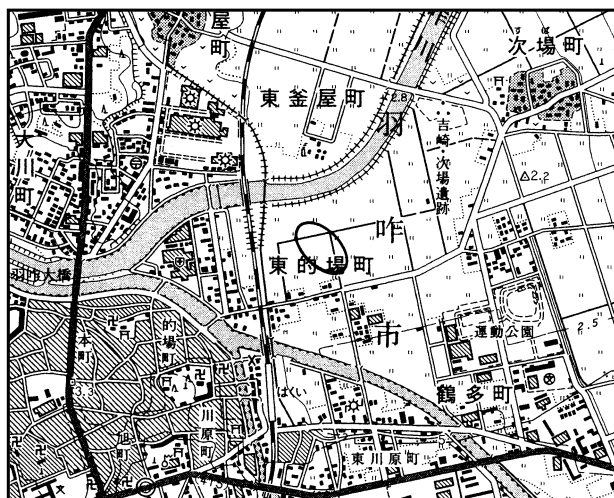
## 東的場タケノハナ遺跡

所在地 羽咋市東的場地内

調査期間 平成13年10月4日～平成14年1月8日

調査面積 2,000m<sup>2</sup>

調査担当 宮川勝次 加藤克郎



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

東的場タケノハナ遺跡は、羽咋川と子浦川との合流点に程近い平野部の微高地上に立地しており、現在の海岸線からは約2 km 内陸側に位置している。発掘調査は農免農道整備事業を原因として行われ、弥生時代から中世にかけての生活の痕跡が確認された。とりわけ弥生時代後期を中心とする時期の環濠集落である可能性のある集落域が検出されたことが注目される。

集落を区画する溝は南北双方3条ずつで確認されている。南側 (SD32・33・39) が幅約280 cm、深さ56cm、北側 (SD7・16・17) が幅200 cm、深さ40cmの規模である (いずれも平均

値)。これらの溝からは弥生時代後期の土器を中心に出土しており、特に南側溝からは土器や木製部材が集中して出土している。南北の溝に挟まれた区域は直線距離で約100mを測り、多角形に柱を配置した竪穴系建物10棟以上、掘立柱建物2棟以上、布掘建物1棟の他、土坑や多数のピットを検出しており、遺構密度はかなり高い。遺物としては多量の弥生土器、石鏃、磨製石斧、打製石斧、磨製石剣、石包丁などが出土している。その他勾玉、勾玉の未製品、石鏹、玉製品の原材料である綠色凝灰岩なども出土していることから、本遺跡において玉作りが行われていたことが窺える。さて南側溝SD32以南では建物跡などは確認されていない。地形的にも低く、現在でも常に湧水があることから、弥生時代当時は低湿地が展開していたと考えられる。一方北側環濠SD17以北でも遺構密度がかなり低くなっていることから、居住域の中心はSD16とSD39とに囲まれた区域であることが想定される。

以上のように弥生時代の遺構は後期を中心としているが、中期の土坑なども散見される。SK92からは弥生時代中期の甕や壺のほか骨片が出土しており、その近辺からも骨片が出土している遺構が認められた。弥生時代より新しい時期の遺構としては古墳時代中期の土坑、奈良時代の溝、曲物を水溜りに利用した中世の井戸などを検出している。

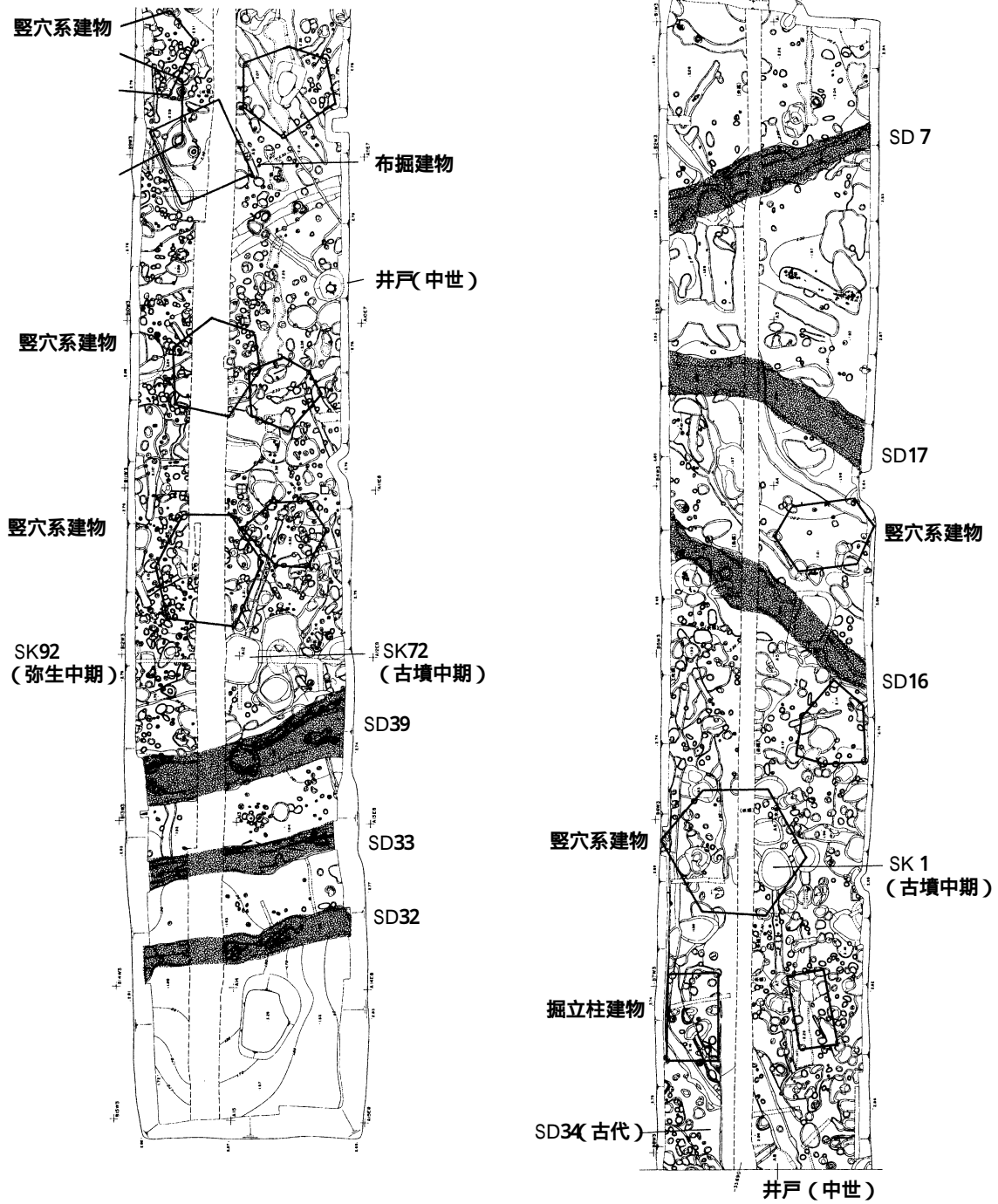
ところで本遺跡の北東約500mには、口能登地域の弥生時代中期拠点集落として著名な吉崎・次場遺跡が立地している。本遺跡の盛期が弥生時代後期であることからその関係が注目され、邑知漏や羽咋川水系周辺集落の消長を考える上でも大変興味深い遺跡である。 (加藤)



SD32 遺物出土状況



SK92 遺物出土状況



遺構概略図 (S = 1 / 400)

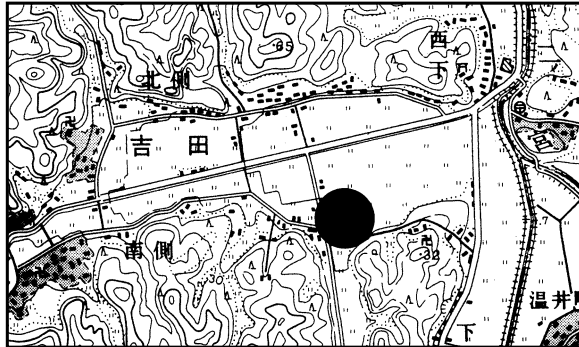
## 吉田南側B遺跡

所在地 鹿島郡田鶴浜町吉田地内

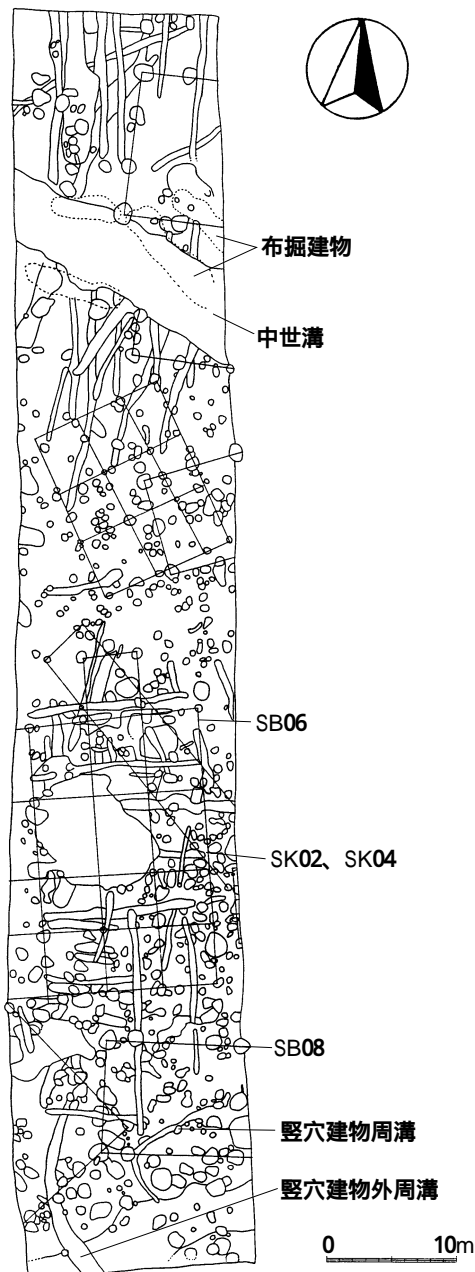
調査期間 平成13年11月9日～同年12月14日

調査面積 550m<sup>2</sup>

調査担当 久田正弘 大西 顕 谷内明央



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区全体図 (S = 1 / 300)

吉田南側B遺跡は眉丈山系の丘陵裾部に立地する古墳時代～中世の集落遺跡である。本調査は県営ほ場整備事業（相馬地区）に係る発掘調査である。

布掘建物を2棟検出した。長さ3～4m、幅50cm、深さ40cmを測る溝が1～2mの間を置いて2本平行する。中世の溝に切られており、柱穴、枕木、礎板、遺物等は確認できなかった。竪穴建物の周溝及び外周溝を検出した。周溝は幅30cmを測るが、北西に近い経路で走り北東方向にL字状に曲折した後、幅80cmに広がっていく。深さは10cmと浅く、削平されたものと考えられる。外周溝は幅1m、深さ10cmを測り、弓状に緩く曲折しながら北に走る。遺構は途中で切れており、削平されたものと考えられる。外周溝から古墳前期と思われる多量の土器と磨製石斧が出土している。

切り合う2基の土坑を検出した。SK02は径2.6m、幅1.7m、深さ40cmを測り、不整形円形を呈する。SK04はSK02より古く、径4.5m、幅4m、深さ50cmを測り、楕円形を呈する。両土坑とも埋土は大きく2層に分かれ、上層は焼土を多量に含む暗灰褐色粘土の自然堆積層、下層は暗灰色粘土と黄灰色粘土の人為的埋土層であった。両土坑から奈良時代の土器が多量に出土している。掘立柱建物を9棟検出した。北西-南東方向に主軸をとる総柱建物を2棟、東西に主軸をとる建物を7棟確認した。SB06は庇付であり、南北2面分を確認したが、東西の規模は調査区外のため確認できなかった。さらに北側で柱穴を検出し、孫庇の可能性もある。SB08の桁の柱間は1mと3mを測り、他の建物構造との差異が目立つ。掘立柱建物に伴う遺物は少なく、詳しい時期の特定には至っていない。

本遺跡は遺構密度が高く、遺物の時期幅も広く認められ、居住地としての適性の高さが窺われる。特に庇付建物の検出によって在地有力者の存在を確認できたことは、今回の発掘調査の重要な成果の1つである。 (谷内)

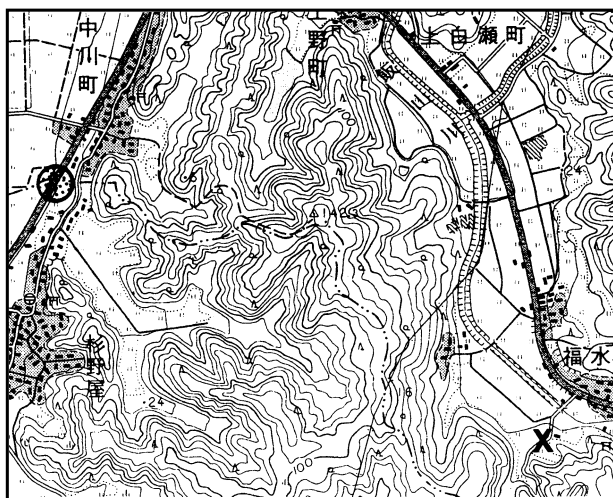
## 杉野屋専光寺遺跡

羽咋郡志雄町杉野屋・羽咋市中川町地内

調査期間 平成13年5月8日～同年12月21日

調査面積 4,000㎡

調査担当 松山和彦 北康典



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区遠景 (西から)



長大な掘立柱建物 (西棟、北から)

羽咋郡志雄町には越中国府から能登国に至る古代の之乎路が通じており、さらに能登国府へは子浦地区から丘陵裾沿いに杉野屋地区を経て北東に向かったと推定される。

弥生～平安時代の複合遺跡である本遺跡はヤベの谷(江下川)と呼ばれる小河川が平野に出ようとする谷口部分を占める。平成8年度の町教委による発掘調査で、平安時代前期を中心とする時期については、「東院寺」・「寺鉢」の墨書土器や軒丸瓦などの出土により寺院に関連した性格が判明している。

その北西側にあたる今回の調査区でも、軒丸瓦や「東院寺」の墨書土器、妻飾状の木製品などの遺物に加え、長大な掘立柱建物や直径35cmの太い心材2本を1対に配した門跡、角柱が残る柱穴といった検出遺構の面からも、一般的な村落とは異なる寺院関連遺跡としての特色がより一層際立つ結果となった。長大な掘立柱建物は約50mの間隔において南北棟が2棟並列し、このうち、西の棟は柱間が1丈(3m)で1×8間以上の規模を誇る(写真下段)。両棟で建替えが認められる。回廊や僧房などの可能性も考慮される注目すべき遺構である。

なお、本遺跡との密接な繋がりが予想される遺跡として、東南1.8kmにある羽咋市福水ヤシキダ遺跡(位置図×印)をあげることができる。昭和43年、奈良時代末～平安時代初期頃に製作された三鈷鏡・錫杖頭・銅椀などの仏具類が偶然に発見され、3年後の小規模発掘の結果、<sup>あか</sup>關伽井とみられる平安時代前期末頃の井戸状遺構の傍らに埋納されていたことが明らかになった。すなわち、杉野屋専光寺遺跡で寺院が営まれた時期とほぼ同じ時期といえる。(松山)

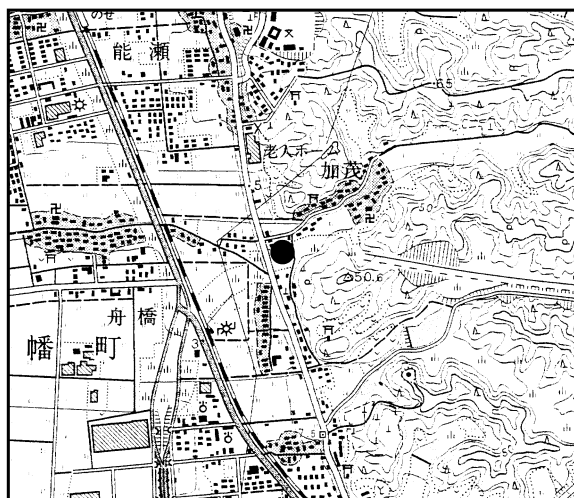
## 加茂遺跡（第7次）

所在地 河北郡津幡町加茂・舟橋地内

調査期間 平成13年5月15日～平成14年1月24日

調査面積 8,000m<sup>2</sup>

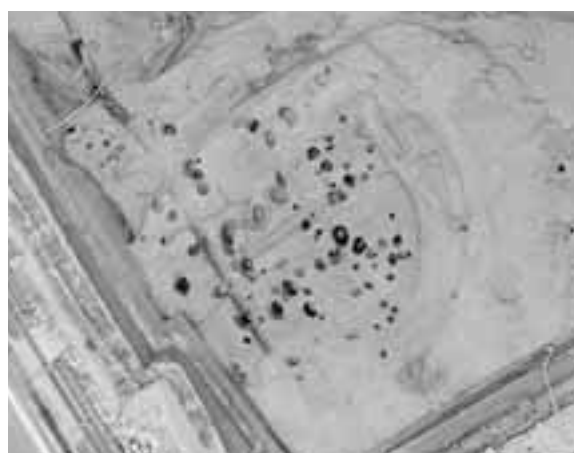
調査担当 本田秀生 座主哲二 湯川善一 林大智 岡田有紀子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



漆紙文書



弥生時代中期の建物跡

津幡北バイパス改築工事に伴う加茂遺跡発掘調査は、今年度で第7次調査となる。今年度の調査区は、前年度調査した県道宇ノ気津幡線東側の調査未完了地(区)、マメダン山地区の裾部分(区)である。

区はさらに宅地横部分にあたる北側調査区、水田部分にあたる南側調査区に分けて調査を行った。

区北側調査区においては、古代の第1面、古墳時代初頭の第2面、弥生時代後期～終末期の第3・4面、弥生時代中期の第5面を調査した。第1面では溝状遺構、柱穴、土坑などを確認した。また、県道から東へ35m程離れた所で径80cm、深さ80cmの円筒形の土坑から、漆紙文書が出土した。漆紙文書には、人名と思われる「公 万呂」や「天長九年本」「承和貳」などの年記や、お米などの数量と思われる「石一斗」などの文字が書かれていた。

第2面では、河道跡、柱穴、土坑を確認した。河道跡からは多量の土器や木製品が出土している。第3面では、溝状遺構、柱穴、土坑を確認した。第4面では、溝状遺構、柱穴を確認した。第5面では加茂遺跡で初めて弥生時代中期の建物跡が見つかった。また、溝状遺構、柱穴、土坑を確認した。

区南側調査区においては、上層(古代)の調査をした。調査区の中央から南側では、畑の耕作痕と考えられる溝状遺構が多数確認され、中央から北側では掘立柱建物、土坑等が検出された。確認できた掘立柱建物は6棟で、すべて2間×2間であるが、長径70cm程の大きな掘方を持つ建物を2棟確認した。その柱穴からは、和同開珎(銅銭)が出土している。また、県道から東へ40m付近で、古代の遺構の広がりごとぎれ、その東側では水田跡を確認した。

区では、11世紀初頭の水田跡と土坑5基、溝1条を確認した。また、確認トレンチにより下位に遺構面の存在を確認している。(座主)

## 金沢西部第二土地区画整理事業に係る発掘調査

所在地 金沢市畝田西・中・東、無量寺町地内

調査面積 30,800㎡

畝田・寺中遺跡他2遺跡 11,000㎡

畝田C遺跡 2,800㎡

無量寺C遺跡 800㎡

畝田ナベタ遺跡 16,200㎡

調査期間 平成13年4月11日～12月20日

調査担当 岩崎英雄 岡本恭一 浜崎悟司

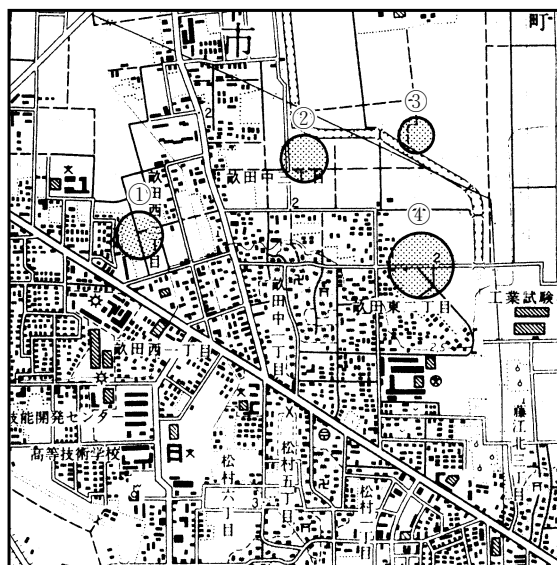
滝川重徳 白田義彦 立原秀明

熊谷葉月 和田龍介 兼田康彦

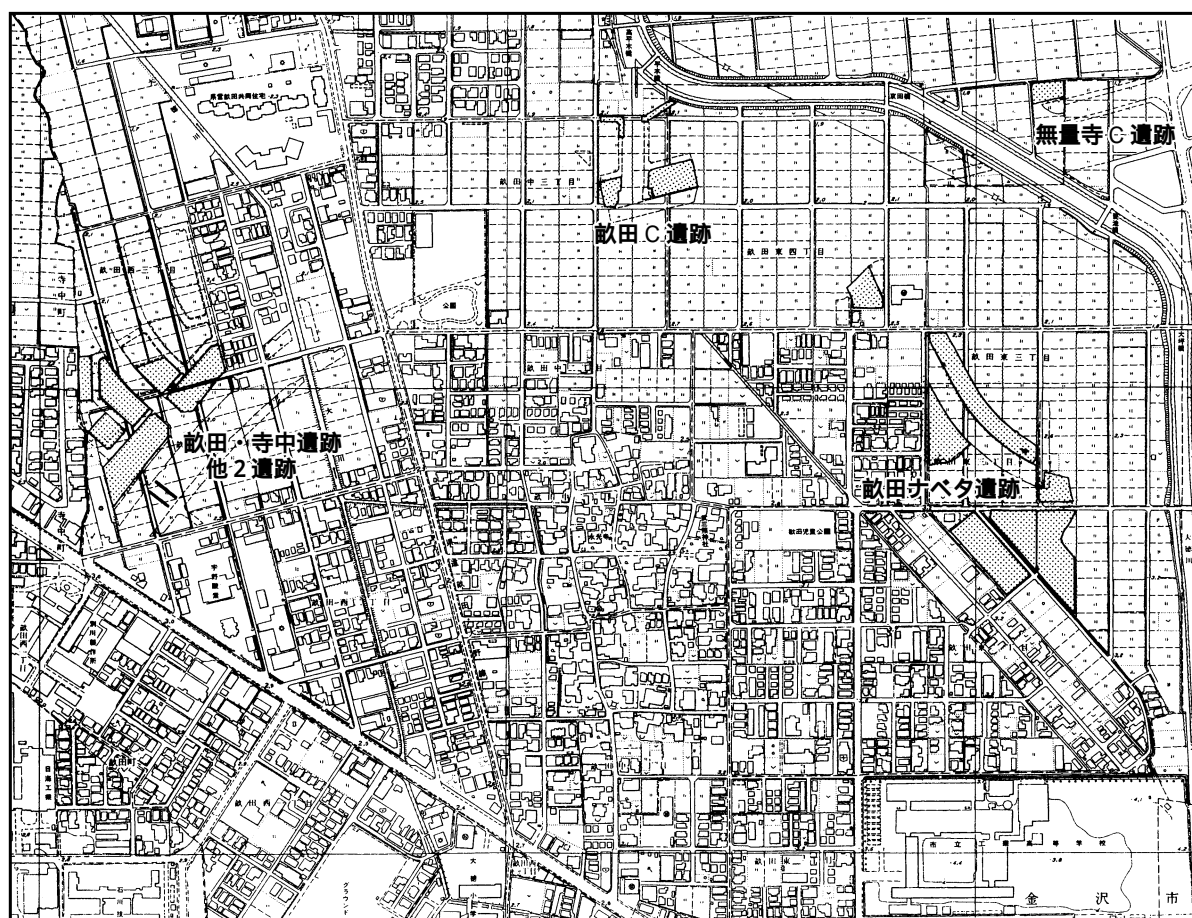
金田哲也 布尾幸恵 菅野美香子

金沢西部第二土地区画整理事業に伴う発掘調査は、上記の4地点を対象に担当の調査部調査第4課において3組5班体制で実施した。調査結果の概要は以下に地点ごとに示す。

(浜崎)



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図

#### 畝田・寺中遺跡、畝田大徳川遺跡、畝田遺跡

金沢市西部の沖積平野に展開した弥生時代から室町時代にかけての集落跡である。平成11年度からの継続となる調査で、略報は当誌第3号、第4号及び第6号に掲載されている。平成13年度調査は調査地点が分散して調査をしており、検出された遺構・遺物も多岐にわたるため、以下、現地調査の際に呼称した地区ごとに概略を記す。

○2区 古墳時代中期～後期の溝4条(内1条の溝の下層には弥生時代末法仏期の遺物を定量含む)、奈良時代の溝4条、中世の条里溝1条、中世の総柱建物2棟以上を検出した。

この内1条の奈良時代の溝からは、郡符・付け札を含む6点の木簡が出土し、過年度調査出土の「津司」墨書須恵器などから見て古代加賀郡の施設が周辺に置かれていた可能性が高い。

Q区 調査区の北東部に古墳時代中期～後期の遺物を多量に含む河道を検出。古墳時代前期の平地式建物2棟以上、古墳時代中期～後期の土器を多量に含む土坑群、古墳時代中期～後期の掘立柱建物6棟以上、奈良時代の掘立て柱建物2棟以上、中世の建物3棟以上、中世の溝4条以上を検出した。また、特異な物としてヒョウタンを収めた土坑が検出された。おそらくヒョウタンの種抜き作業に伴うと考えられる。

その他、滑石製白玉100個近くが出土(覆土の水洗選別による)した土坑もある。

R区 調査区の四分の一がQ区からつづく古墳時代中期～後期の遺物を多量に含む河道。他に弥生時代中期の土坑群、古墳時代前期の平地式建物1棟以上、奈良時代掘立柱建物3棟以上、奈良時代の溝2条、中世の条里溝1条を検出した。

弥生時代中期の土坑群は調査区西部に偏り、S2区へとつづく。

S1区 古墳時代前期の平地式建物2棟以上、古墳時代中期～後期の掘立柱建物2棟以上、古墳時代中期～後期の遺物を含む土坑群、奈良時代の掘立柱建物3棟以上、R区へとつづく奈良時代の溝1条を検出した。

この調査区だけ中世の遺構が検出できていないが、古墳時代中期～後期の土坑が抽出困難なほど切り合っていたため(ほとんど地山が無い)中世の覆土を見落としたものと考えられる。

S2区 弥生時代中期の土坑群、古墳時代前期の平地式建物1棟以上、T字状に分岐する中世の条里溝2条を検出した。

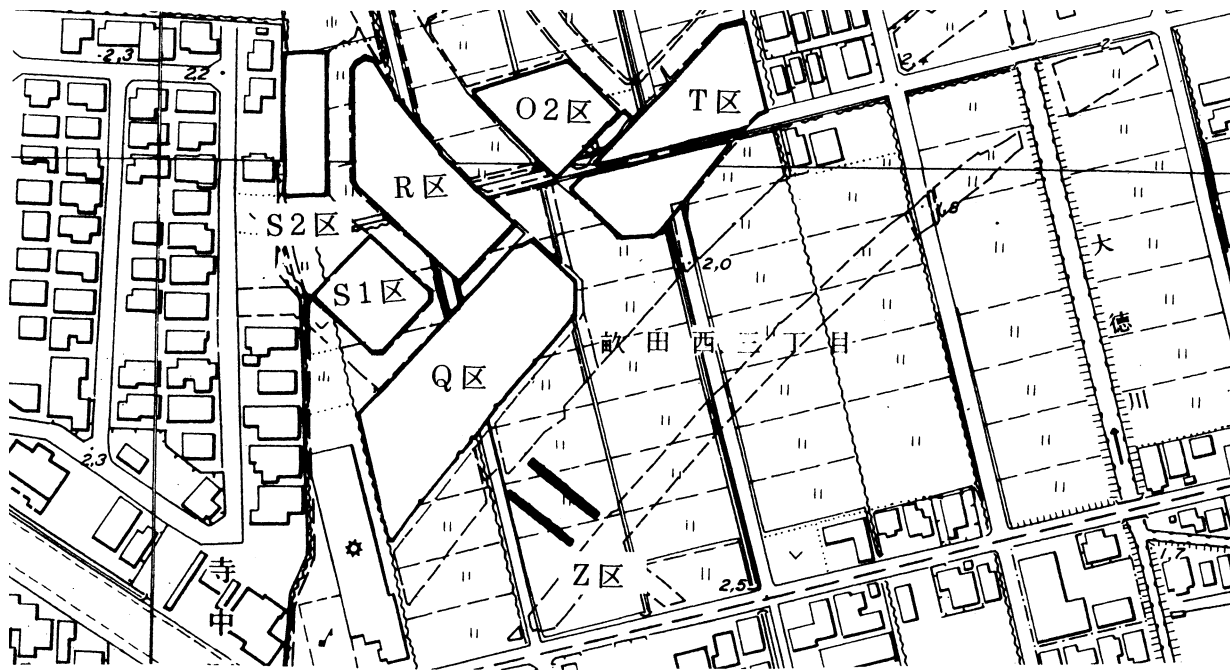
その他、弥生時代中期と考えられるヒスイ製の勾玉が1点出土している。

T区 ○2区からつづく古墳時代中期～後期の溝2条、古墳時代中期～後期の掘立柱建物1棟以上、奈良時代の掘立柱建物3棟以上、中世の掘立柱建物3棟以上、中世の条里溝2条以上、中世の井戸10基以上を検出した。

この内1条の古墳時代中期～後期の溝からは長さ約50cm、最大幅約20cmの準構造船の縦板が出土した。その大きさから見て祭祀用の準構造船と考えられ、有力首長の存在が推測される。

Z区 柱穴、溝などを検出したが、水路部分だけの調査である為詳細は定かでない。

過年度調査の結果と考えあわせると、この地に古墳時代を通して有力首長の存在が考えられ、また、古代加賀郡の施設の存在もその地盤の上に成り立っていたものと推測され、今後の調査の進展により、遠い古代の物語を語れる資料が出てくるであろう。(岡本)



調査区割り図 ( 1 : 2500 )



Q 地区空中写真

### 畝田 C 遺跡

本年度調査区の区割りは右図のとおりである。幅6mの細長いA区とD区、ほぼ長方形のH区とI区からなる約2,800㎡である。本遺跡は前年度までに当センターおよび金沢市埋蔵文化財センターにより数次にわたって調査がおこなわれ、その結果、掘立柱建物、井戸、溝等からなる平安時代の集落跡が確認されている。

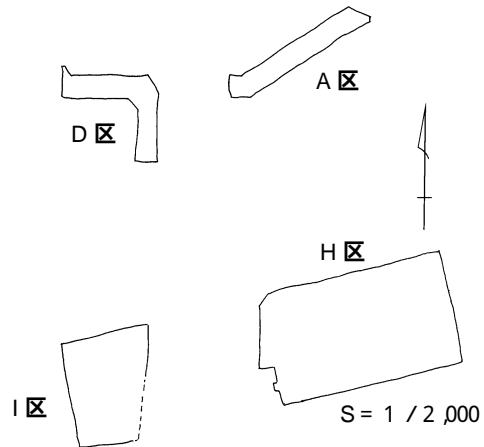
A区では掘立柱建物（平安時代）、土坑（弥生時代）が検出され、調査区西端では、柱根を残す柱穴がいくつか確認された。D区からは同じく弥生時代および平安時代のものと思われる溝等が検出されるとともに、当該溝（平安時代）からは多数の土器片が出土した。H区は西側半分が集落域で、平安時代のものと思われる井戸、土坑等が検出された。東側には遺構はほとんど存在せず、集落域がきれることを確認した。I区でも弥生時代のものと思われる土坑と溝、平安時代の井戸と溝が検出されたが、西側部分は近世のものと思われる河道が占めていて、遺構は検出されなかった。そのほか、H区では緑釉陶器、I区で石器も出土している。

本遺跡の中心は既調査区に存在し、本年度調査区は当集落の縁辺部に位置するものと考えられる。（岩崎）

### 無量寺 C 遺跡

本年度調査区は、平成11年度調査区の北側、ほぼ長方形の約800㎡である。東側は南北に5～6mほど近世以降のものと思われる河道が占める。遺構としては掘立柱建物跡7棟のほか、土坑等が検出された。そのうち、中央やや北寄りの東西棟は2間×5間の大型建物であり、その西側に2間×3間の総柱建物が検出された。これは、大型建物を主屋、総柱建物を付属施設とするひとまとまりの遺構と考えられる。

大型建物の北東側の土坑からはヒョウタンの皮および多数の同種子が出土した。単に捨てたものか、埋納等がおこなわれたのかは不明である。また、同じ土坑からは横櫛も出土した。（岩崎）



畝田 C 遺跡区割図



I区井戸出土状況

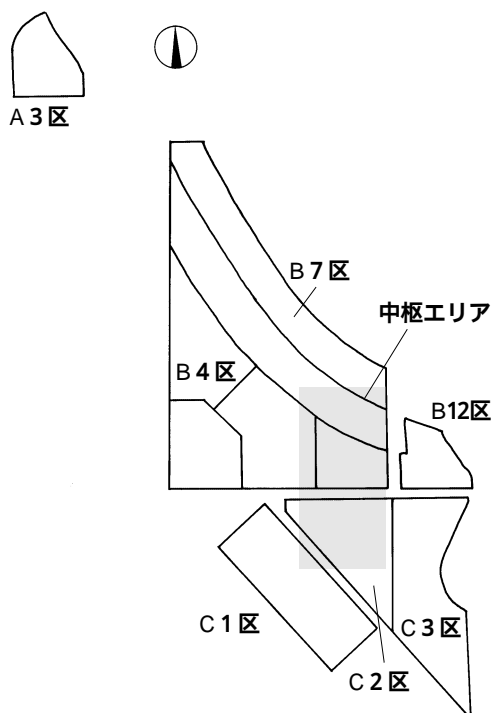


同上井戸の遺物出土状況



無量寺 C 遺跡全景

## 畝田ナベタ遺跡



畝田ナベタ遺跡調査区割 (S = 1 / 8,000)

都市計画道路に隣接する街区 (B4区) と側道部分 (B7・B12区) 遺跡地北側の街区 (A3区) 遺跡地南側の街区 (C1～3区) の調査を実施した。調査面積は16,750㎡である。

A3区では古代の畝跡と考えられる畝状遺構が東西・南北に軸をとって展開しており、他の遺構は希薄であった。過年度の付近の調査では10世紀に入る遺物が散見されることから、南側に展開する9世紀代の建物群とは時期を異にするかもしれない。

掘立柱建物群が展開するB調査区では、過年度調査区の両側を広げる形での調査となった。西側に当たるB4区では建物群が確認されず、小規模な掘立柱建物跡が散発的に分布する状況を呈している。井戸等の遺構も減少しており、建物群の中心からは外れていることが確認された。B7区では北西方向に建物群が展開する状況を確認できたが、南側の最も過密なエリア (仮に「中樞エリア」と呼称) の掘立柱建物跡とは建物軸が異なっていた。建物・柱穴は中心部に匹敵する

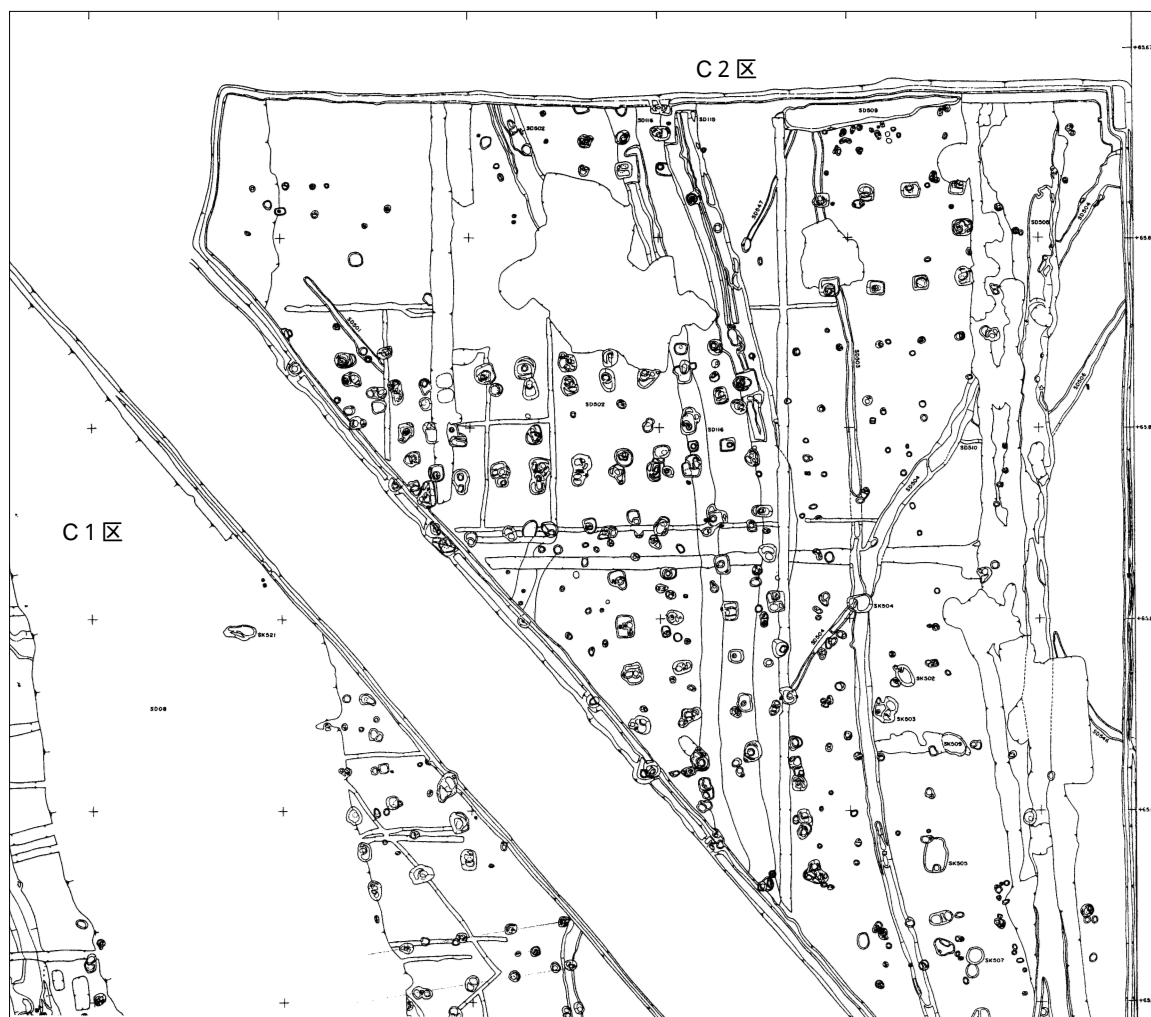
規模を有することから、時期を違えた建物(群)が北側にも存在することを示唆しているといえよう。調査区の南端では、中樞エリアの北限にあたる掘立柱建物跡を確認すると共に、その雨落溝と思われる浅い溝から金箔張青銅製帯金具(巡方)が出土した。本帯金具については本誌第7号(平成13年7月)に概略と写真を掲載してあるので参照されたい。B12区は後世の攪乱による損壊が著しく、状況をつかむのが困難な様相である。掘立柱建物跡は見られず、土坑、小溝が散発的に分布している。一部に残っていた包含層からは「東殿」と墨書された須恵器杯が出土している。

本年度新たに調査が行われたC調査区では、B調査区の建物群が南方向にも展開していることを確認できた。中樞エリアの真南にあたるC2区では、新たに2×8間の大型東西棟と、それに隣接する5×3間の総柱建物のセットを検出した(本誌7号巻頭写真参照)。東西棟は建て替えの痕跡が認められ、建て替え後は桁行1間分拡張されている。本遺跡ではこのような大型の東西棟はこれまでに検出例がなく、逆L字形に整然と配置された総柱建物とのセット関係と併せて、本遺跡における正殿のような役割を果たしていたのではなかろうか。この2棟を境に南側では掘立柱建物跡が希薄になることから、中樞エリアの南限を示すものかもしれない。その西側のC1区では、古代の旧河道SD68が調査区の中央～南西方向に蛇行する状況が見てとれた。河道の肩部には人工的に杭が打たれ、調査区南端では浅い淀み状の掘り込みが形成されていることから、船着場のような施設が存在していた可能性をうかがわせている。遺物は墨書土器、牛骨、人形、横櫛などが出土しており、墨書土器では「西」「南三」など、これまでに多量に出土している「東」「東」に対応するかのような墨書を持つものが目を引く。東側のC3区では、C2区からの建物群の展開は確認されなかった。小規模な掘立柱建物跡、井戸などが散発的に分布する状況である。調査区北～東側には包含層が残存するが、遺物量も少ない。

今年度の調査で、畝田ナベタ遺跡の中樞エリアの範囲を大まかだが想定することが可能である。中

枢エリアは南北約100m、東西約50m ほどの半町内に分布しており、柱穴の切り合い状況や建物軸の変化などから2～3回ほど建て直さないし建物配置の変更を行ったことがうかがえる。時期はほぼ9世紀内におさまるが、そのピークは9世紀中頃にあるようである。中枢エリアの北西側には、過密でこそないものの中枢エリアの主要建物に匹敵する規模を持つ建物が確認できた。平成14年度の調査では事業範囲の北端と南端で調査が計画されており、本遺跡の範囲が確認できることが期待される。

(和田)



畝田ナベタ遺跡 C2区 大型東西棟・総柱建物跡 (S=1/400)

## 小松城跡

小松市丸内町地内

調査期間 平成13年5月8日～同年11月30日

調査面積 1,570㎡

調査担当 金山哲哉 松浦郁乃 宮川彩子

小松城跡は加賀藩の第3代藩主前田利常の隠居城として知られ、別名を「浮城」または「芦城」とも呼ばれ、梯川の水を引き入れて作られた堀と、軟弱な砂質土上に盛土し作られた城である。本調査は県立小松高等学校の校舎改築工事に伴うもので、小松城の二の丸にあたる箇所で行った。

調査区は3地区あり、以下各々説明していく。

【A・B区】500㎡を調査し、主な遺構として井戸が7基、建物跡1棟、土坑3基を検出した。

井戸はおおむね16世紀代とみられ、井戸側は全て結桶を使用したものであった。出土品は、土師器皿の他に、箸状木製品や漆器などの木製品が出土している。本調査区は二の丸の北東部にあたり天和三年（1683）の小松御城中絵図では「御作事小屋」の記載が見られる箇所である。

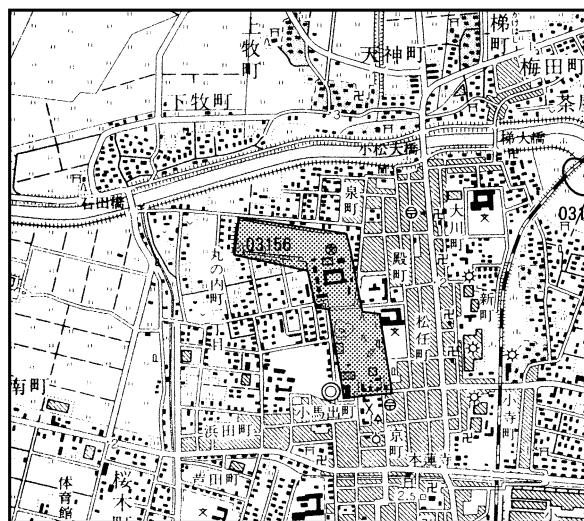
【C区】70㎡を調査した。小穴多数と、北側へと下がる落ち込みを検出した。出土遺物もごく少量で、詳細な性格は不明である。（松浦）

【D区】四方を校舎に囲まれた中庭部分を8つの小区画に細分し、合計約1,000㎡を調査した。遺物を伴う遺構がごく僅かであったことから詳細な時期や性格の明らかな遺構は少ないもの

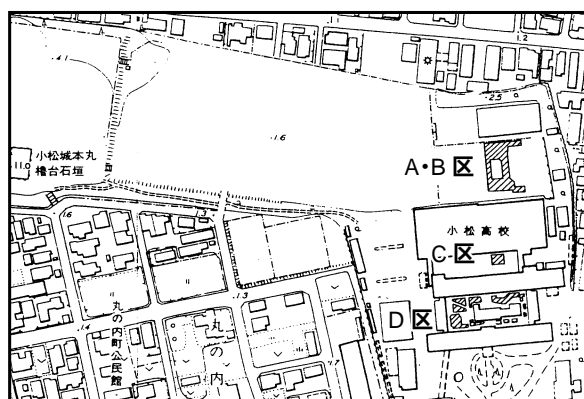
の、大小の土坑のほか溝跡など多数の遺構を検出、出土品については土師皿などA・B区と同様、おおむね16世紀代の資料が出土している。同上の絵図によると、本調査区付近は小松城の二の丸南西部にあたり緑地と園路の区域となっているが、調査ではこの園路に相当するような道路状の遺構は確認されなかった。多数の土坑からは絵図ではみられない建物が当該区域内に存在した可能性も考えられるが、不正形な土坑が多く、明確な建物跡は確認できなかった。

調査は次年度以降も予定されている。今後の調査をとおして当該区域の様相の解明がさらに進むものと期待される。

（金山）



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)



調査区位置図 (S = 1 / 5,000)



A・B区全景



A・B区井戸遺物出土状況

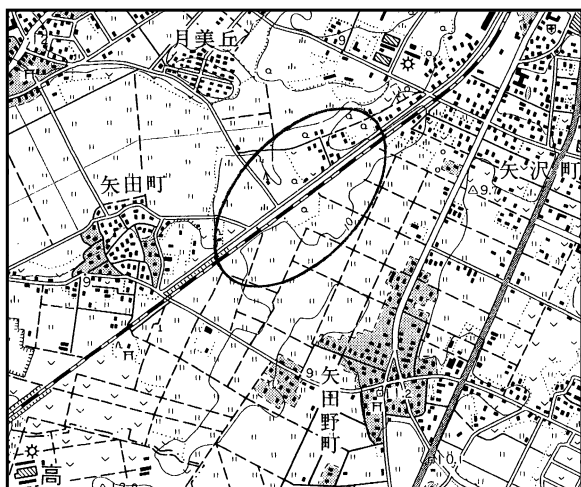


D区(部分)

## 矢田野遺跡

所在地 小松市矢田野町地内  
調査面積 1,200m<sup>2</sup>

調査期間 平成13年8月20日～平成13年11月5日  
調査担当 澤辺利明 荒木麻理子



遺跡位置図 (S = 1 / 25,000)

小松市南部に位置する月津台地周辺は、念仏林遺跡、額見町遺跡、あるいは借屋古墳群、矢田野エジリ古墳など縄文時代以降各時代の遺跡が数多く分布し、特に、特に6世紀前～中葉の古墳が群集する地域として知られる。矢田野遺跡はその中ほど、馬渡川をはさみ対岸北方に念仏林南遺跡を望む台地北西辺に立地する。一帯は、宅地や農地開発等による大規模な削平・埋め立てが行われており、本遺跡においても包含層は削平され、耕土直下で遺構が検出される状況にあった。

なお、調査は県営ほ場整備事業に伴うものであり、平成11年度に続く第2次調査となる。

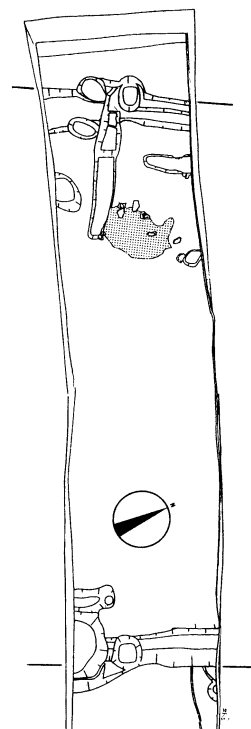
調査の結果、JR北陸本線沿いのD区とこれに直交するB・C区西半部を中心に、6世紀前半から7世紀前半にかけての集落跡が検出された。

A区では風倒木痕2基が確認されたくらいで顕著な遺構は検出されなかった。

B区では竪穴住居跡2棟、土坑1基、大溝1条、東端で径4mの大型風倒木痕が検出された。1号竪穴住居跡は一辺6.5mの方形をなし、壁溝をもつ。2号竪穴住居跡は一辺3.4mの方形小型のものである。大溝は幅約5m、深さ約80cm、東は緩やかに、西は急角度で立ち上がり、7世紀前半代の遺物を伴う。形態からみても、調査区内の遺構配置をみても古墳の周壕にはあらず、掘立柱建物等に付随する施設の可能性が考えられるが、狭小な調査区では決定しがたい。

C区では竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡1棟が検出された。7世紀第2四半期に位置付けられる1号竪穴住居跡は1辺7.5m、方形をなすとみられ、その西壁にL字型カマドを持つ。カマド南袖は長さ1m、北袖は明瞭に検出できなかった。また、焚口の被熱範囲からみて南袖に直交して検出された部分は煙道ではなく、カマド内に突き出た障壁と考えられる。柱穴については、カマド奥と東壁溝中の長方形ピット(40×60cm、深さ60cm)が注意されたが、調査時には柱穴と判断できなかった。しかし、平成14年度当初実施の北壁部分の発掘の結果、北壁に沿っても同規模のピット3個が確認され、竪穴内部の柱の有無は不明なものの、少なくとも側柱を伴う竪穴であることが判明している。2号竪穴住居跡は規模がはっきりしないが方形とみられ、本年度調査区では希な平安時代の土器が出土している。平成14年度調査とあわせ、6間×3間以上の建物と判明した1号掘立柱建物跡は、方形掘方を持ち、柱間約1.6m。時期の特定できる遺物は伴わないが、周辺での出土遺物の時期からみて6世紀中頃から7世紀前半に納まるものと考えたい。

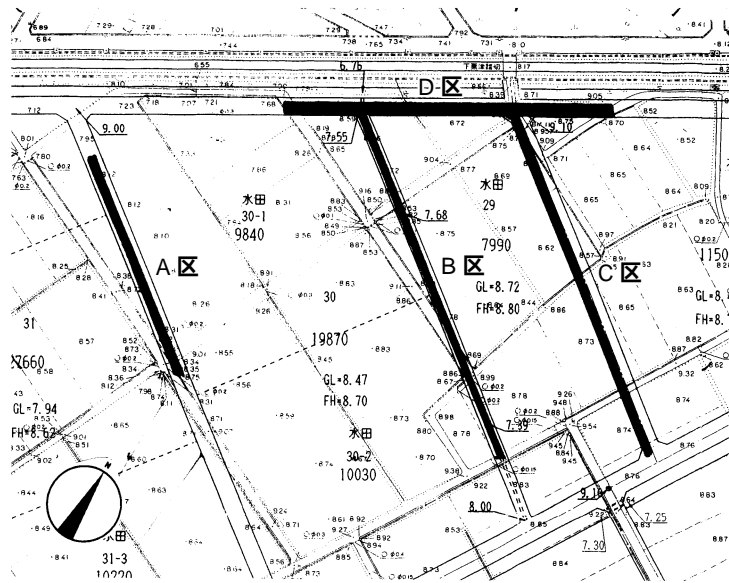
D区では竪穴住居跡2棟、掘立柱建物跡7棟以上、土坑数基を検出した。



C区1号竪穴平面図  
(S = 1 / 100)

1号竪穴住居跡は一辺5 Am の方形を呈し、7世紀初めの遺物を伴う。掘立柱建物跡はプランの確定できるものはないが、桁行を南北方向に向けるものが多いようである。D区では7世紀に入る遺物も認められるが6世紀代が主であり、検出遺構の多くは該期に位置付けられよう。

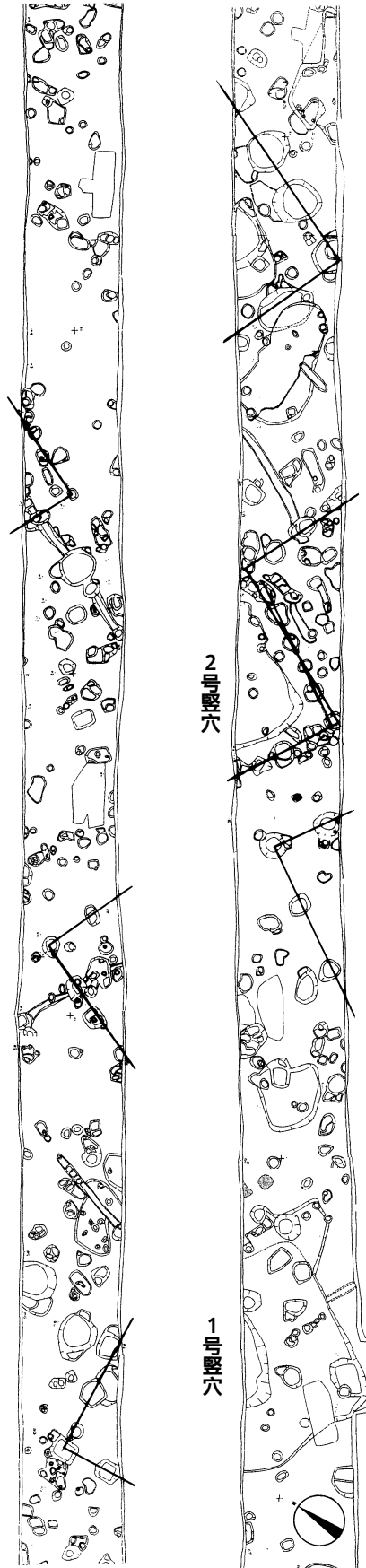
以上が概要であるが、渡来系カマドといわれるL字型カマドが、従来知られた月津台地のみならず対岸の矢田野台地まで広がる事が確認されたこと、7世紀前半代を主体とする念仏林南遺跡をさかのぼり、周辺の古墳に並行あるいは後続する集落跡が検出されたことが本年度の成果として特筆されよう。  
(澤辺)



調査区位置図 (S = 1 / 3,000)



B区全景 (北西から、手前が1号竪穴住居跡)

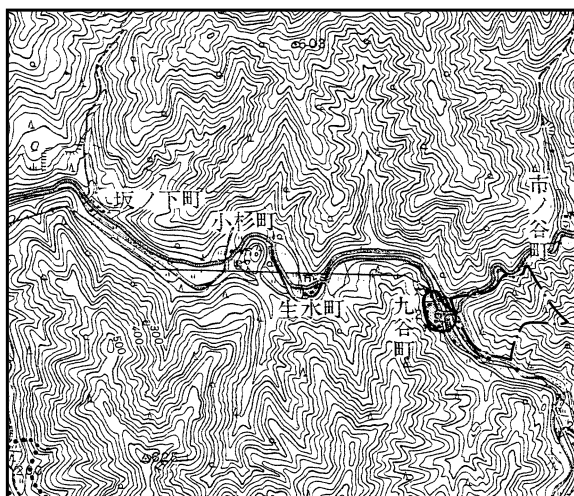


D2~11区平面図 (S = 1 / 200)

## 九谷 A 遺跡

所在地 江沼郡山中町九谷町地内  
調査面積 1,650㎡

調査期間 平成13年8月28日～同年12月14日  
調査担当 松浦郁乃 西田昌弘



九谷 A 遺跡位置図



九谷 A 右岸区調査区 石垣列

それ以前は大聖寺川の氾濫域の一部であったようで、耕作土下は大小の河原石がみられた。（松浦）

山中町九谷町に所在する九谷 A 遺跡は、過去に7次にわたる発掘調査が行われており、戦国期から江戸期にかけての集落跡が確認されている。今年度は、大聖寺川をはさんで左岸部と右岸部の2地点、それぞれ1,300㎡と350㎡の調査を行った。

左岸部の調査区は、中央部約1/3が九谷ダム建設による、近年の集落移転の際に、廃材を投棄した土坑により大きく攪乱を受けていた。調査区の北部と南端部では、比較的良好な状態で遺構が確認された。主要な遺構としては、戦国期末頃とみられる石組みの池状遺構、江戸期の石組み井戸がある。いずれの遺構も周辺で大量に採集可能な、河原石を利用して作られている。時期が不明なものとして、便所跡・石敷き道路跡・竈と思われる焼土跡がみられた。道路跡以外の遺構は調査区の北部に集中しており、南部の遺構は希薄となることから、集落縁辺部とみられ、江戸期の九谷村の南端部がほぼ確認できた。遺物はごく少量であった。

右岸部では、近世以降に耕地として利用された際に築かれたと見られる石垣列が確認された。



九谷 A 左岸部調査区全景

## 平成13（2001）年度下半期の遺物整理作業

### 企画部整理課

1班 加茂遺跡（1993年度調査）の記名・分類・接合および実測トレースを行なった。現在も調査が続く一般にもよく知られた遺跡であるために、資料も多い。作業に携わることのできる喜びとは裏腹に、不安や緊張感があったのも正直な気持ちです。土器、木器、石器、金属器の整理作業の中で特に興味深いのは、横板組み井戸である。加工の施された1枚1枚の井戸板を各々が実測し終えた後、遺構図を参照して発掘調査時に出土したままの姿へと復元する機会に有難くも居合わせることができた。各自が思いをはせて実測段階では想像もつかなかった板が、井戸として目の前で組みあがった瞬間、皆が同じ笑顔を見せた。仕事上だけではなく「大変貴重な体験をしている」と、その時思ったことを今でも覚えている。一連の作業を通して学び得た事柄を今後に生かしたいものです。（本保早苗）

2班 下半期のほぼ前半を上半期に引き続き四柳白山下遺跡（1995年度調査）の遺物を整理したのだが、縄文土器が主であった。貝殻や半截竹管等を用いた複雑な縄文土器の文様を二面三面と描いたり、もろい肌を拓本でとっていると、今も十分通じるモダンな芸術性を感じながら、それを図化するのがこんなに難しいのかと改めて思った。次に入った四柳ミツコ遺跡（1998年度調査）はまったく異なった性格のものであった。土器、木器（木杵が含まれていた）、石器、金属という一連の遺物がありながら、最もてこずったのは土器だ。高杯や小形壺や甕等古墳時代中期の遺物を多く実測した。中でも高杯のミガキとハケの見分けがつけ難かったため、実測・点検ともに非常に苦労した。

（大西祥恵）

3班 上半期に引き続いて金沢城跡の整理作業を行なった後、荻島遺跡（2000年度調査）荻島B遺跡（1999年度調査）の整理作業を行なった。荻島遺跡では古墳時代後期のほぼ完形の土師器壺等の実測・トレースを行なった。このような土器はあまり見られないので、驚き感動したのと同時に、実測のことを考えると頭を抱えてしまった。なぜなら、頸部径が手首ほど小さいため、正確な厚さや形が測れない上、内面の調整痕も暗くて懐中電灯を使ってもほとんど見えないのである。こうなると、



せっかくの壺を図化してみると、寂しい図面になってしまい残念なのである。今年度を振り返ってみると、バラエティーあふれるさまざまな時代、種類の遺物とであった貴重な1年であった。特に、金沢城跡の大量の瓦は忘れられない。  
(河崎真帆)

4班 戸水B遺跡(1997・1998年度調査)と畝田ナベタ遺跡(2000年度調査)を担当した。戸水B遺跡は、土坑全部と溝の一部のみの整理となったためか、土器の破片が複雑に接合し石膏を入れて補強をせざるを得なかった。弥生中期の土器がほとんどを占めており、刷毛・櫛状工具を用いて施されたさまざまな文様に目を奪われた。実測は土器・木器・石器を行なった。特に土器については細かな文様を表現するのに時間を要した。畝田ナベタ遺跡は木器(主に斎串・井戸部材・礎板)等を実測した。今期は貴重な資料を手にすることが多く、学びながらの作業が多かったように思う。

(芝山美知代)

5班 近岡遺跡(1998年度)の整理は2年目で、土器・木製品の実測・トレースを行なった。遺物は自然河道を中心にして大量に出土している。土器はほとんどが破損状態だったが、木製品は良好な状態のものが多く、中でも布掘建物の5mを超える枕木の対になっている全国的にも珍しいものも実測した。土器は整理1年目に細かく分類されていたので、有段やくの字口縁の甕を中心にさまざまな器種の遺物を多数実測した。その後、倉見オウラント遺跡の整理作業を行なった。(小屋玲子)

6班 最初に徳丸遺跡(1999・2000年度調査)を行なった。記名・分類・接合は上半期で終了、続いて土器、金属製品の実測・トレースを行なった。遺物の中には刺突・沈線・隆帯などいくつかの文様で美しく装飾され見るのも楽しませてくれた縄文土器や弥生土器、中世の土師器皿などが見られた。次に金丸宮地遺跡(2000年度調査)の記名・分類・接合と実測トレースを行ない、最後に鹿波しやく川遺跡(2000年度調査)の記名・分類・接合と土器、石器、木器の実測トレースを行なった。遺物の中には磨製石斧などの石器、縄文土器、弥生土器わずかに須恵器、土師器、製塩土器なども見られた。正確な実測図を作ることの難しさを痛感しつつ、さまざまな遺物の文様、調整痕、成形方法などを観察できたことは、貴重な経験であった。  
(中條倫子)

7班 畝田・寺中遺跡(1999・2000年度調査)の記名・分類・接合、土器・石器・木器・金属器の実測・トレースを8班と分担して行なった。畝田・寺中遺跡は弥生から古墳、古代、中世へと長期にわたる遺跡で、当初は大きな破片に心躍ったが、意外と完形には至らず残念。甕や壺、鉢、高杯、器台といった一般的なものから、トリベ、ツブテなど初めて目にするもの、製塩土器、「官家」と読める墨書土器等バラエティーに富んだ出土品でした。

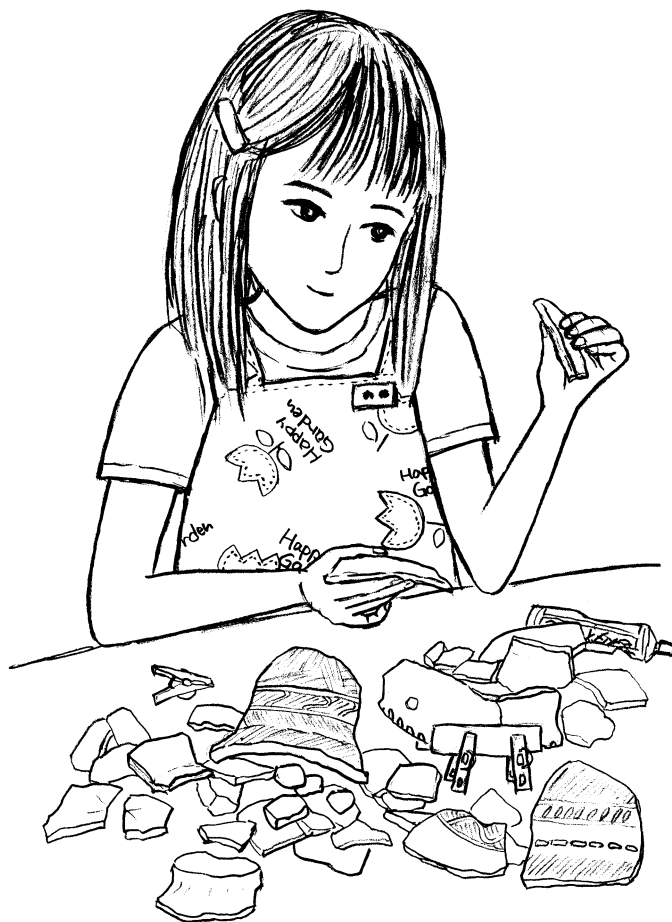
(戌亥久美子)



8班 上半期に引き続き畝田・寺中遺跡（1999・2000年度調査）の土器・木器・金属器の実測・トレースを行なった。土師器では甕・壺・高杯・手づくね土器等、須恵器では古墳時代の高杯、杯や古代の杯が見られた。墨書土器も多数あり、「津」「平」「語」をはじめさまざまな文字の中で「天平二年」がはっきり年代が示されるものとしては石川県で最も古い墨書土器ということで、1200年以上前の文字なのかと思うと感慨深いものがある。木器も工具・農具・漁労具・紡織具・食事具・祭祀具・容器・雑具等、多種多様な遺物と接することができ、大変興味深い遺跡であった。（角間律子）

洗浄班 金丸宮地遺跡、鶺鴒島遺跡、金沢城跡、中屋遺跡、荻島遺跡、畝田C遺跡、無量寺C遺跡、幸町遺跡、畝田・寺中遺跡、千代・能美遺跡、猫橋遺跡、矢田野遺跡、兵庫遺跡、粟生B遺跡、穴口遺跡、穴口貝塚、加茂遺跡、だいじょう寺畑遺跡、南方遺跡、東的場タケノハナ遺跡の18遺跡を洗浄した。今回特に千代・能美遺跡の多数の木製品を洗浄するのは初めてで、寒い時期、外での洗浄のため天気を見ながらの作業でした。（中村真弓）

復元班 各班から選別された遺物の復元・補強をしています。加茂遺跡、荻島遺跡、戸水B遺跡、畝田・寺中遺跡、徳丸遺跡、鹿波しやく川遺跡、四柳ミツコ遺跡、梅田B遺跡などがあつた。甕壺鉢など、形大きさもさまざまである。時代の違いもある。ここで日常の道具を紹介します。破片を接合するのに使う洗濯ハサミ、セメダイン、破片の足りないところを石膏で補うためのパレットナイフの大小、油粘土、粘着テープ、カッターナイフ、ブラシなど既製品を変形させて使いやすいようにしたものなど、さまざまな道具を使って復元作業を行なっています。（前田すみ子）



# 環日本海交流史研究集会記録

## 「鉄器の導入と社会の変化」

### はじめに

谷内尾 晋司（所長）

日本列島のほぼ中央部にあって日本海沿海域に位置する石川県は、古来より、東西文化交流の結節点としての役割を果たし、特色ある歴史文化や風土を育んできました。こうした石川県の歴史的特徴を理解するには、諸外国を含めた日本海沿海域各地との交流の実態の解明が欠かせないと考えられます。また、石川県はもとより、日本海沿海域各県の埋蔵文化財調査機関では毎年新たな発見が相次いでおり、累積した膨大な調査成果をどのように研究し活用していくかが大きな共通的な課題となっております。このため、当センターでは特別会計事業として、「環日本海文化交流史研究事業」を企画し、平成12年度より、交通交易、道具、生産など各テーマ別の研究グループを組織して、基礎的な調査研究を進めるとともに、沿海域各地の研究者にご参集いただき、年1回「交流史研究集会」を開催しているところであります。

平成13年度は2月22日(金)に当埋蔵文化財センター研修室において、「鉄器の導入と社会の変化」というテーマで開催いたしました。鉄器の普及や発達は、生産力を飛躍的に向上させるとともに、戦闘形態の変化や集団の階層化を促進するなど、社会変化のメルクマールをなすものであり、その生産や流通は、地域間交流史を考える上で、重要な研究課題であります。近年、日本海沿岸地域では、初期段階における多数の鉄器や鍛冶工房が発見されるなど、資料が集積されつつあり、各地の鉄器の質・量、製作技術などを比較検討することが可能となってきました。このような状況を踏まえ、今回の研究集会では、鉄器の導入・普及が地域社会に与えた影響について焦点を当て、北部九州地方については福岡県の橋口達也氏、山陰地方については島根県の池淵俊一氏、丹後地方については京都府の野島永氏、北陸地方については石川県の林大智氏、福井県の佐々木勝氏、新潟県の小池義人氏、東北地方については青森県の斉藤淳氏、北海道地方については三浦正人氏にお願いし、各地域の実態や状況をご報告いただき、研究討議をおこないました。

報告や討議の中で、集落や墳墓での鉄器出土の在り方等から、鉄器の導入や生産・普及が各地域における社会変化の画期や指標となりうること、大陸・半島から日本列島各地への導入・流通ルートとして、北九州～瀬戸内ルートと別に、武具など鉄器の形態比較等から丹後、北陸を経由した日本海ルートが東海や瀬日本の鉄器導入、普及に強く寄与していた可能性が高いこと、また、その流通には玉生産との関連が考えられること、古代の東日本にあっては、オホーツク文化など北からの交易も視野に入れなければならないこと、などが取り上げられ、話題となりました。いずれも北陸における鉄器の受容や生産の歴史的位置づけを考える上で大きな刺激を与えるものであり、これからの地域間交流史研究の視点や方向性を示す重要な課題の提供を受けたことは大きな成果でありました。

当センターでは、今後とも、テーマを替え、継続して年1回の「交流史研究集会」を開催してまいりたいと考えております。ささやかではありますが、この事業が日本海を媒介とした地域間交流史研究の進展に一定の役割を果たし、多少とも日本海沿岸地域の特性を把握し、本県が持つ歴史的意義の解明に寄与することが出来ればと思っております。さらに、この「交流史研究集会」が日本海沿岸地域の各調査機関等の研究交流の場となることを願っております。皆様のご協力をお願いいたします。



## 北部九州における鉄器の出現と普及

橋口 達也（福岡県教育庁文化財課）

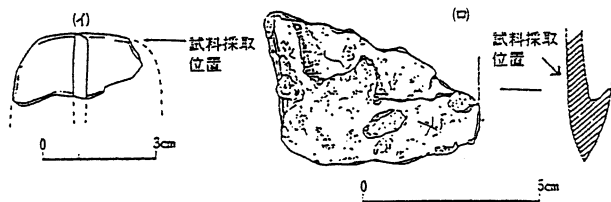
日本では弥生文化成立当初から鉄器が導入されて使用されている。当初は斧等の工具の使用から始まっている。斧（板状鉄斧、袋斧）・刀子・鉋等の工具は次第に量を増すが、中期前半頃までは絶対量は少なくまだ大陸系磨製石器が主流を占めている。しかし鉄器の優れた点はすぐに認められていき、既に前期末の段階で鉋・刀子・鏃等の小形鉄器および板状鉄斧等の簡単な鉄器の製作は輸入された鉄素材を用いて行われていた。袋状鉄斧も中期前半には確実に国内生産されているが、可能性としては、前期末に遡ると考えられる。

中期中頃から後半になると鉄製工具はさらに普及し、石庖丁等の一部のぞき、石器は消滅していく。また同時に鉄剣・鉄矛・鉄戈等の鉄製武器が出現し（鉄刀の出現はややおくれる）、石製武器・青銅製武器を駆逐し、青銅製武器を祭器の位置に追いやり、急速に普及していく。弥生時代は稲作農耕により余剰生産物が生じ、熾烈な土地争い・水争いを通じて首長権が確立され発展する時代である。中期後半は、前期後半から中期前半の段階における近隣聚落の争いから末廬・伊都・奴国等の旧郡程の範囲を領域とする地域的・政治的なまとまりが形成される。これがすなわち中国史書に「クニ」と記載された領域であるが、春日市の須玖岡本、前原市の三雲南小路の甕棺に示されるような前漢鏡30面余等を副葬した盟主的な首長も出現し、首長権もさらに強力となっている。したがって戦いも領域争いへと質的に変わっていく時代である。鉄鏃の刺さった人骨、鉄製武器で傷ついたあるいは首をはねられた人骨の出土例等があるが、そういう戦闘が広範囲に行われて鋭利な武器を必要とした内部的条件と、前漢後半以後鉄製武器が中国大陸周辺に波及するという国際的条件とも絡めて、鉄製武器の普及はとらえられる。

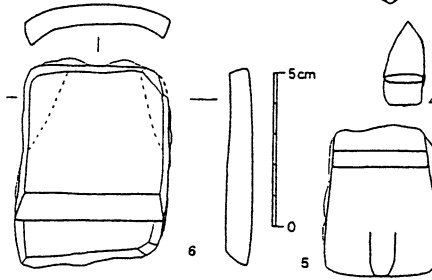
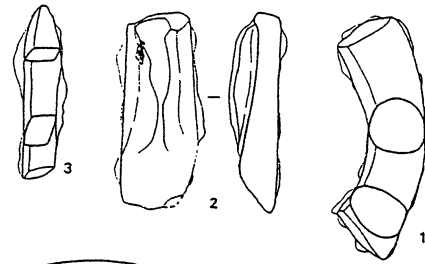
農具の鉄器化はかつては武器等と同じく中期後半頃からとされていたが、近年の成果からいえばかなり遅れて後期後半頃と考えられる。

農具が鉄器化される北部九州の弥生後期後半から終末期、すなわち畿内 様式から庄内式の段階には、瀬戸内・畿内はもちろんのこととして関東でもかなり鉄器が普及している。畿内では 様式の鉄器はきわめて少なく、 様式で若干増え始め、 様式から庄内式の段階では北部九州の中期後半頃と同じような普及の状況を示している。畿内の研究者のほとんどは、鉄器そのものの出土が少ないことから鉄は錆やすく消滅するし、また再生して作り直すから実物は残りにくいと考えており、したがって石器の消滅から鉄器の普及を類推するというのが鉄器研究の主流であり正攻法であると主張している。石器の消滅が鉄器の普及という問題と関連することは当然のことではあるが、鉄器そのもので開始・普及を論じている北部九州の私どもからみるとこの論法は消極的な方法である。私はかつて鉄器が出土しないのなら、これから鉄器用の砥石に注意して鉄器の普及に言及するならばまだ少しでも積極的な方向となると提起したことがある。北部九州では例えば飯塚市の立岩10号甕棺、日田市の吹上1号甕棺、大分県天瀬町の五馬大坪木棺墓等に鉄器と砥石が副葬されており、前期古墳では農具・武器とともに砥石の副葬は一般的となる。

古墳時代にはいると前期古墳には鉄製武器・農具を多量に副葬するのは一般的であって、鉄器が普及したと同時に、首長層へ鉄器が集中したことも示している。

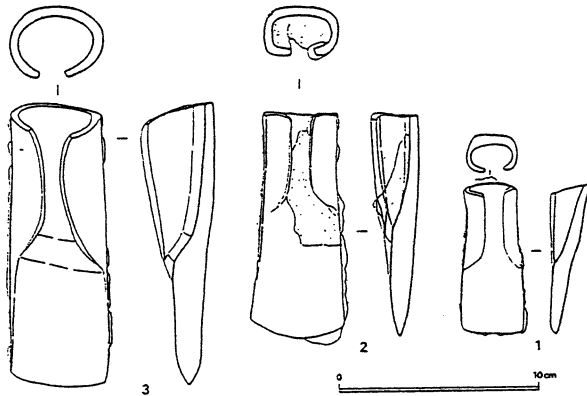


(イ) 福岡県曲り田遺跡出土 (佐々木、赤沼1992「山口県豊浦町山の神遺跡出土の鑄鉄製鋤先」『豊浦町史三』豊浦町教育委員会)  
 (ロ) 熊本県斉藤山遺跡出土



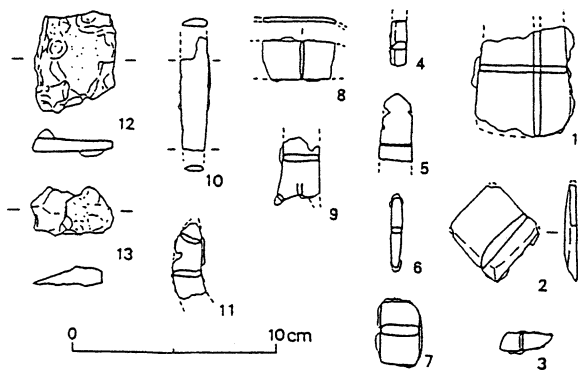
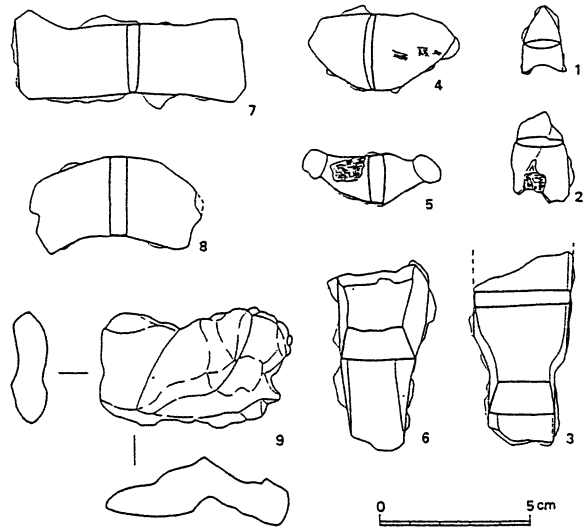
赤井手遺跡出土の鉄素材・未製品

1~3 5号土壌、4 9号土壌、5 64号住居跡、6 A地点西斜面



国産品と思われる鉄斧

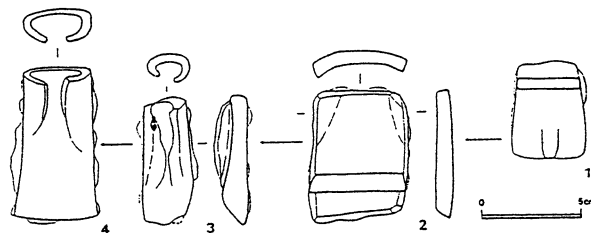
1 福岡県八女市亀の甲、2 福岡県吉ヶ浦、3 佐賀県千塔山



鉄素材・未製品と考えられる関連資料

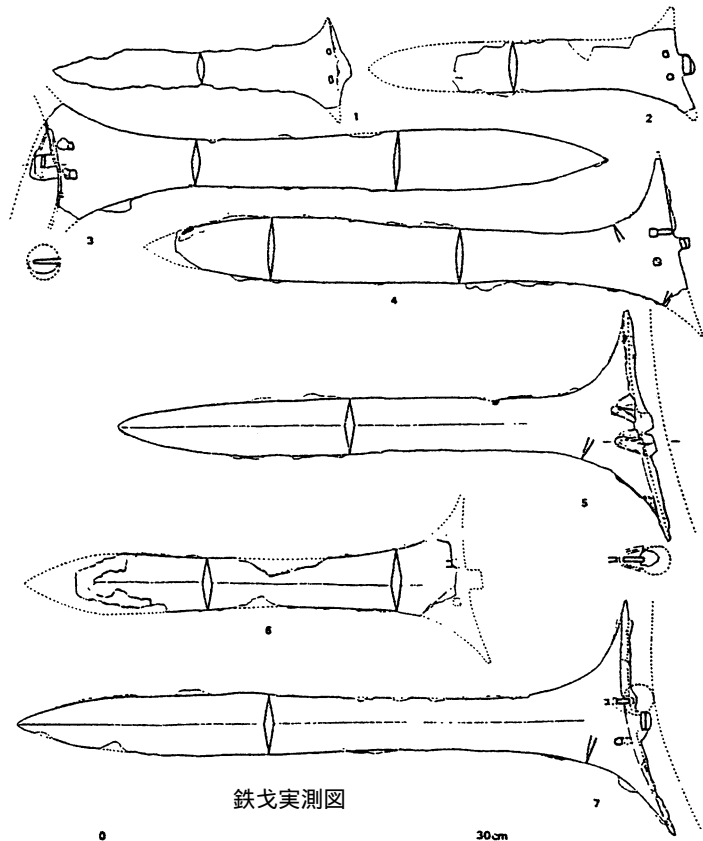
1 門田辻田、2 三雲加賀石、3~11 三雲番上、12 馬場山 N 21、13 馬場山 DA 2

赤井手33号住居跡(鉄器製作工房跡)出土の鉄素材・未製品・製品



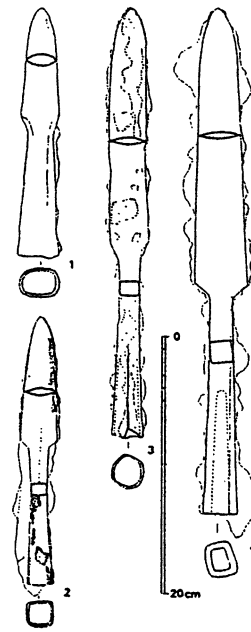
赤井手出土鉄器による鉄斧製作工程模式図

1 64号住居跡、2 A地点西斜面、3 5号土壌、4 溝2



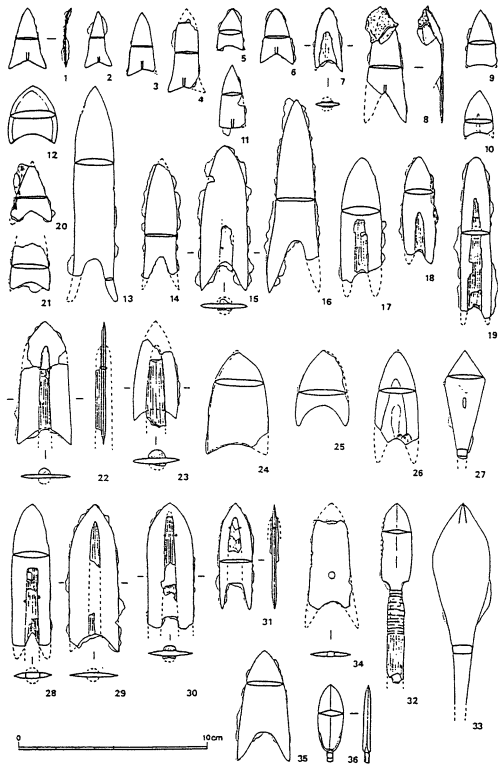
鉄戈実測図

- 1 須玖 2 御床松原 3 吹田 4 上り立  
5 立岩堀田 K34 6 山崎 7 立岩堀田 K35



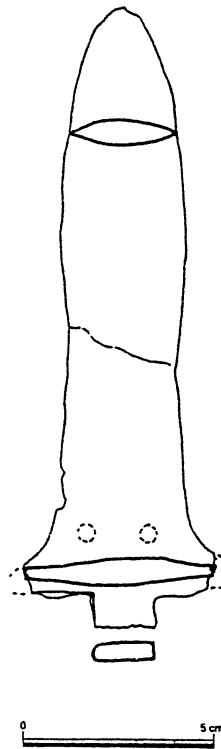
鉄矛実測図

- 1 下伊川 2 立岩 K36  
3 立岩 D 2 4 元松原

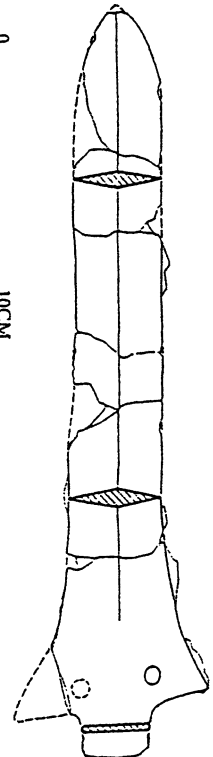


鉄鏃実測図

- 1~4 吉ヶ浦 5 赤井手 6~8 三津永田 9 門田 10・33 肥前国府  
12・13 小笹 14~16 原の辻 17~19 シゲノダン 20 年の神 21・22 栗田  
23 桶田山 24 神松寺 25~27 千塔山 28 木坂5号石棺 29・30 汐井掛  
D 167、31・32 平 34 神谷川 35 桑飼下 36 船橋



鉄戈  
茶戸里遺跡一号墓



宗像市梅木遺跡



## 山陰地方における鉄器の導入と社会の変革

池淵 俊一（島根県教育庁文化財課）

### 1. 山陰における弥生時代鉄器普及の諸段階

当地での鉄器の普及は、弥生時代中期中葉までは舶載鑄造鉄斧片等が散見されるにすぎず、中期後葉から本格化する。この時期の鉄器は島根県国竹遺跡例など、山間部出土の大型板状鉄斧が目立つ。これらの鉄器は広島塩町式系土器を伴う例が多く、瀬戸内方面からの鉄器流入ルートを示唆する。その一方で、青谷上寺地遺跡では舶載鑄造鉄斧片を片刃の板状鉄斧に転用した資料が一定量存在し、この段階に瀬戸内方面からの流れとともに、日本海側からの鉄器流入も本格化したことが窺える。またこの段階の袋状鉄斧には稚拙なつくりのものが存在することから、在地での生産が想定される。

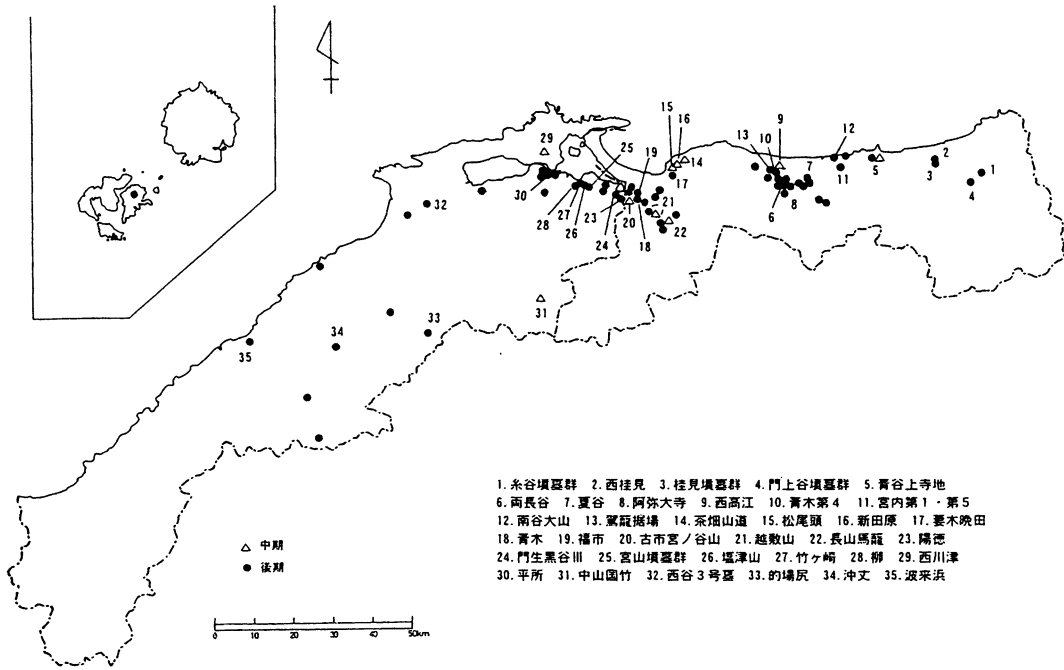
後期前半には一部の器種を除いて石器はほぼ消滅する。また鉄鏃に無茎三角形式が目立つようになるなど、当地の鉄器生産が顕在化し、地域色が認められるようになる。次の後期後半～末には当地の鉄器出土量は急増し、特色ある鉄器文化が成立する。

### 2. 山陰の弥生時代鉄器の特色

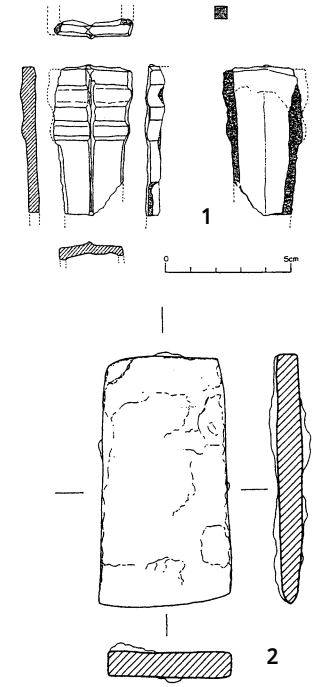
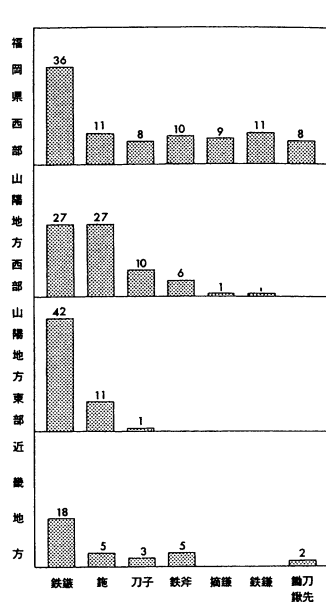
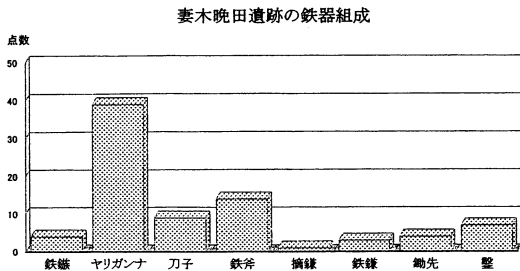
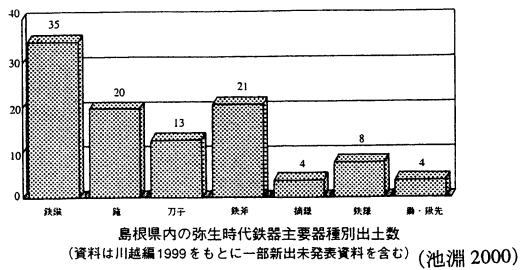
山陰の弥生時代鉄器の特徴としては、まず組成の面からは、鉄斧が多い点、鉄製鋤・鍬先が安定して認められる点等を指摘できる。ただし、妻木晩田遺跡や青谷上寺地遺跡など鉄器多量出土遺跡の様相をみると、鉄器組成にかなり差があり、同じ山陰でも生業形態や立地条件によって器種のウエイトが異なる状況が認められる。器種ごとの特徴をみると、鉄斧では板状鉄斧と同程度もしくはそれ以上に袋状鉄斧が普及し、東部瀬戸内・畿内とは一線を画す地域性を形成する。鉋は身部が断面矩形で身部と刃部幅が変わらないタイプが主流を占め、また身部が幅広のタイプが一定量存在する。また鉄鏃は無茎三角形式が主流を占め独自の型式変化をなし、瀬戸内地域とは一線を画す。舶載鉄器が多く認められるのも当地の特徴で、中期からの舶載鑄造鉄斧のほか、大型の刀剣類が墳墓副葬品として目立つ。特に大刀は現状では環頭を裁断した大刀のみで占められ、同じ舶載大型武器である素環頭刀の出土が目立つ丹後・北陸とは異なる様相をみせる。

### 3. 山陰における弥生時代後期の社会変化

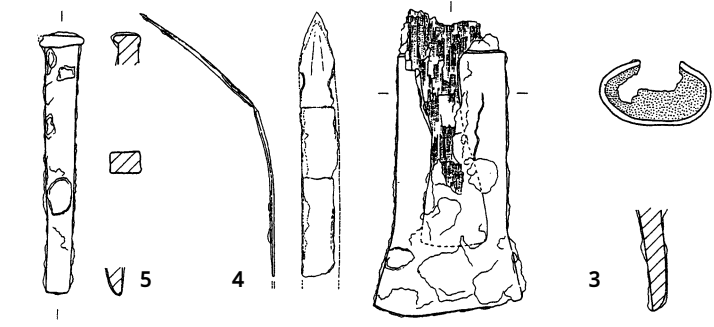
山陰では縄文時代後期以降、打製石器の主たる素材としてサヌカイトが安定して供給されており、弥生時代中期後葉段階でもかなりの比率を占めている。弥生時代中期においては、このサヌカイトを介した瀬戸内との交渉が唯一安定した領域外との地域間交渉であった。弥生時代後期の急速な鉄器の普及は、こうした縄文時代後期以来の当地の安定した物流システムを崩壊させ、当地の集落成員の外部領域観を大きく変質させたものと考えられ、当地の土器様相が中期の瀬戸内的な様相から脱却し、独自の様式を成立させていく要因もここに求められる。この時期に出雲地方では多くの高地性集落が出現する。山陰で鉄器が多量に出土する集落は、内海やラグーンを見下ろす丘陵上に立地するものが多く、外部との交易に有利な場所に集落を構え、鉄をはじめとする必需物資の流通を差配しようとした意図を読みとることができる。このように当地の高地性集落の出現は、中期段階の安定した流通関係・外部領域観が崩壊し、新たなシステム・地域社会が再編されるプロセスにおける不安定な状況を反映しているものと想定される。こうした状況下で地域単位の求心力が求められるようになり、その脈絡において西谷3号墓のような巨大首長墓の出現を理解することが可能となる。



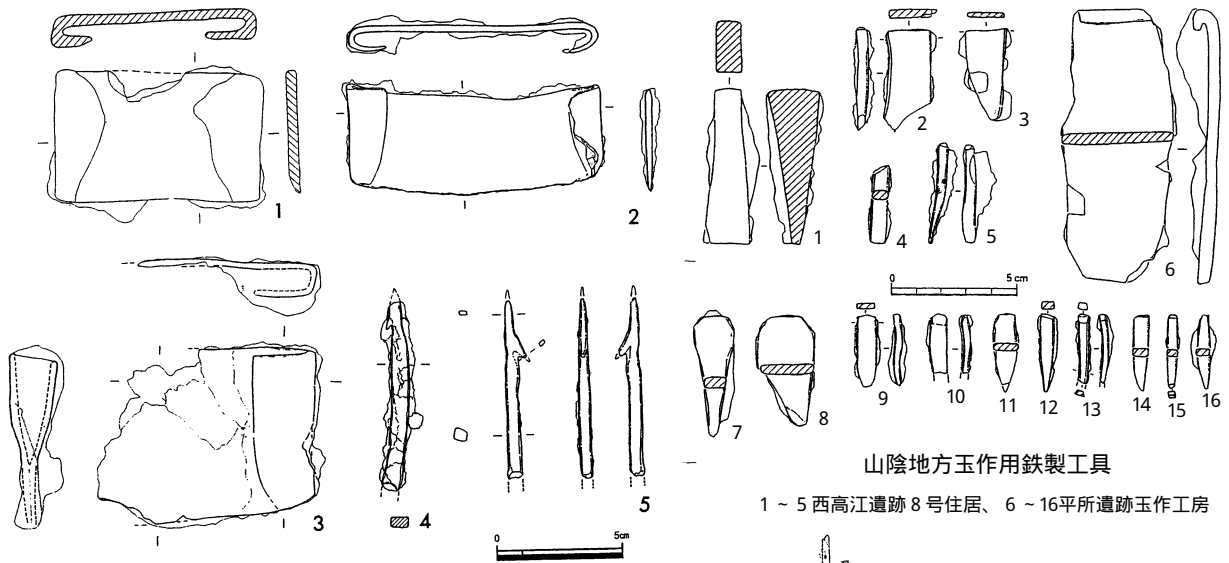
山陰地方の弥生時代鉄器出土遺跡分布図 (高尾 2001)



中国地方における弥生時代鉄鏃型式別分布図  
 (野島 1993 に一部加筆) (池淵 1998)



弥生中期の鉄器  
 (1 島根・西川津、2 島根・国竹、3・5 鳥取・長山馬籠、4 鳥取・青谷上寺地)

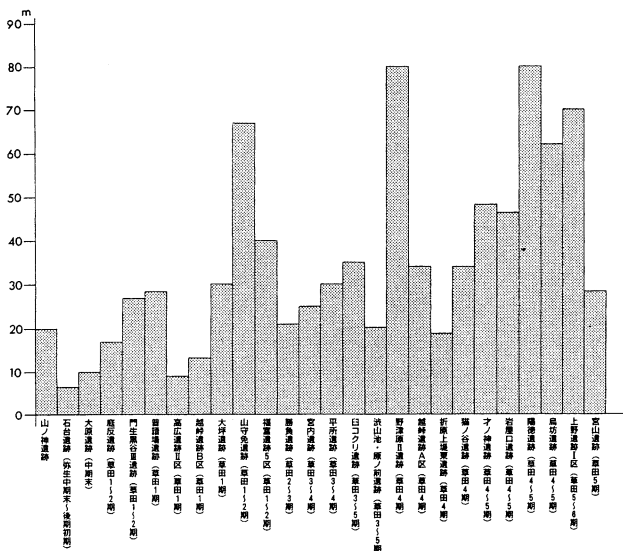


山陰地方玉作用鉄製工具

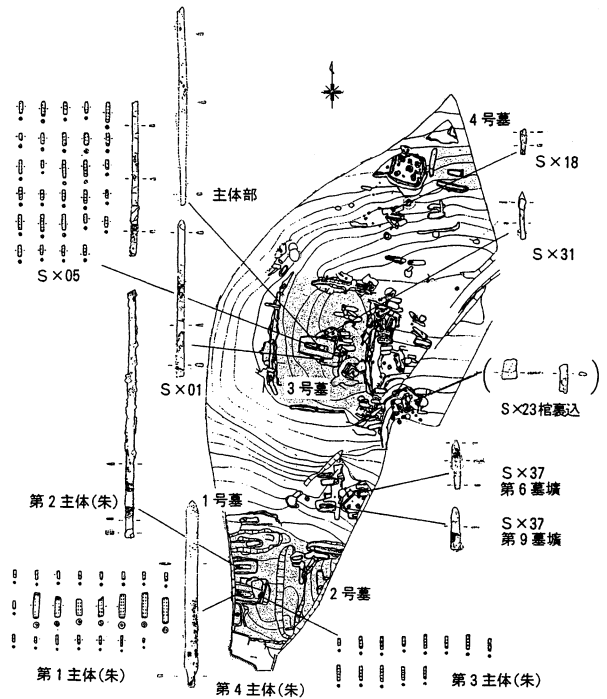
1 ~ 5 西高江遺跡 8号住居、6 ~ 16 平所遺跡玉作工房

山陰地方に特徴的な鉄器群

1 島根・竹ヶ崎、2・5 島根・青谷上寺地、3 鳥取・妻木晩田  
4 鳥橋・沖丈



出雲における弥生時代中期末～後期末の集落の立地 (単位m) (池淵 1998)

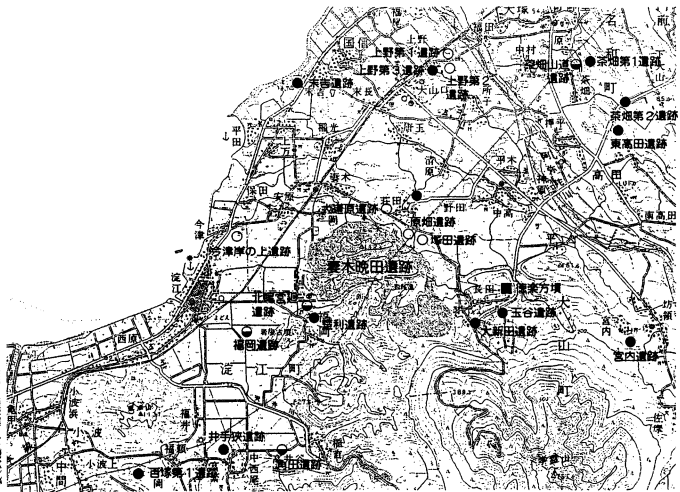


山陰の鉄器を副葬する方形台状墓 (宮内第1遺跡)

山陰地方鉄器多量出土集落の立地



島根・塩津遺跡群



鳥取・妻木晩田遺跡



## 京都府北部(丹後地域)における 鉄器の導入と社会の変化

野島 永(財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター)

### 1. 弥生時代中期 - 集落出土の鉄器と玉作り -

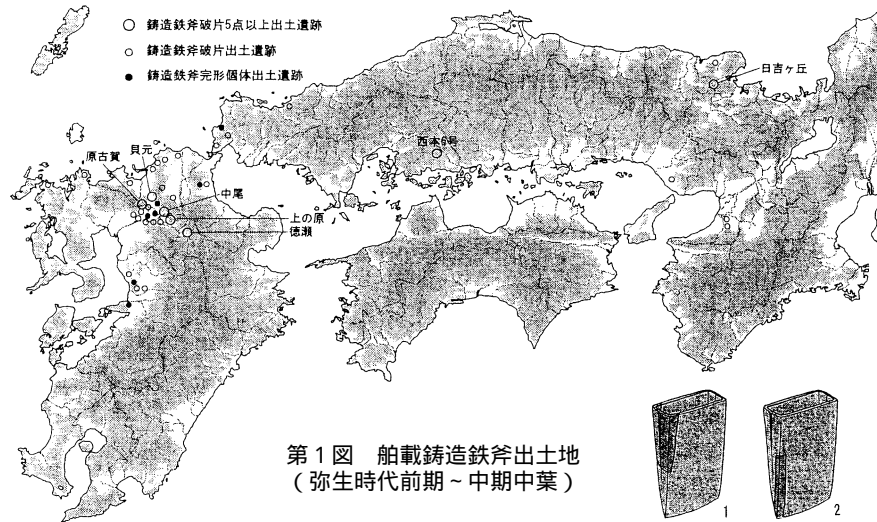
京都府北部では、弥生時代中期に中郡峰山町途中ヶ丘遺跡や同町扇谷遺跡・舞鶴市桑飼上遺跡などから、鉄鏃や袋状鉄斧・板状の利器などの出土が報告されている。扇谷遺跡では、中期前葉の鍛冶滓が出土していることから、この地域における弥生時代中期の鉄器生産を考えてもおかしくはない。

与謝郡加悦町日吉ヶ丘遺跡では、中期中葉に遡る鍛造鉄器や鑄造鉄器が出土した。鑄造鉄器の破片は、前漢の鑄造鉄斧(鏃)や一字形の鋤同様、袋部空隙が刃部付近まで造形されるもので、漢の鑄造技術で作られたものであろう。中期後葉の竹野郡弥栄町奈具岡遺跡には、鑄鉄を加熱することによって個体のまま酸化させて脱炭し、鉄の組織を強靱な鋼に変化させた鉄片も認められ、当時の漢の先端技術で作られた鉄素材の破片も入手していたことがわかる。奈具岡遺跡は、玉作りを専業とする中期後葉の集落で、七四基もの竪穴遺構や竪穴住居跡が検出された。碧玉・緑色凝灰岩や水晶など、膨大な石材群とともに、石錐・石鋸・筋砥石、鉄製工具などの加工生産具も出土し、原石から製品までの製作工程が明らかになった。玉作りに使われた鉄製工具とその未製品の多量出土と鞆羽口や鍛冶炉の存在から、玉作用の鉄製工具の加工も行われていたことがわかった。多くの人々が従事したこの装身具生産であったが、その製品は朝鮮半島や北部九州への贈答品として生産され、鉄資源と交換された可能性も考慮すべきであろう。

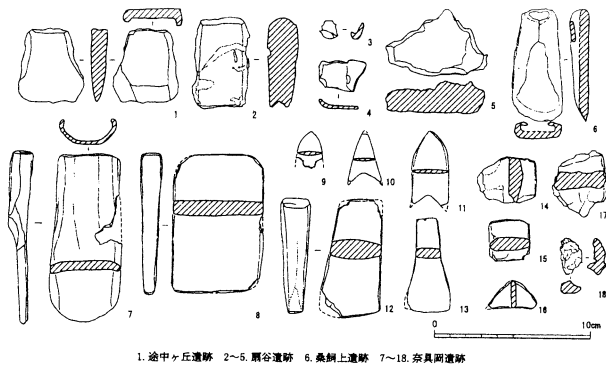
### 2. 弥生時代後期 - 墳墓出土鉄器とその特徴 -

日吉ヶ丘遺跡にみられた貼石方形墳丘墓は中期後葉にさかんに造られたが、後期には影をひそめる。後期前半、丘陵を区画・整形することによって長方形平坦面を確保して埋葬を継続させつつ、連接した台状墓が丘陵全体を覆っていくようになる。このような墓地の埋葬手順は、韓国の慶尚南道金海市良洞里墳墓群の墓壇配置にも類似しており、後期前葉においては朝鮮半島南東部からの墓制の影響を窺うことができる。しかし後期中葉以降、丘陵上に独立した方形の墳丘と墳頂平坦面をもつ台状墓が造営される。方形墳丘墓が卓越する近江や東海地方との結びつきが強くなるのが、独立した方形台状墓を成立させたのかもしれない。丹後地域の方形台状墓は、その中心に大形化した墓壇を穿ち、鉄剣一振りか二振り、あるいは鉋などの鉄製工具を副葬するが多い。山陰地方東部や北陸地方東南部では、京都府北部同様に、方形台状の墳丘に鉄製刀剣類を副葬するものがある。山陰地方や北陸地方は、四隅突出形墳丘墓が展開していく地域であるが、むしろこの方形台状墓に鉄製刀剣類を頂点とした鉄器副葬が顕著にみられる傾向があり、近畿地方北部との関係を窺うこともできよう。

また一方で、与謝郡岩滝町大風呂南一号墓から出土した鉄剣には、短い茎部をもち、刃部部に双孔を穿つ列島独自のものがある。このような刃部双孔の鉄剣は、近畿地方よりもむしろ北部九州やその周辺、あるいは東海・関東地方にみられるものである。東方諸地域との交流を示唆する副葬鉄器といえる。丹後地域の首長達は、そのリーダー・シップを示すために素環頭鉄刀や鉄剣、各種釧などを入手し、装身具を大量に生産した。彼らは、日本海側沿岸の諸地域と連携し、それらの地域と近畿・東海地方との間にあって、貴重財の仲介的な取引に目をつけたと考えることもできそうである。

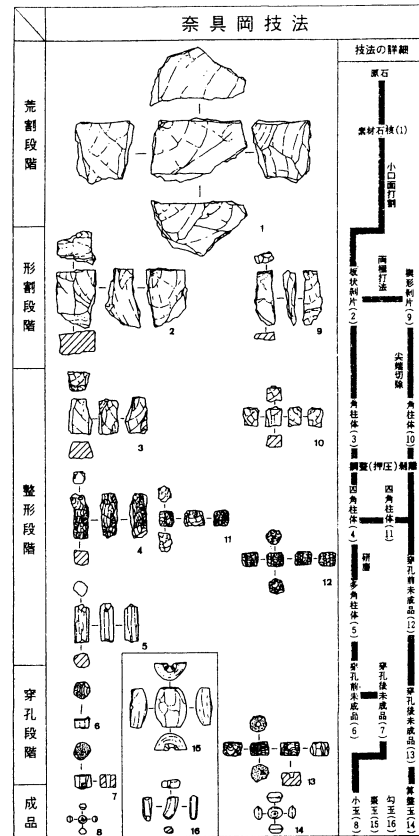
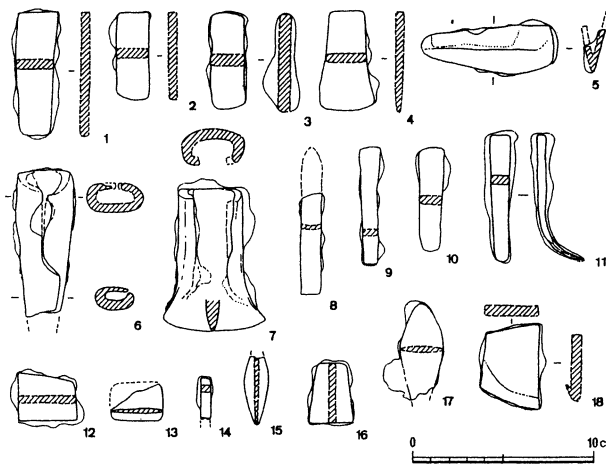


第1図 船載鑄造鉄斧出土地  
(弥生時代前期～中期中葉)



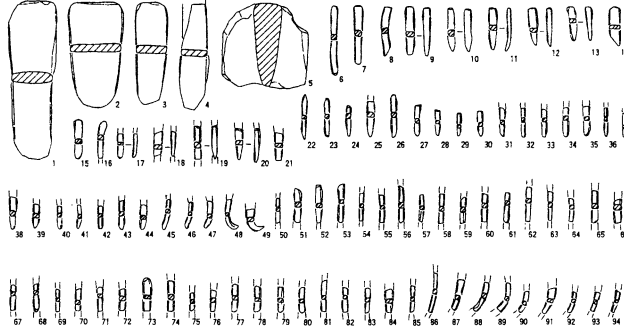
1. 塗中ヶ丘遺跡 2～5. 扇谷遺跡 6. 桑刺上遺跡 7～18. 奈具岡遺跡

第2図 丹後地域集落出土鉄器の類例(弥生時代前期～中期)

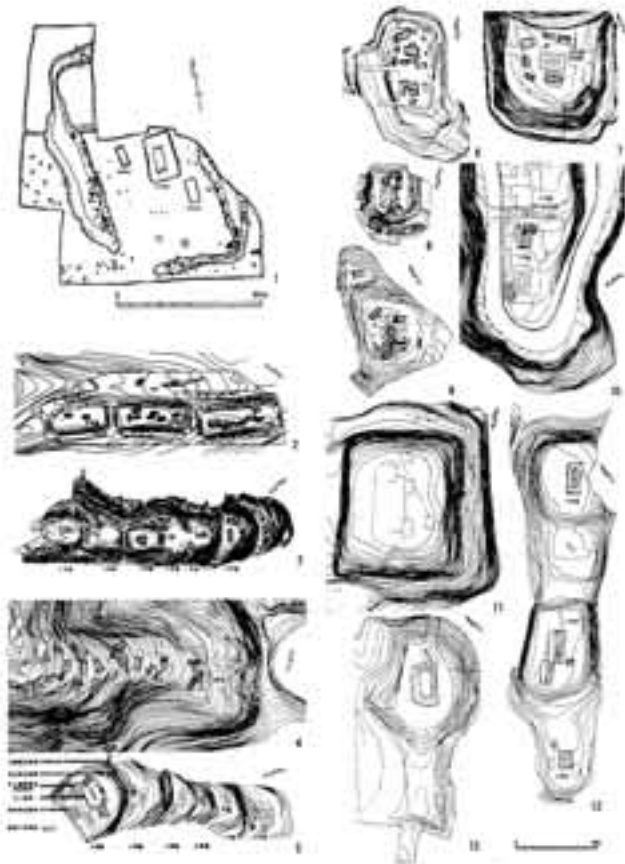


第4図 奈具岡遺跡における玉製作工程(水晶)

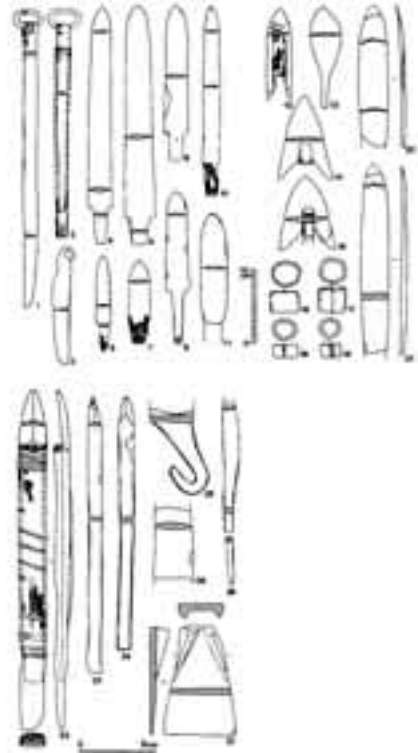
第3図 京都府与謝郡加悦町日吉ヶ丘遺跡出土鉄器実測図



第5図 奈具岡遺跡における玉作専用鉄製工具類

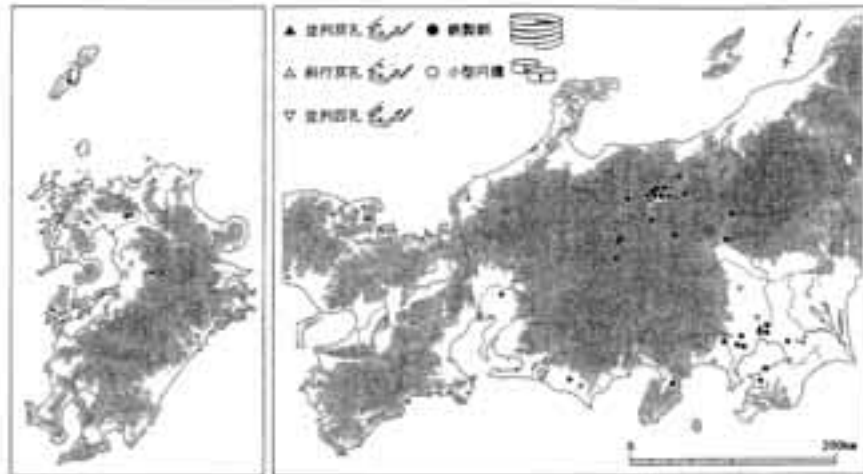


第6図 丹後地域の墳丘墓

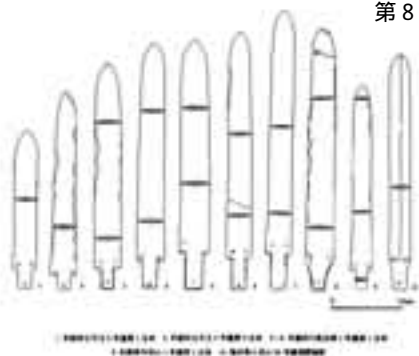


第7図 丹後・但馬地域における墳墓出土副葬鉄器

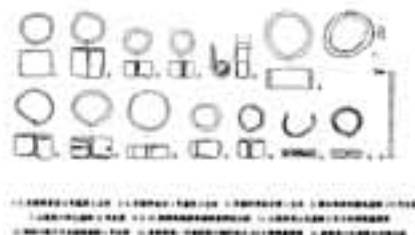
1. 中野(220) 2. 原島 3. 石川 4. 山形(10支那) 5. 三浦神社 6. 柳瀬(10支那)  
7. 西條(10支) 8. 島田 9. 丹内(10) 10. 大島(10支) 11. 丹波(10支) 12. 丹波(10支) 13. 丹波



第8図 刃開双孔鉄剣と鉄釧・鉄製小型円環出土地 (弥生時代後期)



第9図 近畿地方の刃開双孔鉄剣



第10図 鉄製小型円環(1~4・6・7)と銅製小型円環(8~14)



第11図 鉄剣の再加工(中期後半)

第12図 銅釧および鉄釧の再加工



## 石川県における鉄器の導入と社会の変化

林 大智（調査第1課）

今回の報告では、県内において弥生時代から古墳時代前期に、鉄器の普及と所有がどのように進行し、その結果、集落や墳墓にどのような変化が表れたのかということを中心に考えた。

### 鉄器導入の画期と導入ルート

県内では弥生時代中期に鉄器の導入が開始され、定量の鉄器導入が開始される弥生時代中期後半、ほぼ全ての器種が出揃うと共に簡易な鍛冶技術が普及し、小型で地金の薄い集落出土鉄器と、大型で重厚な墳墓出土鉄器の差異が顕在化する弥生時代後期後半、鉄器出土量の急増に対応するように高温加熱処理による鍛冶技術が定着し、副葬品の主体が鉄剣から素環頭大刀・刀子や鉄刀に転換する弥生時代終末期、新たな鍛冶技術が導入されることで集落から出土する鉄器量が減少し、鉄器組成の中で農具の占める比率が高くなる古墳時代前期初頭に画期が認められる。鉄器や鍛冶技術の導入ルートについては、日本海沿岸地域の交流によりもたらされた可能性が高い。

### その他の道具の変遷

石器・木製品などの変遷にもいくつかの画期が存在し、鉄器や鍛冶技術の画期と密接に関連していることが伺える。具体的には、砥石や鉄斧柄など鉄器の導入を示す資料が出現する弥生時代中期後半と、鉄器の普及を示す資料が定着し、木製農工具の出土量が増加すると共に地域色が顕在化する弥生時代後期後半、玉作りなどで集中的な生産が開始される弥生時代終末期に画期が認められる。また、玉作り遺跡が急減することなど古墳時代前期初頭にも大きな変化が認められる。

### 日本海沿岸地域の交流

道具やその生産技術・体制が変遷する背景には、日本海沿岸地域における交流の変化が大きな要因となった可能性が高い。この地域では弥生時代中期後半に遠隔地間交流が顕在化し、道具変遷の大きな画期である弥生時代後期後半～終末期には活発な交流が行われ、墳丘墓・舶載鉄器・木製容器など首長層に付随するような道具の交流も行われた（第1・3図参照）。また、玉製品は舶載鉄器の主な交換財として用いられた可能性が高い（第1・2図参照）。

### 鉄器の導入と社会の変化

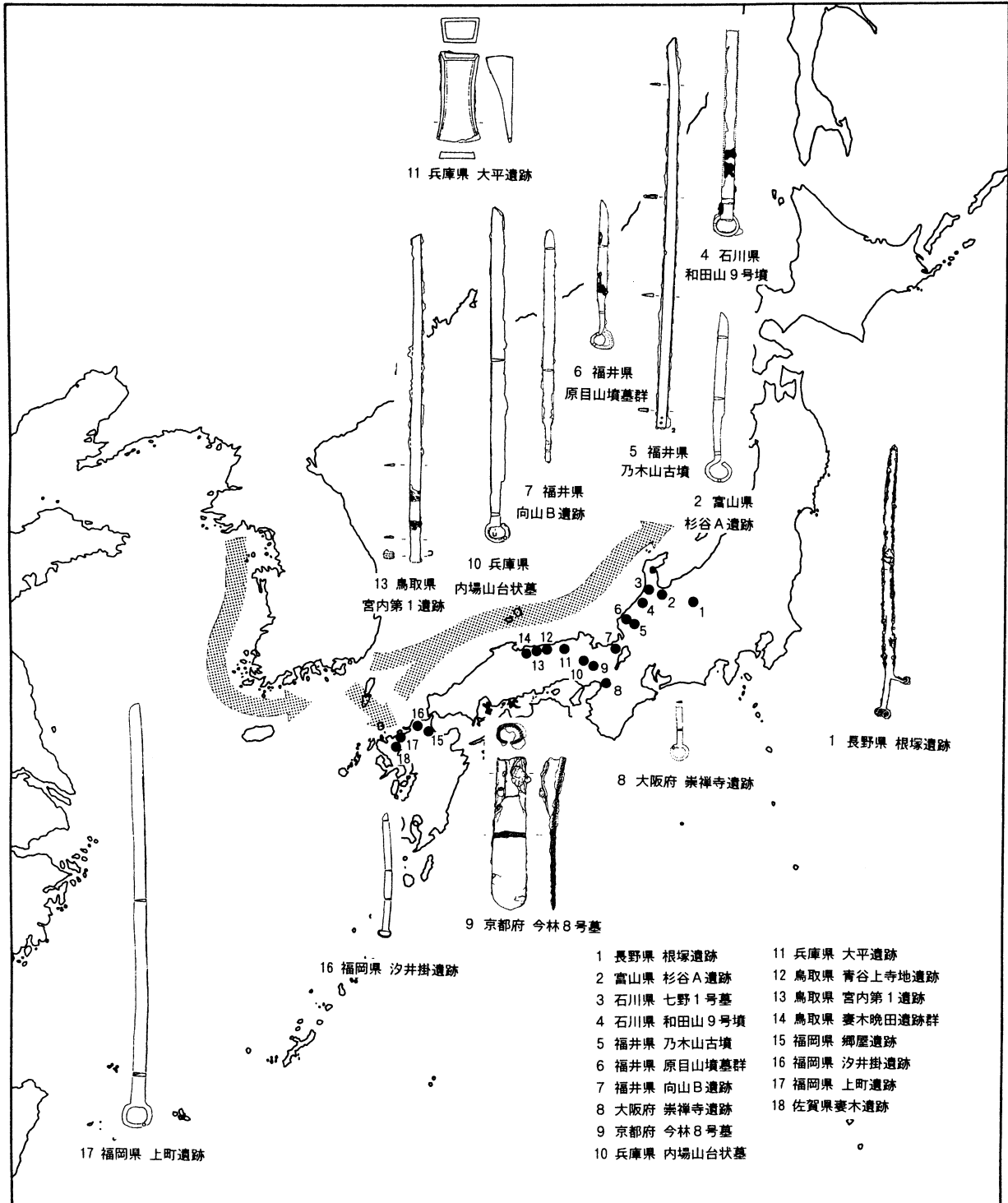
日本海沿岸地域間における交流の変化や道具の変遷は、集落・墳墓の動向にも大きな影響を及ぼしたと思われる。集落・墳墓の動向をまとめると、拠点集落が衰退して近隣に中・小集落が出現する弥生時代中期後半、集落が急増すると共に手工業生産を集中的に行う集落も出現し、鉄器を副葬する墳丘墓が出現する弥生時代後期後半、首長居館の出現など集落間に明瞭な格差が表れ、前方後円墳や前方後方墳が出現する古墳時代前期初頭・前半に画期が認められる（第4図参照）。

### まとめ

以上のことをまとめると、鉄器や鍛冶技術の変遷は、弥生時代中期後半と後期後半に大きな画期が認められる。この画期は鉄器以外の道具の変遷や、日本海沿岸地域における交流の変化とも連動しており、交流の変化が様々な道具を変遷させる大きな要因となっていた可能性が高い。それらのなかでも、工具の鉄器化や交流に伴う製作技術の伝達は、手工業生産体制の変化を引き起こした可能性が高く、この生産体制の変化や集落と墳墓における鉄器の差異、すなわち首長層における遠隔地間交流の掌握が、階層化の進行を促進させ、古墳時代に向けた社会変化の大きな要因となったと考えられる。

【引用・参考文献】

- 河村好光 1986 「玉生産の展開と流通」『岩波講座日本考古学』3 生産と流通 岩波書店  
 木田 清 1997 「第6章 古墳時代以前の集落」『加賀 能美古墳群』寺井町教育委員会  
 林 大智・佐々木勝 2001 「北陸南西部地域における弥生時代の鉄製品」『補遺編』  
 石川県考古資料調査・集成事業報告書 石川考古学研究会



第1図 日本海沿岸地域周辺における弥生時代後期後半～終末期の主な船載鉄器





## 福井県の鉄製品の様相 - 北陸地域の墳墓資料を中心として -

佐々木 勝（福井県教育庁埋蔵文化財調査センター）

北陸地域は旧国単位で若狭から越後までと広域である。この中において広域流通と地域圏の形成を墳墓における鉄製品の副葬からせまってみる。

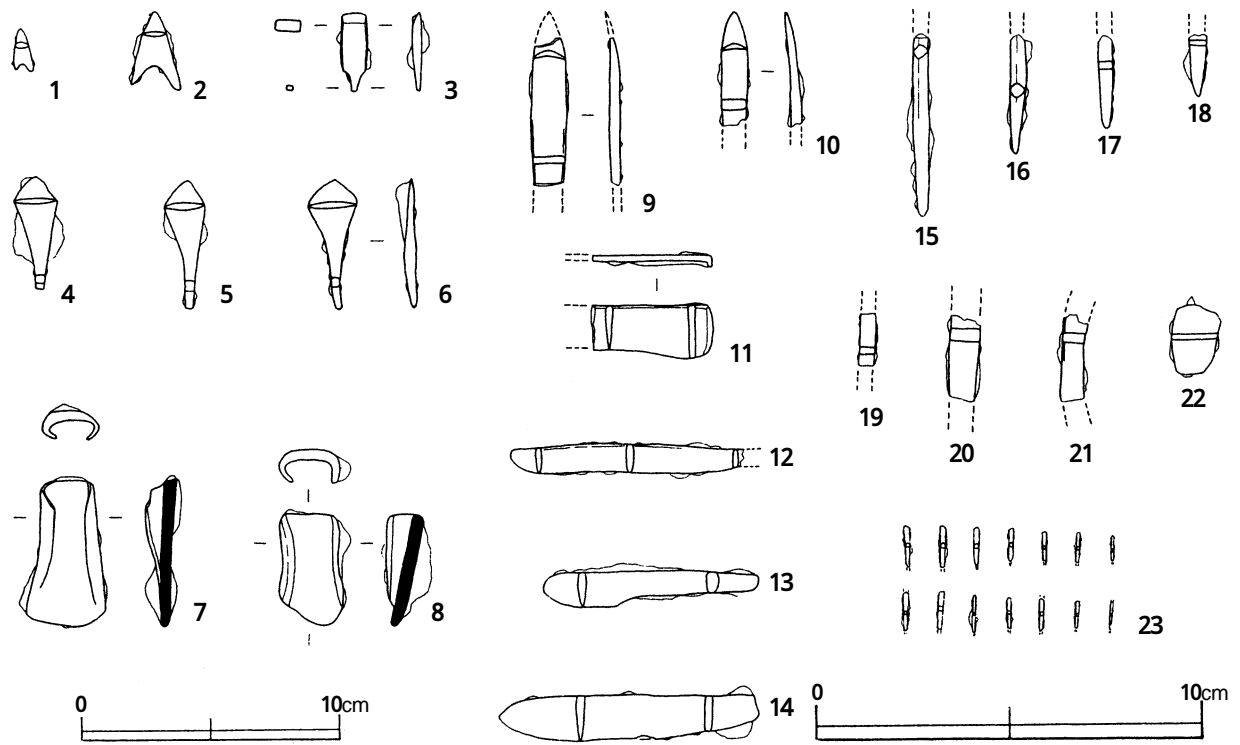
弥生時代中期末には拠点集落が解体していく。この時期に北陸地域に鉄製品がもたらされており、凹線文系土器の波及の影には、物資や情報の広域伝達ネットワークの形成があり、弥生時代後期から古墳時代前期に向けて集落の機能や階層分化が進行していくと考えられる。

集落で多量に鉄製品の出土がみられる弥生時代後期後半以降、丘陵上に大型の墳丘墓の造営が開始される。これは拠点集落解体後、階層分化が進行したため、首長墓が出現し、広域な流通ネットワークを通してもたらされた大型武器類の副葬が開始される。時期的な変遷として弥生時代後期後半は鉄剣の副葬が顕著であり、弥生時代終末期になると主に鉄刀、素環頭鉄刀・刀子に転換する。このことは三韓地域における墳墓副葬品が、2世紀中頃に鉄矛・短剣から長剣・素環頭鉄刀に転換し、埋葬施設が木棺から木槨に変化することから、三韓諸国の影響を受けていると考えられる。また、乃木山古墳（弥生時代終末～古墳時代前期）は第1埋葬施設が木槨墓である。越前では素環頭裁断太刀の副葬がみられ、素環頭太刀は漢代において実用戦闘武器でありなおかつ身分表象の道具であり、その環頭を切断することは漢の風習にはない行為である。その説明は、乃木山古墳にみられるような木製の柄を付けることによって、倭的な使用・副葬方法にかえ、のちの前期古墳につながる流れとなる。またの着柄された鉄刀の柄の1つは剣でもう1つは刀の柄をつけている。このような現象があるものの、素環頭部を裁断していない鉄刀・鉄剣も同時に副葬されていることも興味深いことである。この素環頭裁断太刀は山陰から但馬にかけてもみられ、日本海沿岸域の交流を考えるうえで重要である。また、弥生時代終末期の鉄刀・素環頭鉄刀の副葬は福井県嶺北・加賀・富山県西部にかけて顕著に見られ本地域より東の地域（越後・信濃・北関東・南関東）は鉄剣が副葬され鉄刀・素環頭鉄刀はみられない。このことから鉄製品の副葬風習や流通に関し志向性や選択性がうかがえる。

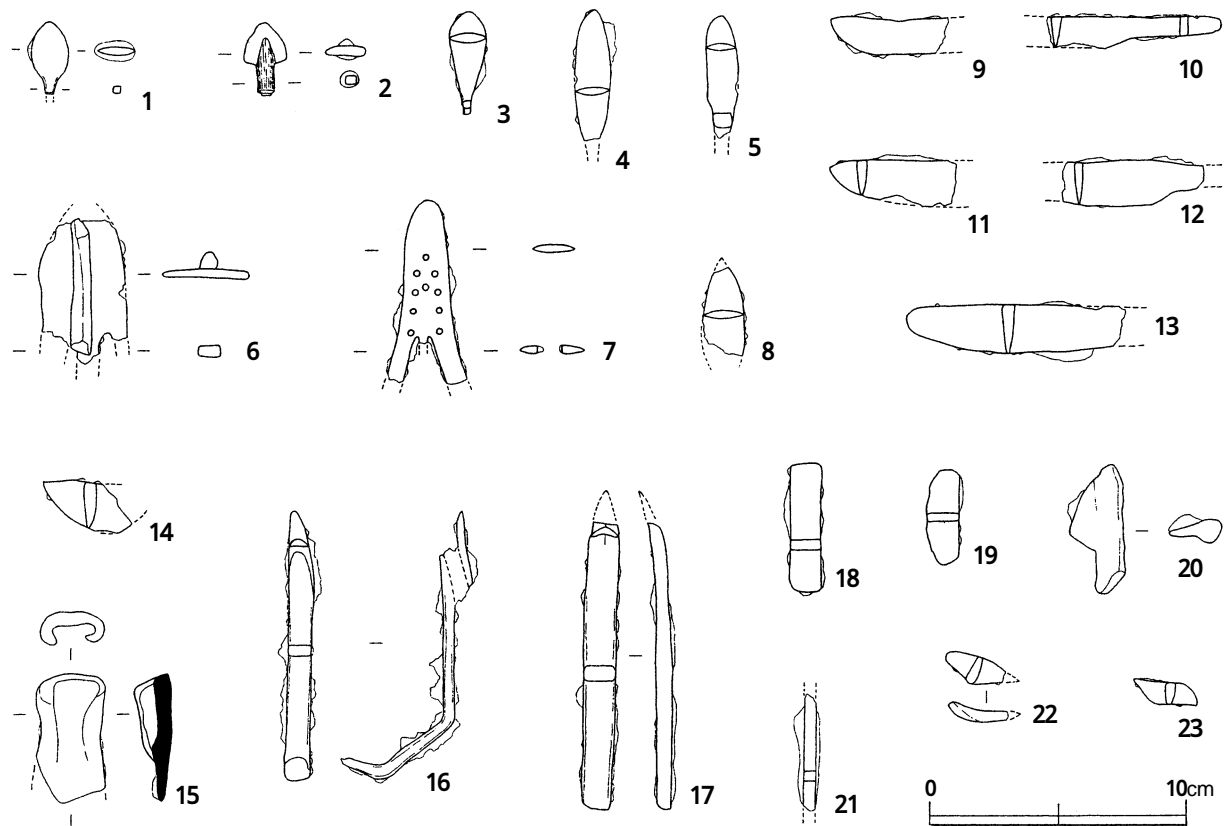
素材については吉原七ツ塚墳墓群・杉谷墳墓群から用途不明の鉄片が出土しており他に器種を確定することができないことから、素材と考えることが妥当であり、その流通に関しての好例である。また、この素材は非常に薄く小型であることからここから造り出される製品はおのずと制約を受け、集落出土鉄製品や鉄製品製作技術を考える上での重要な視点となると考えられる。

このように、墳墓出土鉄製品から大型武器類のほとんどが舶載品と考えられ、集落出土鉄製品は素材からも小型で薄造りであるといえ、副葬用の大型武器類と集落での実用品との格差があるといえる。

鉄素材や大型武器類は、北陸という地域で産出及び生産することはできない。その結果鉄製品が普及しはじめる弥生時代中期末以降、社会的生産消費体系から越地域的生産消費体系へと変化して、広域な物資や情報の流通・伝達ネットワークが形成されるものと考えられる。この中で弥生時代終末期には、福井県嶺北・加賀・富山県西部域で、土器文化圏においては月影式、手工業生産では緑色凝灰岩を用いた玉作り、墳墓形態は方形周溝墓・台状墓また墓制の主流にはなりえなかったが北陸型四隅突出型墳丘墓、鉄製品副葬風習では鉄刀、素環頭鉄刀・刀子がほぼ同一の分布圏を持ちさまざまな様相から地域圏の形成がみてとれる。



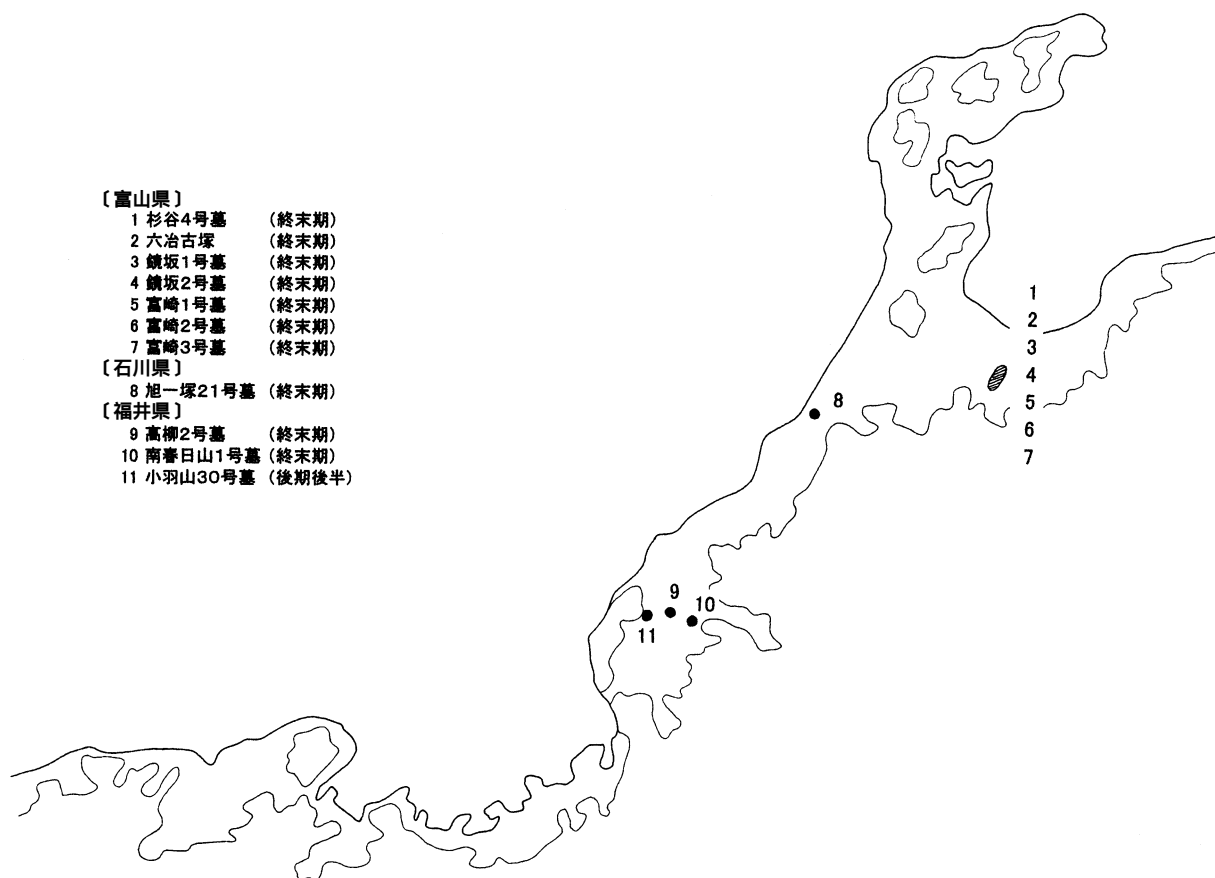
1～6 鉄鎌 7・8 袋状鉄斧 9・10 ヤリガンナ 11 鉄鎌 12～14 刀子 15～18 調整工具 19～22 不明鉄製品(素材?) 23 鉄針  
 林・藤島(泉田)遺跡出土鉄製品〔弥生時代後期後半〕(S=1/3 23のみ S=1/2)



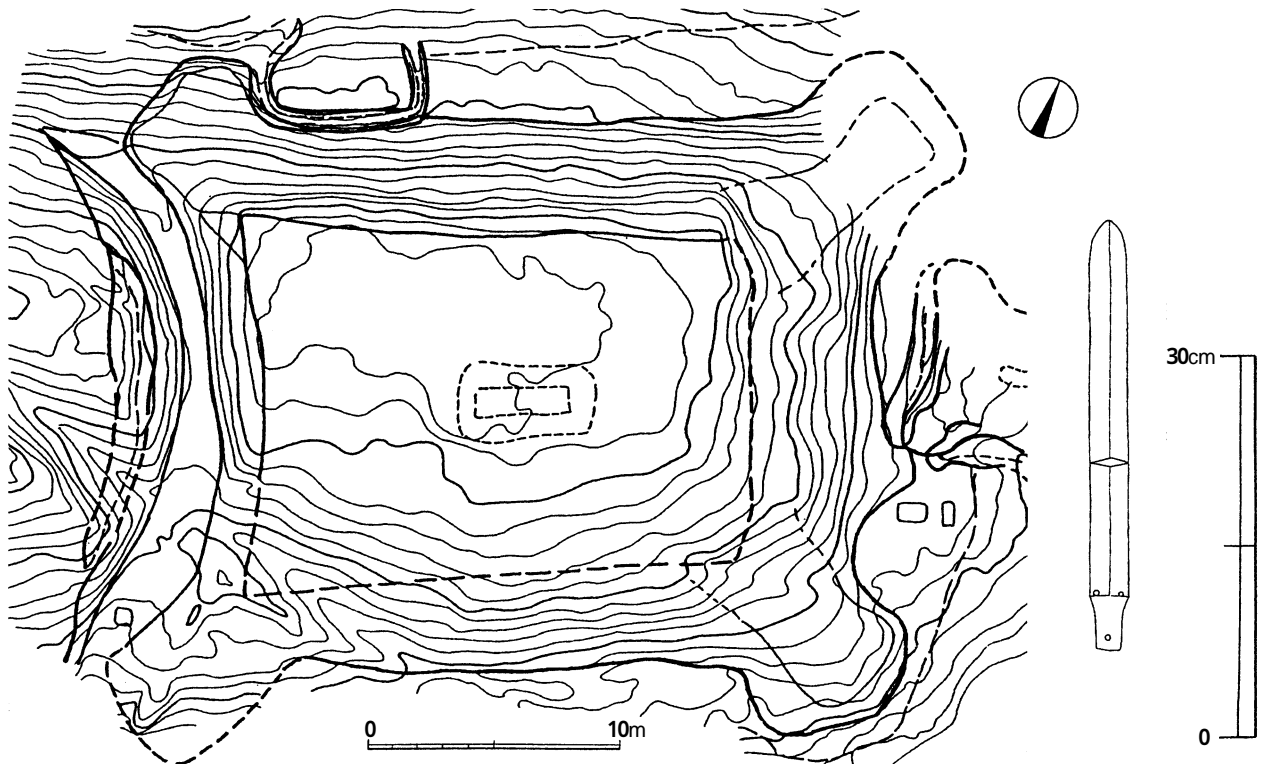
1～8 鉄鎌 9～14 刀子 15 袋状鉄斧 16・17 ヤリガンナ 18～21 不明鉄製品(素材?) 22・23 切片?  
 茶崎遺跡出土鉄製品〔弥生時代終末期〕(S=1/3)



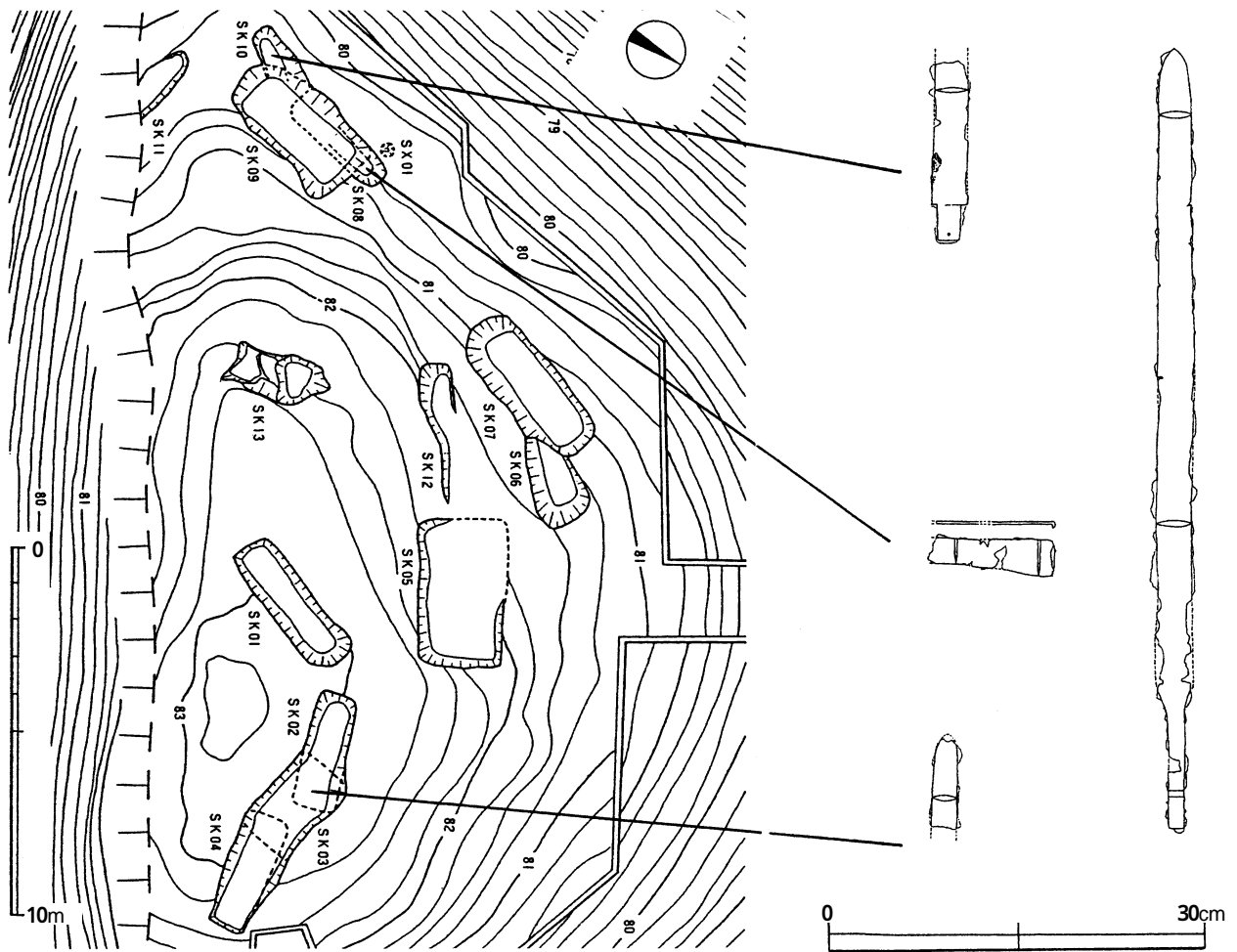
北陸地域における弥生時代鉄製品出土墳墓の分布図



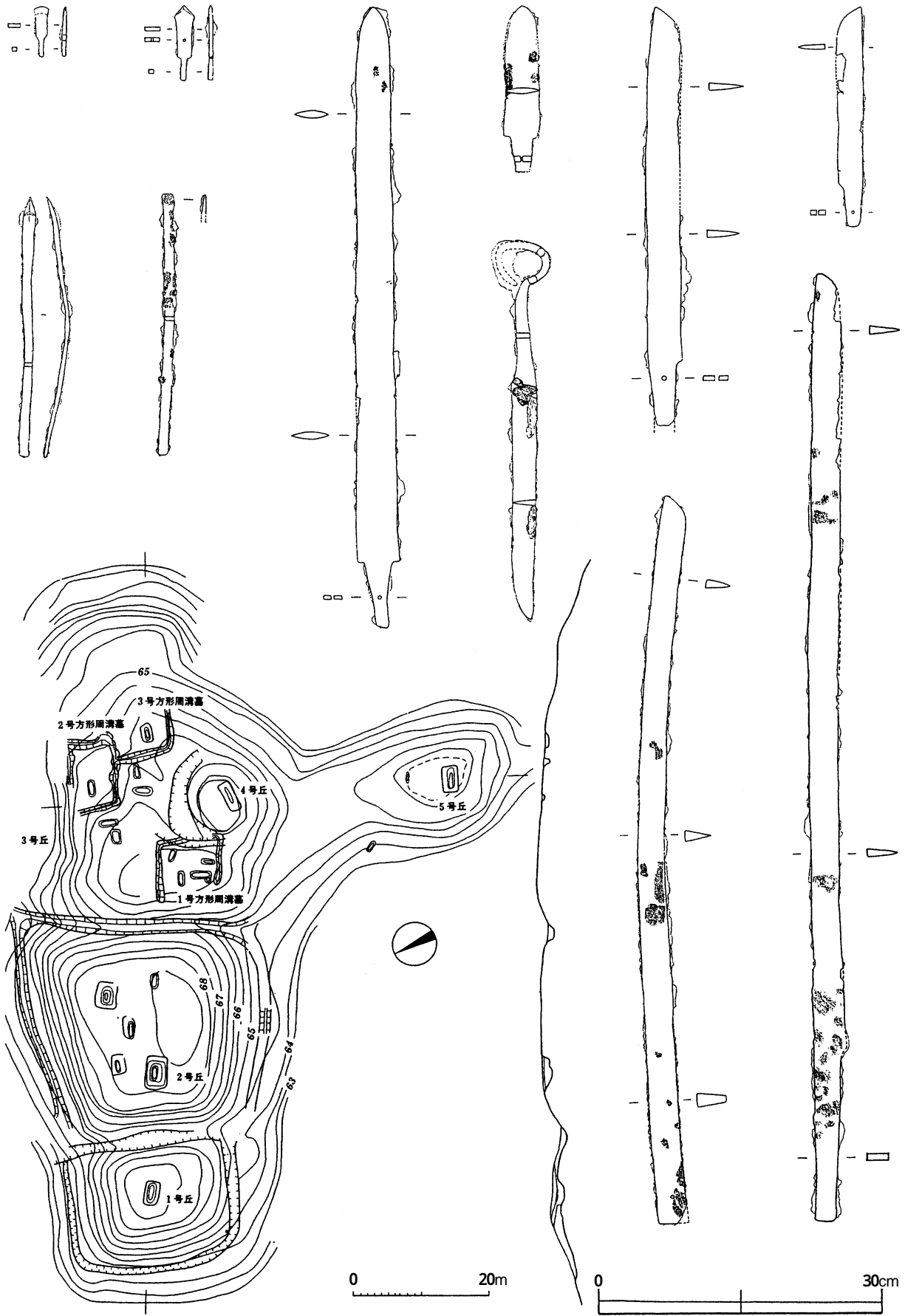
北陸地域における四隅突出型墳丘墓の分布図



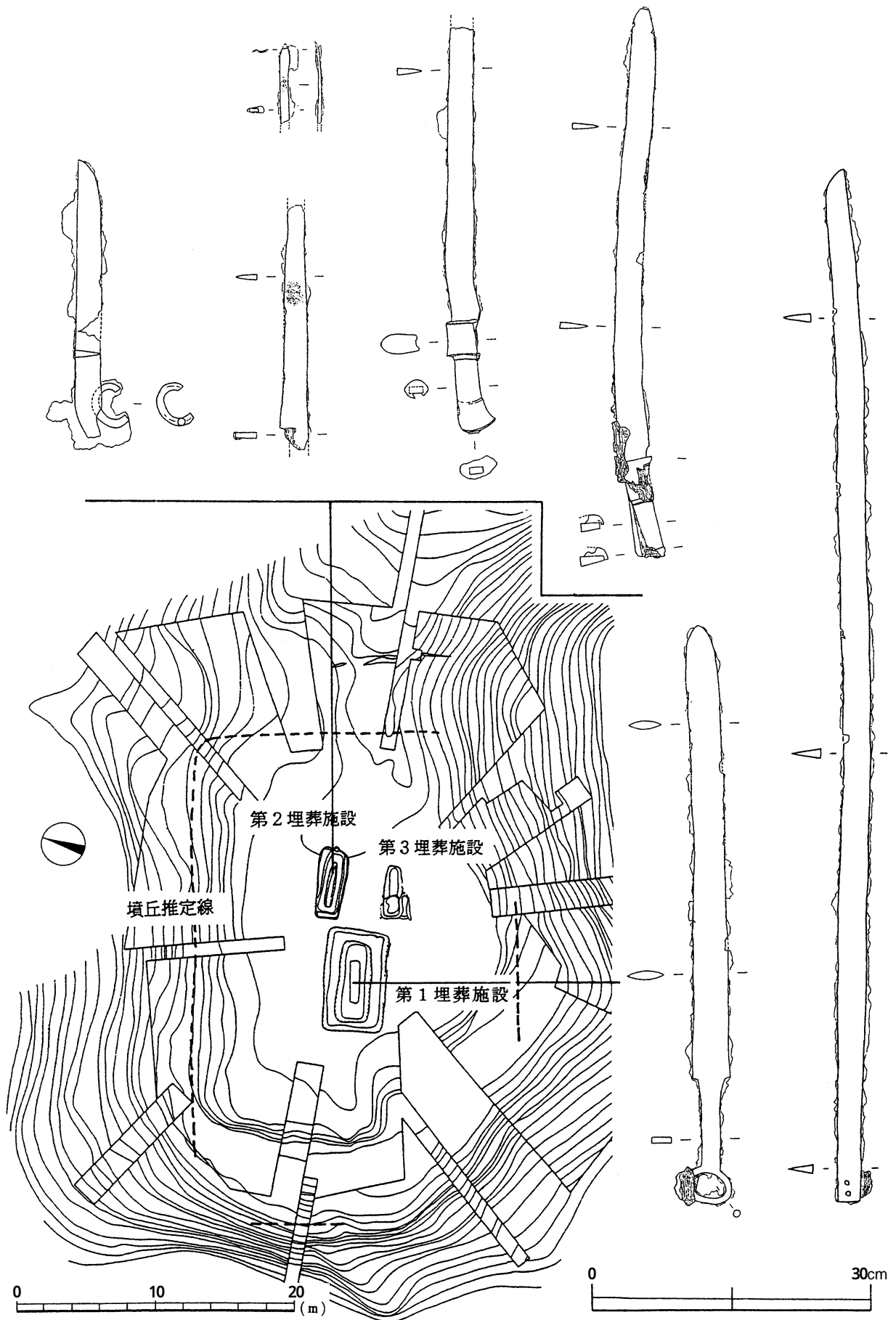
小羽山30号墓【古川1997より一部改編】(遺構図：S = 1 / 300 鉄製品：S = 1 / 6)



向山B遺跡【網谷1991より一部改編】(遺構図：S = 1 / 200 鉄製品：S = 1 / 6)



原目山墳墓群【福井市1990より一部改編】(遺構図：S = 1 / 800 鉄製品：S = 1 / 6)



乃木山古墳【松井1997より一部改編】(遺構図：S = 1 / 400 鉄製品：S = 1 / 6)



## 裏山遺跡の鉄器

小池義人（新潟県埋蔵文化財調査事業団）

### A．新潟県域の弥生時代の鉄器

現在40点前後の鉄器・素材等の出土が知られる。石川県域に比較して大きな開きがあるのは、そもそも弥生集落の調査例が乏しいことに加え、北九州・山陰との交易という鉄器獲得手段にあって西から東への漸減的傾向に沿うものであろう。

出土の分布は、いわゆる高地性集落と概ね重複しており、これらの遺跡が消費地であるとともに、鉄器の流通にも一定の役割を担っていると推測される。鉄器の帰属時期については、中期・後期前半に遡る確実な例は存在せず、普及が明確になるのは、高地性集落が形成される時期と重なる後期後半以降である。後期の遺跡は、程度の差はあれ玉作の遺跡であることが通有で、新潟県域においても鉄器は玉作技術の変化と密接な関係にあると言える。

頸城地方の3遺跡（裏山・斐太・下馬場）を除けば、鉄製品の出土はいずれも散発的である。県北部にある新津市八幡山遺跡は、畿内的な大規模高地性集落であるにもかかわらず、方形周溝墓の刃閔双孔鉄剣1点と竪穴の鉄鏃1点に限られ、鉄の保有状況は、頸城とそれ以外の地域とでは対照的である。ただし、頸城以外は散発的であるとはいえ、和島村姥ヶ入南遺跡の大型の袋状鉄斧（長さ15.6cm）、三条市経塚山遺跡の板状鉄斧、前述の八幡山遺跡の鉄剣のように、舶載と見られるものや、特定の地域に分布するものが含まれ、北に向かうにしたがって、数が現象するという単純な図式では理解できないものがある。なお、裏山遺跡の報告書における、鉄製品集成の不備と遺漏は、本集会の発表レジュメ集で概ね修正させていただいたので、詳細はこれを参照いただきたい。

### B．裏山遺跡の鉄器と玉

新潟県域で、小型の鉄器と鋤先が共出している例は裏山遺跡のみで、この点では山陰・北陸南西部との共通性が認められる。鋤先は2タイプ計6点があり、1遺跡の数量としては突出している。ただし、鉄板の厚さは1mm前後と薄く、刃幅も山陰・北部九州のものに比較してかなり小さく、鋤先としてはやや異様なものである。北陸での生産、あるいは再加工の可能性もあろう。有孔の鉄鏃は中部高地の石鏃と関連性のあるものであろうが、信州系の土器は1点のみであり、鉄器を多く保有する長野県域との関係は土器の上からは窺えない。また、この形態は山陰にも存在するものである。

8基の竪穴からなる小集落としては鋤先の量が突出していること、鉄器関連の遺物として70点あまりの砥石と165点の軽石製研磨具があることからすると、鉄器は集落の消費財のみではなく、保守工具をも含めて集散を目的に一時保有された可能性が高いと考えている。

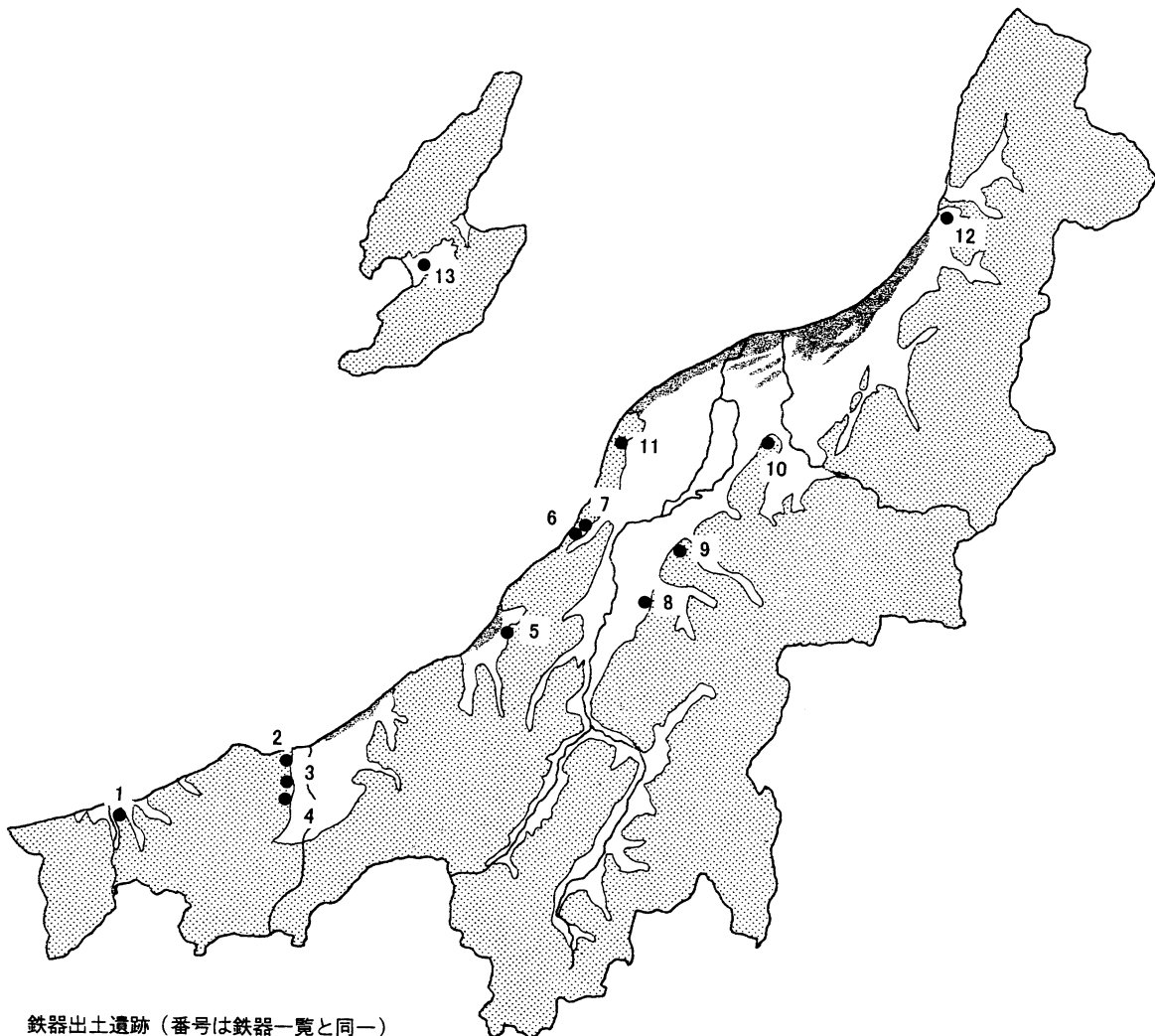
玉関係の遺物は、管玉の製品・研磨途上品・柱状剥片等と、ヒスイの角礫塊・半製品などがあるものの、碎片が皆無である。研磨・穿孔作業のみが行われたと考えることは否定できないが、一連の玉作工程の中で剥離調整作業が欠落するのは不合理であり、裏山では積極的に玉作を認めたい。玉の石材がない高田平野周辺では、地域完結的な玉生産を想定する富山の論考[富山2001]とは相違して、素材や半製品を二次的に生産する玉作遺跡と、これらを集散する集落が存在することになる。

鉄と玉は地域内で求められない物資であり、少ない資料からの推測ではあるが、高地性集落というランドマークが、集散地としてこれらの流通に深く関与していたと思われる。

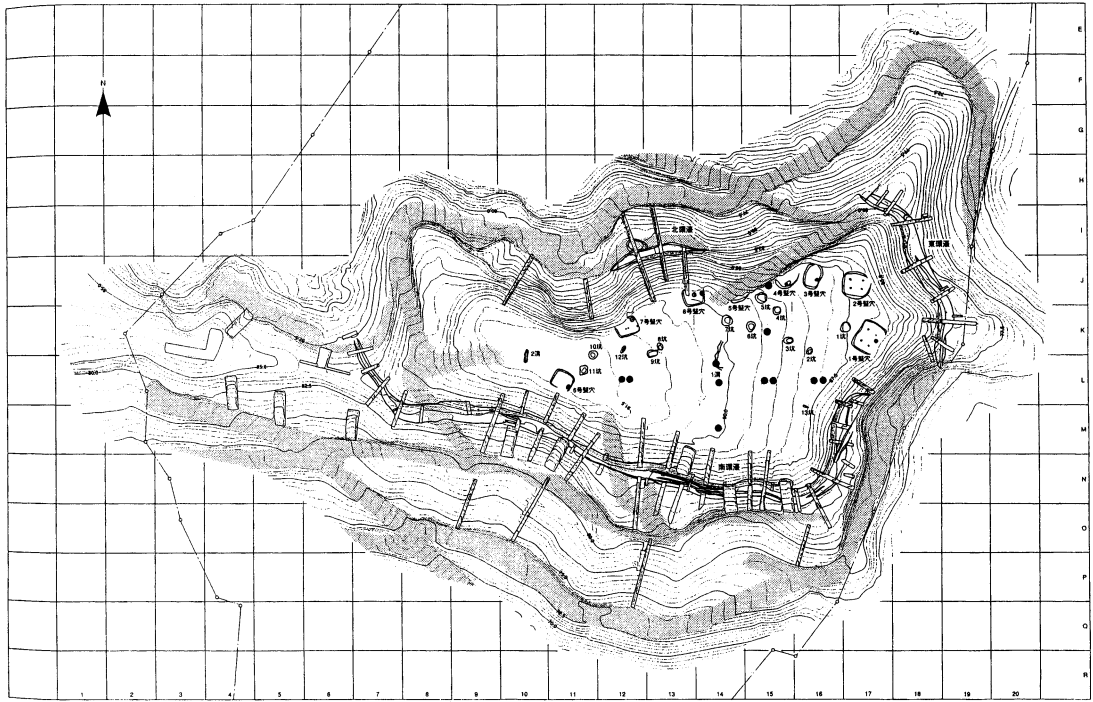
新潟県域における弥生時代の鉄器一覧（古墳前期までの時期幅を有するものを含む）

	遺跡名	所在地	出土地点	鉄器種別・数量	時期
1	後生山遺跡	糸魚川市	1号住居跡	「刀子」1	後期
2	裏山遺跡	上越市	包含層 1号溝	鋤先5・鉄鏃3・ヤリガンナ1・不明1 鋤先1	後期後半 //
3	下馬場遺跡	上越市	1号竪穴 2・6・7号竪穴 13号竪穴	鉄鏃1 不明鉄片各1 鏃4？（鏃着1塊）	後期後半 // //
4	斐太遺跡 （上ノ平・矢代山）	新井市	第1号住居址 第2号住居址 第24号住居址	「刀子」1・「釘片」1 「刀子残欠」1 「鉄片」1	後期後半 後期後半 後期終末～古墳初頭
5	西谷遺跡	刈羽郡刈羽村	環濠	「不明」1	後期後半
6	姥ヶ入南遺跡	三島郡和島村	墳墓	「鉄剣」1・「鉄斧」1	後期終末
7	奈良崎遺跡	三島郡和島村	竪穴 溝	不明1 鑿状鉄製品？1	後期後半～終末 後期後半～古墳前期
8	横山遺跡	長岡市	不明	「鉄製品の小片」1	後期終末～古墳初頭
9	経塚山遺跡	三条市	3号住居址	「板状鉄斧」1	後期後半
10	八幡山遺跡	新津市	2号方形周溝墓主体部 S I 13号住居址	「鉄剣」1 「鉄鏃」1	天王山式 後期
11	山谷古墳	西蒲原郡巻町	小マウンド1盛土	「袋状鉄斧」1・「刀子」1	後期後半～古墳前期
12	砂山遺跡	村上市	不明	「鉄斧」1・「刀子」2 ※鉄斧は関雅之氏の採集物 ※小片・上原1972では鉄器の記述はなし ※橋本1997では「鑿」の記述あり	天王山式主体
13	千種遺跡	佐渡郡金井町	不明	「刀子」1	後期終末～古墳初

時期と土器編年の対応 後期前半：猫橋式（西念・南新保Ⅳの2期） 後期後半：法仏式（// 3期）  
後期終末：月影式（// 4期） 古墳初頭：白江式（5期）

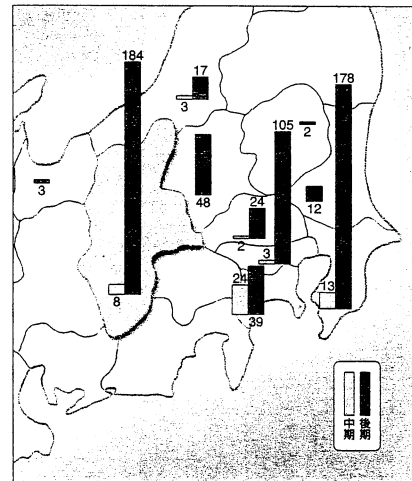
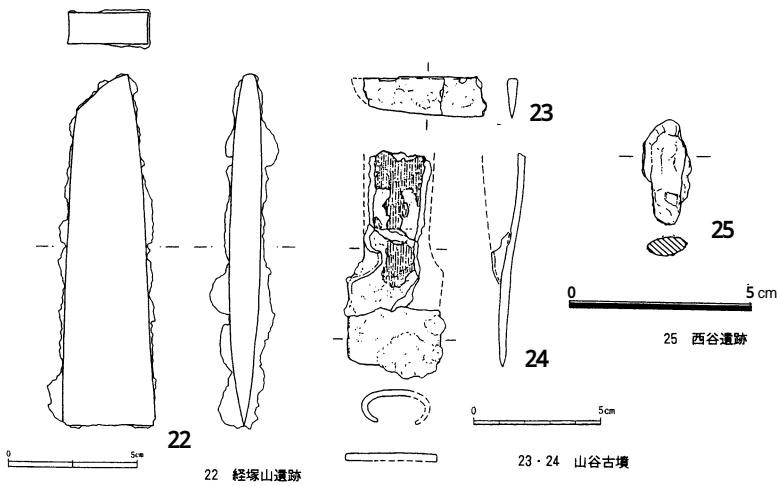
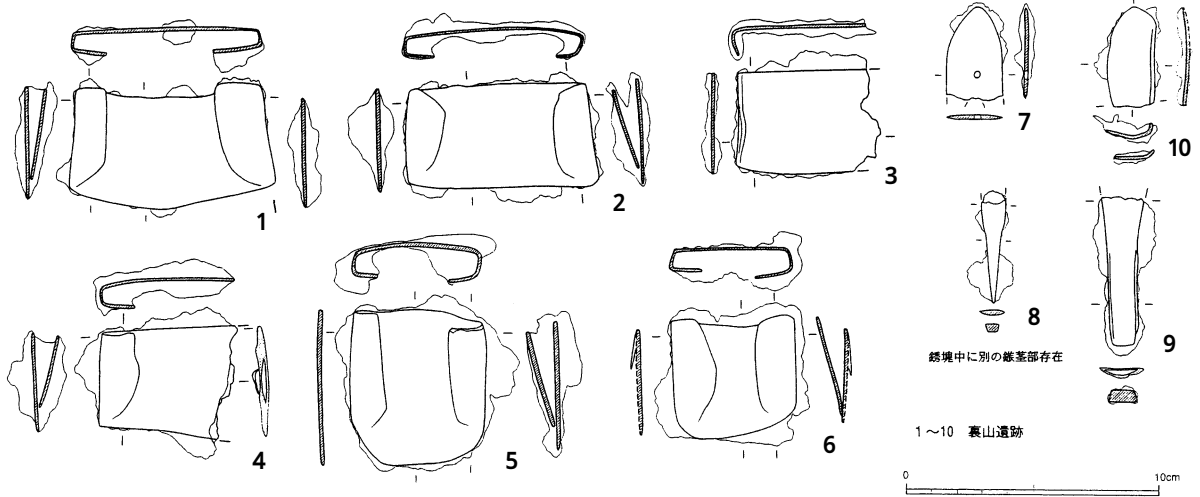


鉄器出土遺跡（番号は鉄器一覧と同一）



●印は鉄器出土グリッドまたは遺構

※アミ目は損壊範囲



図信濃及び周辺地域の鉄器出土量

[大阪府立弥生文化博物館2001]



## 鉄器の導入と社会の変化

- 東北地方 -

齋藤 淳（青森県中里町立博物館）

東北地方においては、弥生後期～古墳時代に相当する3世紀～6世紀にかけて、石器の減少とともに鉄器の出土が散見されるが、南北の地域差が著しい。東北南部においては、土器群や墳墓の形態から北陸地方との関連がうかがわれるが、前方後円墳に伴う各種の鉄製品ならびに集落出土の羽口・鉄滓が報告され、すでに鉄の加工が開始されたと考えられる。一方、東北北部からは、北海道系土器を伴う土坑墓から刀子や農工具が出土する例が増加し、古墳文化との接触、活発な交流により鉄器化が進行する様子が看取される。

6世紀後半頃には、東北南部で大規模な鉄生産が開始され、北部では陸奥側を中心に終末期古墳が出現するが、この頃から東西（陸奥・出羽）の地域差が拡大傾向となる。特定の竪穴住居ならびに終末期古墳からは、従来の刀子や農工具に加えて新たに武具や馬具をはじめとする豊富な鉄製品が出土し、階層性の進行と鉄器の安定した流通が推測されるとともに、律令国家とのつながりを背景とした威信財的な役割が鉄器に期待されていたことが予想される。この頃から急増する集落からの鉄器の出土も一般的となり、鉄器の普及と畑作を中心とした開拓が表裏一体にあることをうかがわせる。

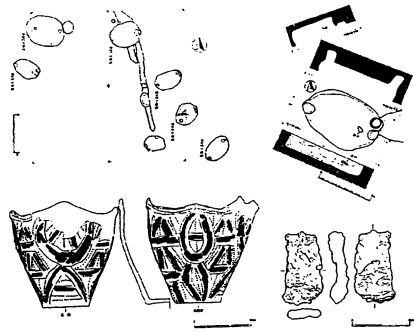
8世紀前葉には陸奥国に多賀城が設置され、周辺遺跡から製鉄炉・炭窯・鍛冶炉などが一体となった鉄生産遺構が見ついている。炉の形態等から北関東や東北南部との関連が考察されており、当該地方からの技術移入によって律令国家の管理の下鉄生産が行なわれた可能性が高い。生産された鉄器類は、城柵ほか東北北部の在地有力者層等へ配分されたと考えられる。一方出羽側では、8世紀前後に出羽柵（秋田城）が活動を始め、秋田周辺地域において若干の鉄生産関連遺跡が認められるものの、7～8世紀の集落は少ない。律令期の東北地方においては、律令国家が主導した鉄生産拠点を背景として、陸奥側の流通ルートが卓越していたことが考えられる。

9世紀前葉には陸奥国において志波城が創建されるが、城内からは多量の鉄器類と鍛冶遺構が検出されている。城周辺においても集落が倍増し、鉄器の出土量も増加するが、当該期の終末期古墳群においては次第に副葬品が簡素化する傾向が認められる。出羽側では、秋田城周辺において9世紀後葉ころの鉄生産関連遺跡が見ついている。製鉄炉の形態から北陸との関連が考察されている。これらも時期はやや下るものの、陸奥同様、律令国家の主導の下技術移入されたと考えられるが、元慶の乱（879年）前後を画期として、鉄生産の主体は米代川流域ならびに津軽地方に移行する。

津軽地域においては9世紀後葉以降、集落の爆発的な増加に伴って鍛冶遺構が急増し、「1集落1鍛冶遺構」というような活況を呈するが、これらの現象は人口増と津軽平野の急速な開拓による鉄器需要を反映したものと考えられる。10世紀後葉には防御性集落が出現するとともに、米代川中～上流域・岩木山麓に複数の炉を有する鉄生産遺跡が操業を開始し、鉄・鉄器生産は最盛期を迎える。集中・専門的な生産形態であり、北方への広域流通を目指した操業と捉えられる。

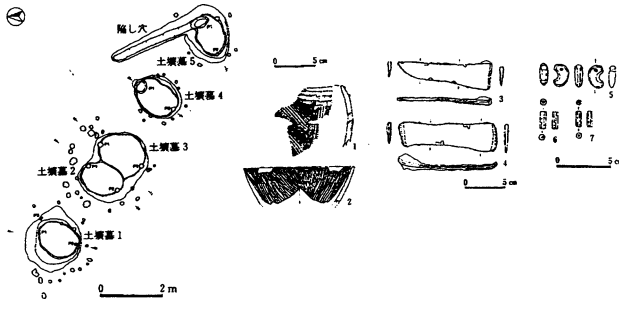
東北北部における鉄生産は、ほぼ防御性集落が廃絶する11世紀末頃まで続くと考えられるが、奥州藤原氏の下に統合される12世紀以降の鉄生産遺構は明らかでなく、南部鉄あるいは中国地方の鉄生産に集約された可能性がある。

Fig.1 寒川Ⅱ遺跡(秋田県能代市):3C後



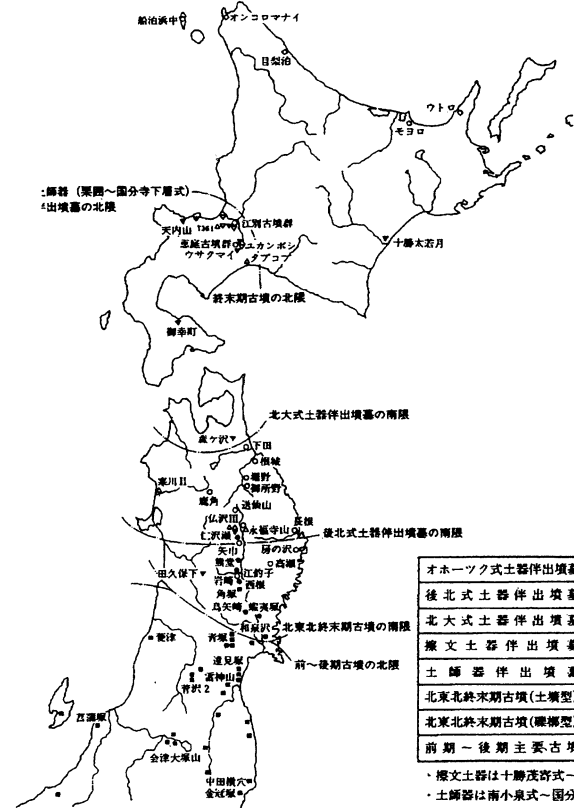
秋田県教育委員会 (ただし天野哲也 1997より転載)

Fig.2 永福寺山遺跡(岩手県盛岡市):4C前



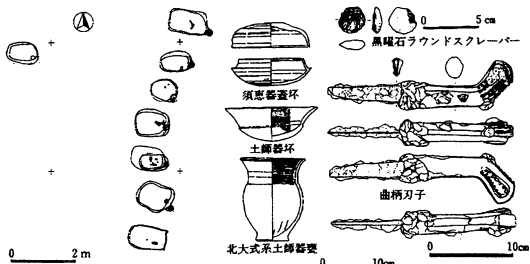
盛岡市教育委員会 (ただし阿部義平 1999「蝦夷と倭人」より転載)

Fig.4 東北地方の墳墓と古墳



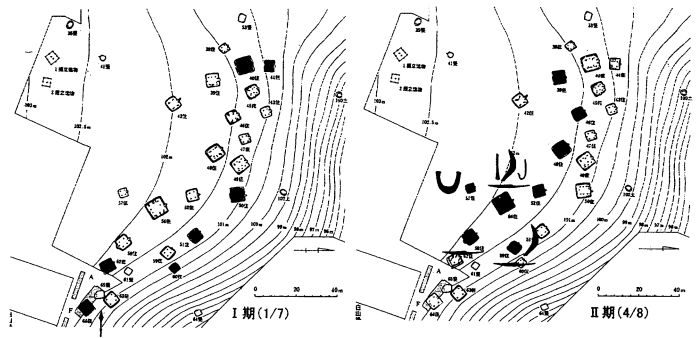
八木光則 19977～9世紀の墓制-東北北部の様相- 日本考古学協会1997年度秋田大会資料集

Fig.3 田久保下遺跡(秋田県横手市):6C



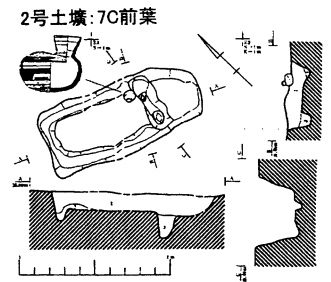
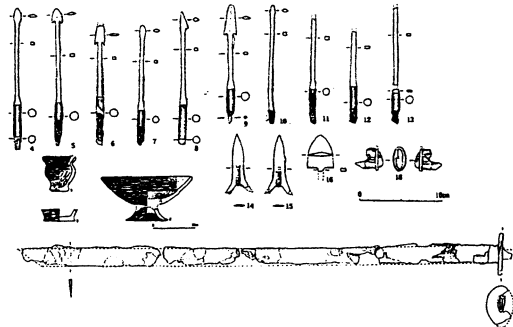
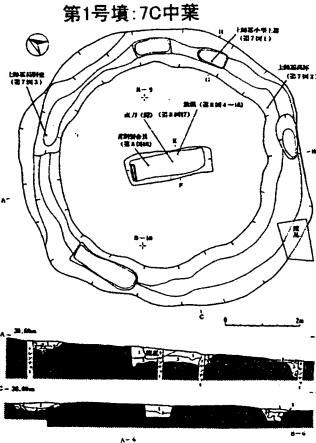
秋田県教育委員会 (ただし阿部義平 1999「蝦夷と倭人」より転載)

Fig.5 田面木平(1)(青森県八戸市):7C中葉



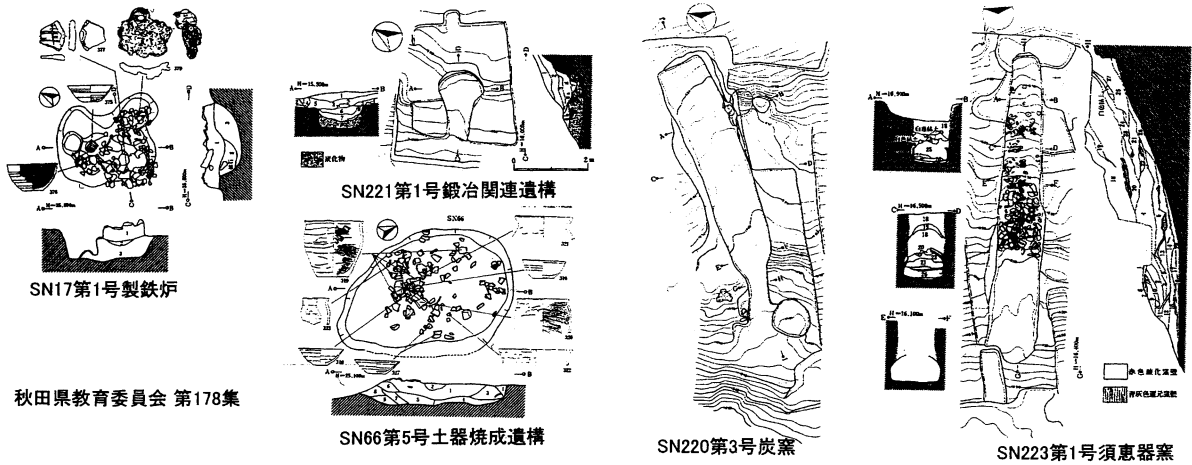
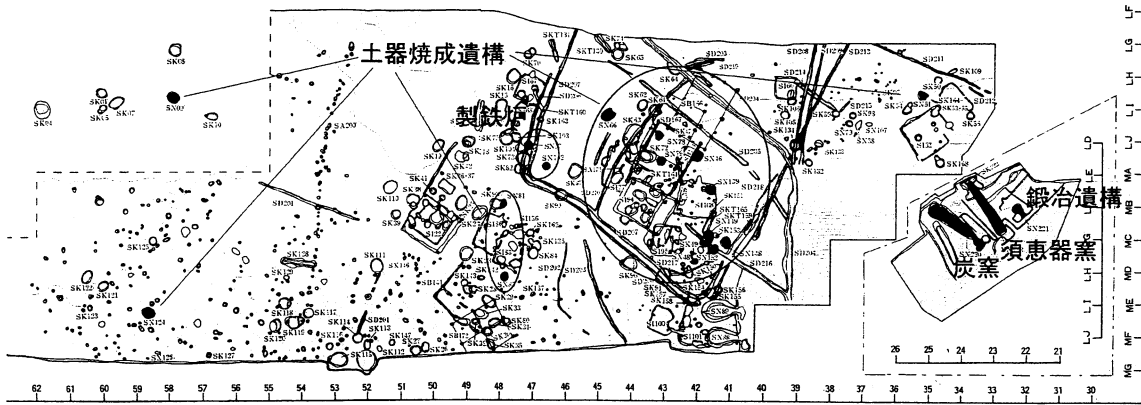
八戸市教育委員会 第34集

Fig.6 阿光坊遺跡(青森県下田町)



下田町教育委員会 第1～3集

Fig.7 十二林遺跡(秋田県能代市):10C前葉



秋田県教育委員会 第178集

青森県教育委員会 第52集

Fig.8 大平遺跡(青森県大鰐町):10C前葉~後葉

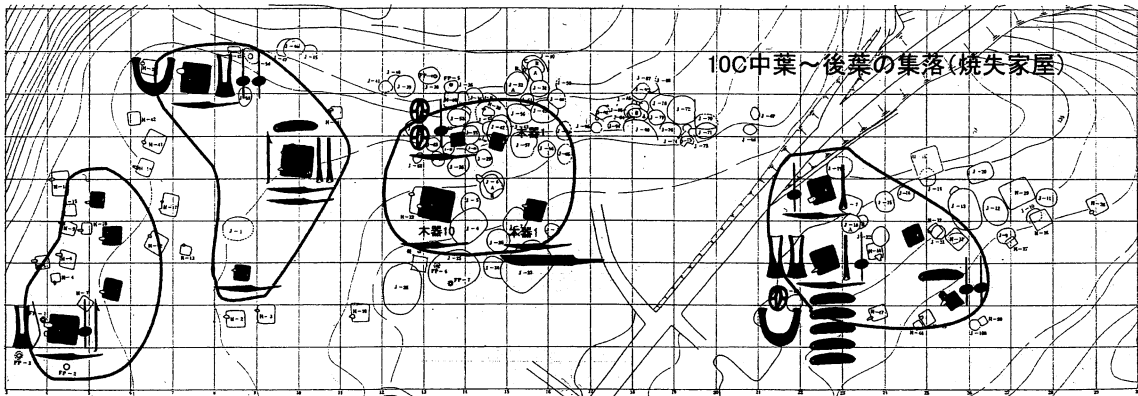
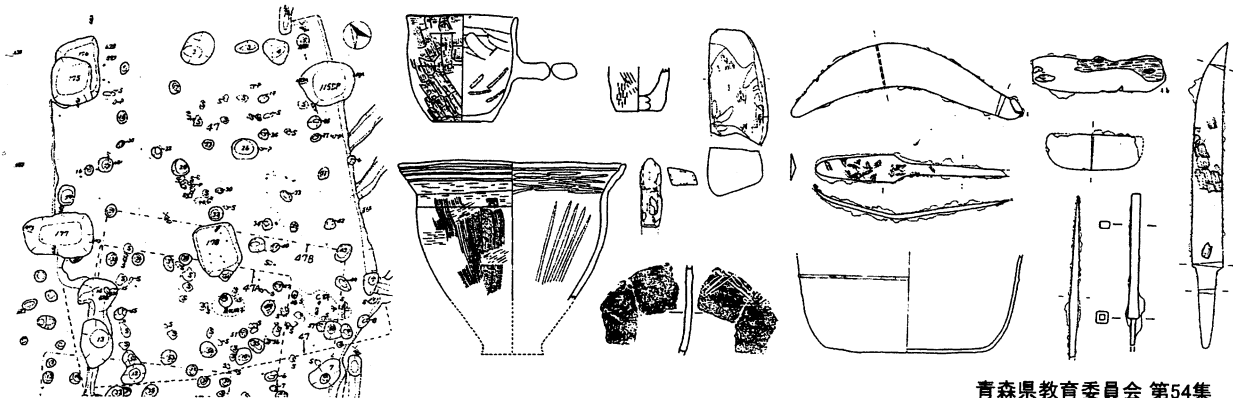


Fig.9 古館遺跡(青森県碓ヶ関村):10C後葉~11C後葉  
第47号跡:11C前葉



青森県教育委員会 第54集



## 鉄器の導入と社会の変化 - 北海道 -

三浦 正人（財団法人北海道埋蔵文化財センター）

北海道の鉄器の初源期は縄文文化期前半（弥生時代にほぼ相当）である。現在のところこの時期の鉄器出土遺跡は多く見ても20ヵ所に満たない。骨角器にみられる鉄製利器による加工痕を含めてもまだ、極めて少量の鉄器が使用されていたに過ぎないと言える。鉄器の出土はほとんどが墓からと限定されている。

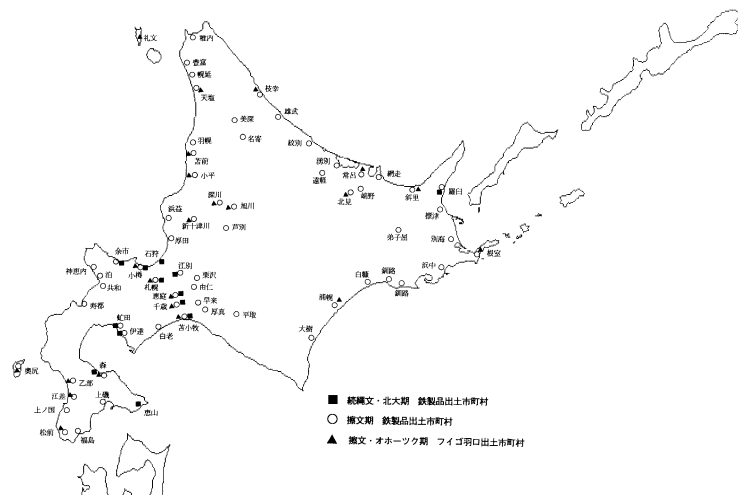
7～8世紀の縄文時代末期の北大期になると土師器文化の影響を受け、石狩低地帯を中心とした道央圏で、東北地方末期古墳の副葬品と共通する太刀・蕨手刀・小刀・刀子・鎌・斧・針・鑿子などが、土坑墓に土器とともに副葬されるようになる。相前後して擦文文化が成立する。

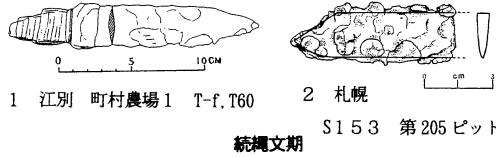
擦文文化期前葉の9世紀前半には北海道式古墳も築造され、同時期の土坑墓ともども多量の鉄器が副葬される。鉄製鍬先も登場し古墳の築造にも使用されている。北大期を含めて8世紀後半から9世紀前半のこの道央圏の状況が、交易によるものが戦闘体制を反映するものかは検討を要するが、大きな社会変化をもたらされたのは確かで、擦文文化成立もこの事象によるところが大きいと思われる。

ところで、北海道では5～9世紀にオホーツク海沿岸を中心に道東部や日本海側の海岸線にオホーツク文化が広がる。特に道東部海岸沿いには北方からの民族が定住し、墓の副葬品や住居の出土品から見て豊富な種類と量の金属器文化を展開する。この文化は縄文後半期や擦文文化と互いに影響しながら擦文文化に融合され、アイヌ文化の礎となる。鉄・銅・錫などの金属製品については、それぞれが供給元なのか供給先なのかは検討が必要だが、北方地域との交易・融合という点で多大な影響をもたらした社会変化を引き起こしたといえる。

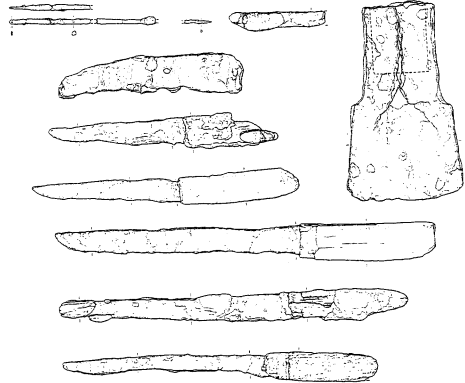
9～10世紀以降の擦文文化期では、住居内での鉄器の発見例が主体となり、種類も刀・刀子・鎌・鍬・斧・針の一般的なものに加え、紡錘車・鉤状魚獲具や鉄製帯飾りも出土し、刀子の形状も用途別にか多様になる。金属学的解析からも指摘されるごとく、東北地方から製品とともに供給される鋼や銑鉄をもって鍛冶が行われていたことも、鍛冶遺構や鉄滓・鍛造剥片などの検出やフイゴ羽口・素材となる棒状鉄などの出土から明らかである。刀子や鉤状魚獲具などに自家製品と思われるものも多くなる。東北地方の生産地からの製品や素材の供給は交易によるものであり、交易権や集落内の鍛冶の有無が集落間の社会的階層や勢力状況・集団内での個人の地位・畑や漁獲などの生産活動に大きな影響を与え、社会変革が起きたに違いない。

北海道における鉄器導入の問題は東北・北陸地方との交易や交流、オホーツク文化を含めた北方との関わりといった汎日本海・オホーツク海的な広範囲の体系のなかで考える必要がある。

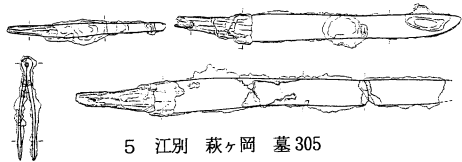




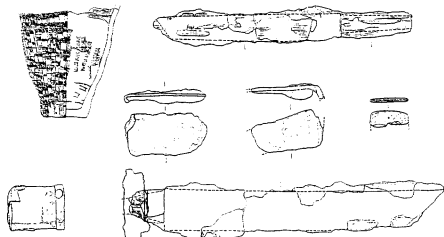
1 江別 町村農場1 T-f,T60 2 札幌  
S153 第205ピット  
統縄文期



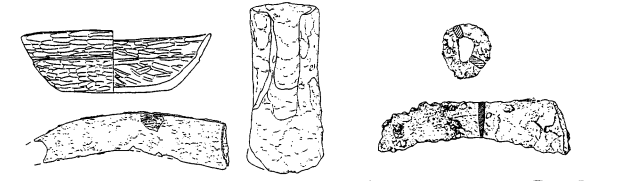
4 恵庭 ユカンボシE7 P-28



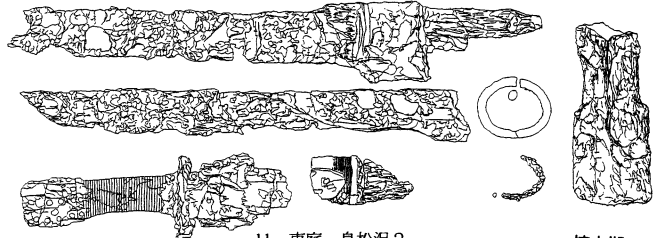
5 江別 萩ヶ岡 墓305



7 小樽 蘭島D地点 81-9A土壌  
北大期~擦文期

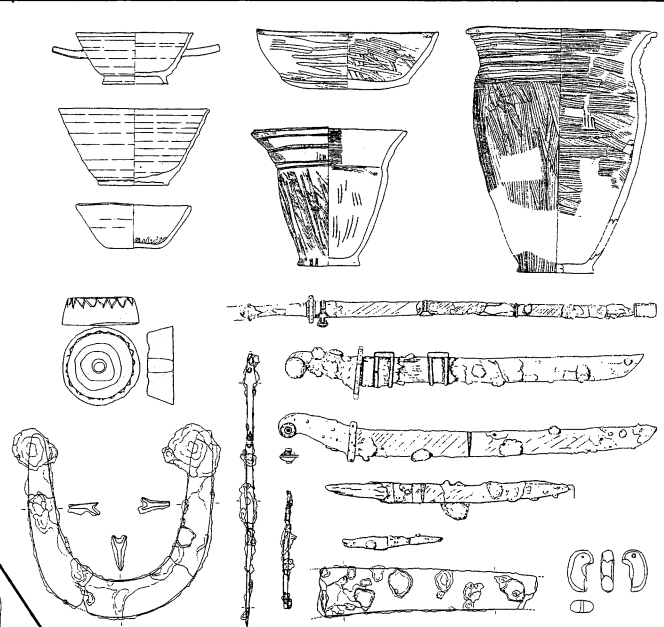


8 千歳 ユカンボシC15 P-12 10 余市 天内山 1号墳墓

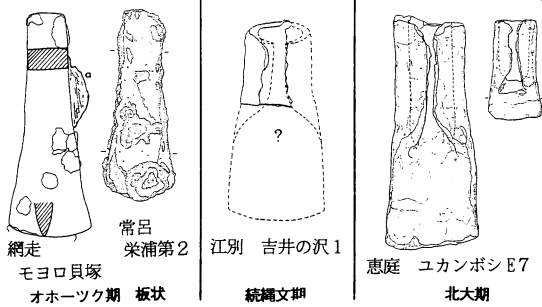


11 恵庭 島松沢3 擦文期

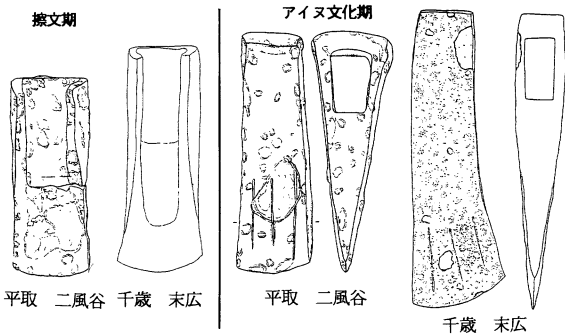
土坑墓



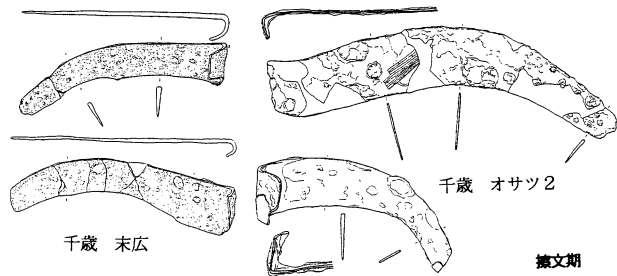
12 江別 江別古墳群・町村農場1 擦文期  
北海道式古墳



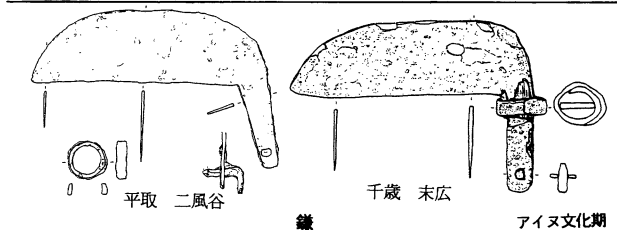
網走 常呂 栄浦第2 江別 吉井の沢1 恵庭 ユカンボシE7  
オホーツク期 板状 統縄文期 北大期



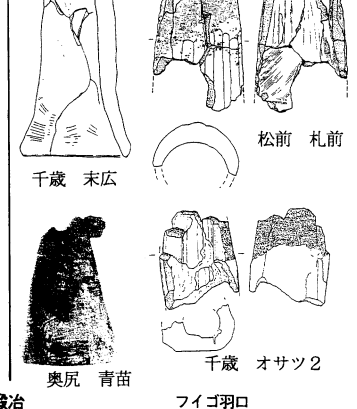
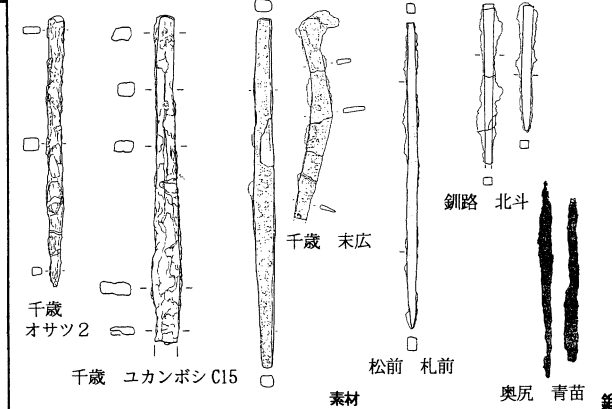
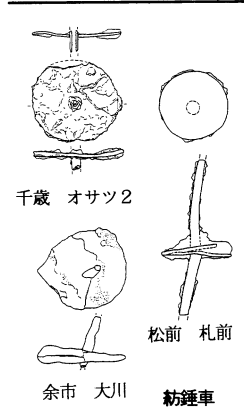
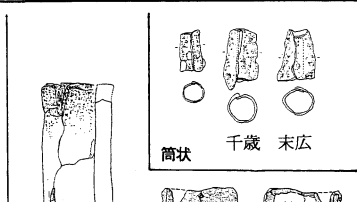
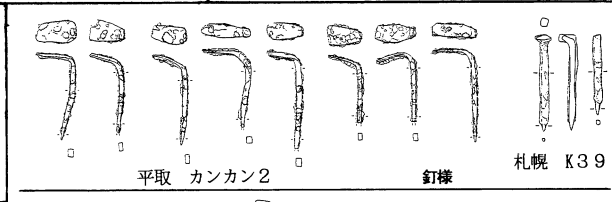
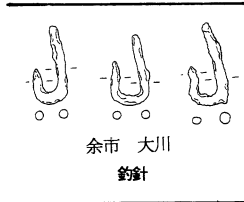
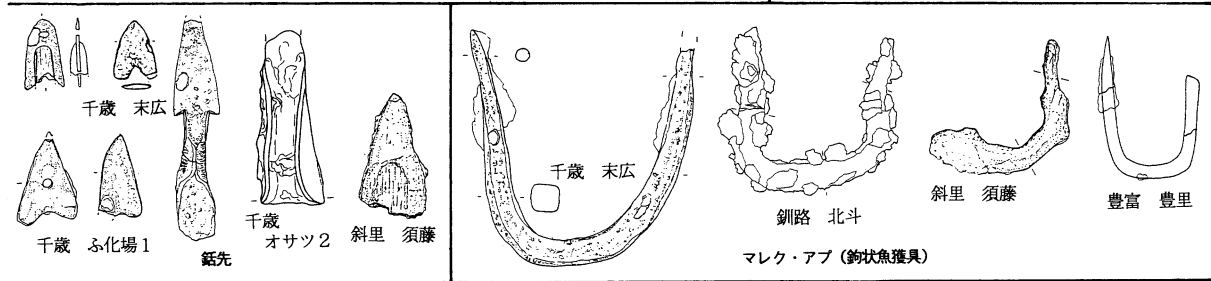
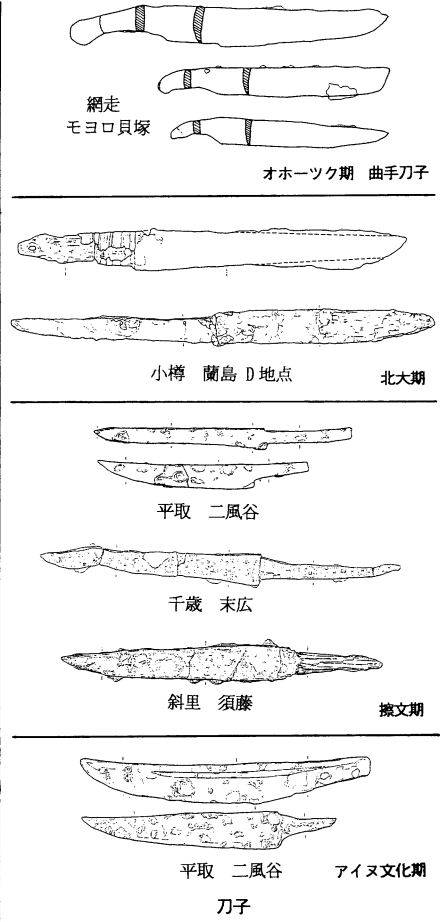
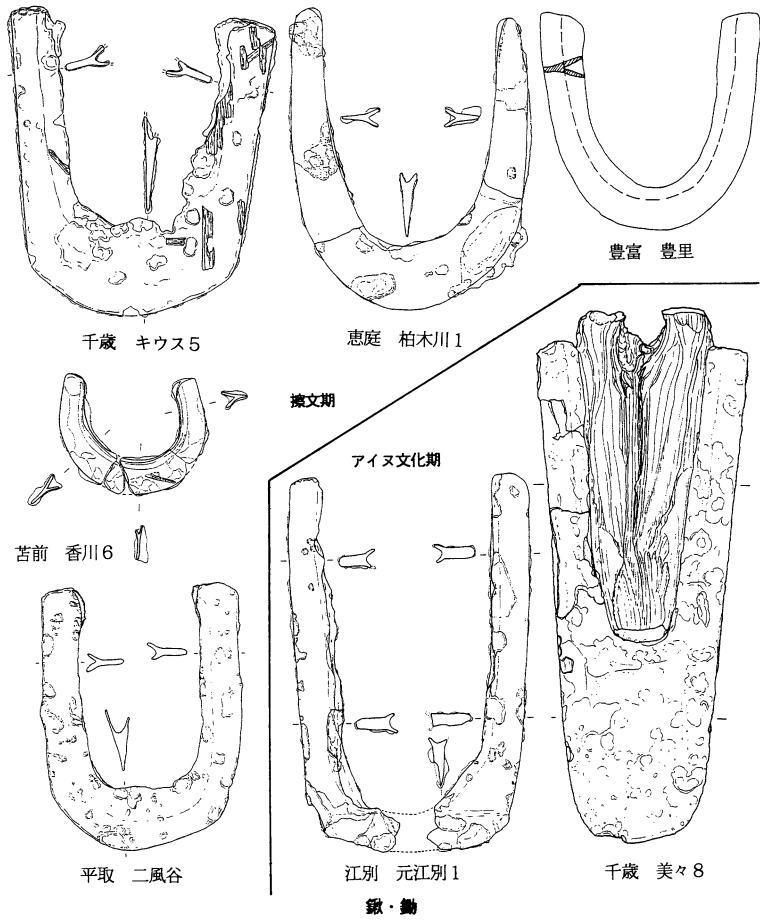
擦文期 アイヌ文化期  
平取 二風谷 千歳 末広 平取 二風谷 千歳 末広  
斧・手斧



千歳 末広 千歳 オサツ2 擦文期



平取 二風谷 千歳 末広 アイヌ文化期



## 討論と展望

まとめにかえて

伊藤雅文（調査第4課）

「鉄器導入による社会の変化」というテーマで検討を行ったものであるが、鉄器の導入といっても製鉄とかかわる部分を意識的に外している。鉄器の使用には、鉄製品そのものを他地域から入手して使用することができる場合、鉄素材から製品を作り出し使用する場合、鉄原材料から鉄素材を作り出しさらに製品まで作る場合の大きく三つの状況がある。このうち第三点目を外したのは、製鉄の始まりが各地域によって時期的な違いがあることや、その時期が古墳時代なのかそれとも奈良時代なのか、平安時代なのかということにより、それぞれの背景とする社会が大きく異なり、それらを同列に扱うことが困難なためである。したがって、今回の研究集会では、鉄器を知らなかった集団がそれを知りそして使うことによってどのように人々の暮らしが変わったか、つまり社会がどのように変わったかをテーマとする。



研究集会

前半の各論では、西日本の弥生時代中心とする論の展開と、東北・北海道の古代から中世に論の中心があるものという違いははっきり出てきた。発表者の興味を中心ということもあろうが、それぞれの地域における資料の偏りに起因したものであった。北陸でも新潟県では見かけ上急激に弥生の鉄製品の出土量が減り、東北ではまとまった資料が非常に少なく、地域の動きを知るには9世紀まで待たねばならならずそれが製鉄と結びついているところに、西日本との大きな違いを感じさせる。

討論では、主に鉄製品がそれぞれの地域に入るときの「動機」について意見交換を行い、それが普及するときの要因について各地位の様相を比較した。北部九州のような常に大陸とのつながりを持つような地域では鉄製品のような舶来物が入ってくるのは至極当然のことといえようが、それ以外の地域は寡占状況にある北部九州から移入するの必要があり、そこには目的があるはずである。

鉄器が入ってくる時期を比較すると、東に行くにしたがって時期が下る傾向にあるものの、北陸でも東部を境にして大きなヒアタスがあった。各地域ともその時期をおおむね把握することができるもののその移入の動機まではわからない。先進的な新しい道具を受け入れるのにそれほど大きな動機付けが必要ないのであろうか。むしろその後の鉄器使用の展開の仕方が大きく異なっていることがわかった。山陰や丹後、北陸でも石川地域などでは玉作と深くかかわっているようであった。しかし、同じ玉作地域である越前での様



討論の様子

相が墳墓資料を中心としていることから十分に把握できないのが実情であり、同列に論議することはできない。

一方これら以東の地域では、弥生時代後期から古墳時代に鉄器の流入を認めつつもそれが普遍化しないところに大きな違いがある。当然といえば当然ながら、今回の研究集会でこの違いを確認することができた意義は決して小さいものではない。すなわち、東北では弥生時代後期、北海道は古墳時代後期とやや遅れるようであるが、鉄器の出土が見られるのである。それにもかかわらずその普及するまでにはかなりの時間を要しているのである。鉄器を知ることと鉄器を使うことの意義が違うことを示唆するものであり、それがその社会の状況によるものであるのかどうか問題となろう。



資料見学会の様子

#### 資料見学会

翌2月23日に当センター研修室で、石川の初期鉄器資料を中心に資料の見学会を行った。新潟県の小池義人氏に裏山遺跡をはじめとする新潟県の資料を持参していただき、皆でじっくり検討させていただいた。また金沢市塚崎遺跡の一括や弥生時代の鉄器資料など、並べてみると本当に少ないことを実感した。しかも刀・剣等の大型鉄製品の少なさに同じ北陸でもやはり越前とは違う様相なのだということもまた改めて認識し、個人的には

これが古墳の展開の仕方の違いを反映しているのかとも思った。

#### 展望

今回初めて個別テーマによる研究集会を行ったわけであるが、事前の勉強会などの職員の問題意識の深化が十分にできなかった。理想としては、研究集会前に事前勉強会を何回か開きテーマに関する問題点を把握して研究集会の趣旨・目的とするところを理解するのが望ましい。このような勉強会によって研究集会の発表を理解し、それぞれがそれぞれの立場で問題点を把握し、その歴史的な意義を理解することができたであろう。

一方、現在の考古学研究全般に言えることであるが、研究の細分化に伴う専門として閉鎖的な環境にあり自分の専門以外への関心が比較的薄い状況にある。当埋蔵文化財センターの調査員にしてもよく似た傾向にある。今回の「鉄器」というテーマは、鉄器の実測さえ不十分な能力しか持たない職員がいる中でどれほど関心を持たせることができたか、それはどれほど職員各自に考古学的な問題として認識してもらったことができたか、ということにつながるが、その効果のほどは真摯に考えれば疑問なところもある。



資料見学会の様子

さらに、日々の発掘業務に追われ、そして遺物整理を淡々とこなし、普及業務の手伝い等々、発掘調査を通して考古学的な問題点を研究あるいは地域の歴史を考える時間が少なくなっていることと同時に、われわれ調査員の考古学研究への意欲が近年急速に衰えているように感じられる。これは、筆者の実感であり、個人的な体験でもある。調査組織が大きくなっていくにしたがって出てくるさまざまな問題点が調査員に波及しているのではあろうか。それとも、調査員の資質自体がレベルダウンしているのではあろうか。

このような当埋蔵文化財センターの現状からすれば、討論の中で職員からの質問が、あるいは意見がまったくなかったのは、寂しいことながら当然といえるかもしれない。熱弁を振るわれた各講師の方々にとって少々物足りなさを感じられたかもしれない

さて、弥生時代の鉄器の研究は愛媛大学の村上恭通氏等の研究により近年めざましいものがあり、この研究集会もその成果を受けて企画したものである。また、林大智氏の作業によりこれらの鉄製品の実態がまとめられ、ようやく他地域と比較することができるようになってきたことも大きな要因である。日本海側の初期鉄器は太平洋側の鉄器とは異なる流通であった可能性が高いことが指摘されているところであり、丹後地域での玉作と鉄製品とのかかわりが想定されているところである。山陰や北陸でも同じような玉作とのかかわりに興味をもたれる。いずれの地域も弥生後期以降に玉作製作で鉄器の比重が高くなり、その普及に重要な役割を果たしたことがわかった。しかし、玉作は日本海側のほとんどの集落で行なっているわけではない。

さらに、墳墓への鉄器の入り方を見ると、それぞれの地域で個性があるように、最低旧国レベルでの小地域における鉄器の実態把握もまた重要な作業であることがわかった。墳墓のみならず、遺跡での出土の特徴あるいは遺物としての特性等々各方面からの分析により、これから見出される地域ごとの差異の持つ意味が弥生時代から古墳時代へ移る社会の変革の中で重要になってくるものと考えられる。

次に、日本海側における東北とそれより西の世界での鉄器の動きの違いにも注意しなければならない。単に古墳を作る社会に参入したかどうかという鉄器配布論で片付けることは、その地域における鉄器使用の意義を見出す作業を放棄することになる。むしろ、北陸までの鉄器を多く受け入れる地域とどのような点で違うのか考察することによって、逆に鉄器を受容する時の要因が見えてこよう。鉄という木や石・骨とは異なる「魔法の材質」で作られた利器の特性もまた見えてこよう。

別な見方をすれば、鉄器使用によって生産性が上がり可耕地を切り開くような図式は、それを受け入れる社会状況によって当てはまる場合とそうでない場合があることを示しているのではあろうか。個人的な意見だが、鉄器を知ったときにその鉄器がどのような種類のものであるか、ということも大きな違いを生じる要因であろう。たとえばパプアニューギニアで石器社会から一気に鉄器を知った人々がそれを使うのに斧等ではなくて鍋等の器具を使ったことは、生産用具の効率化よりも違った意義を鉄器に見出したのである。時代をさかのぼればさかのぼるほど鉄器と出会ったときの種類は限定されるであろうし、それを受け入れるかどうかということは地域の集団にとって非常な重要事項であったはずである。

研究集会テーマは「鉄器の導入と社会の変化」という大きなものであったが、その場では深く掘り下げることができなかった。しかし、鉄器を使用する意味、ということを考えればまた違った研究視点も見出せよう。近年、鉄器研究がブームのようになっているようだが、皆が同じような視点で研究を行うのではなく、今回の研究集会で行った時代性の垣根を取り払ったところに、新たな研究が生まれる期待が大きいことを示している。

# 指江 B 遺跡出土の埴輪片をめぐって

松尾 実 久田正弘

## はじめに

石川県河北郡宇ノ気町所在の指江 B 遺跡から埴輪片が二十数点出土しており、その解釈をめぐって混乱が生じた。当報告はこれらの埴輪片を整理・検討し、その評価を行う事を目的とする。

当初、埴輪片についての解釈は当センター文化財情報第 4 号での指江 B 遺跡の紹介より、「本遺跡では 6 世紀の埴輪（南加賀産）が出土しているように、古墳後期の当地域周辺の豪族が深く関与する拠点集落と推定され、内部で祭祀が執り行われている。」とされていた。（註 1）これは古墳時代後期～古代に機能していた河道から勾玉・白玉・斎串・鳥形・船形木製品といった祭祀関連遺物と埴輪片が共に出土していることから、河道に投げ捨てた祭祀と想定したためである。

しかし、調査報告書（註 2）では祭祀説を否定し、周辺に古墳の存在を示唆しつつ、混入したものと再考している。ただ、その根拠や理由は言及されていない。当報告では、調査報告書作成における埴輪片の整理を通じてその解釈に至った説明を行い、若干の私見を述べたい。（松尾）

## 地理的環境

宇ノ気町と津幡町の境に位置する低丘陵に位置し、東側は急斜面であり、西側の緩斜面に遺跡は立地する（図 2）。この丘陵は能瀬川によって開析された小平野の右岸に位置し、北側から繋がる低丘陵の突端でもある。能瀬川左岸には丘陵上に谷内石山遺跡と谷内石山古墳群（円墳 3 基）が、丘陵裾には古墳時代後期の谷内石山古墳が存在する。遺跡の西側には河北潟が存在し、その間には古代の北陸道能登街道が通っていたはずであり、南 1.7km には深見駅である加茂遺跡が存在する。（久田）

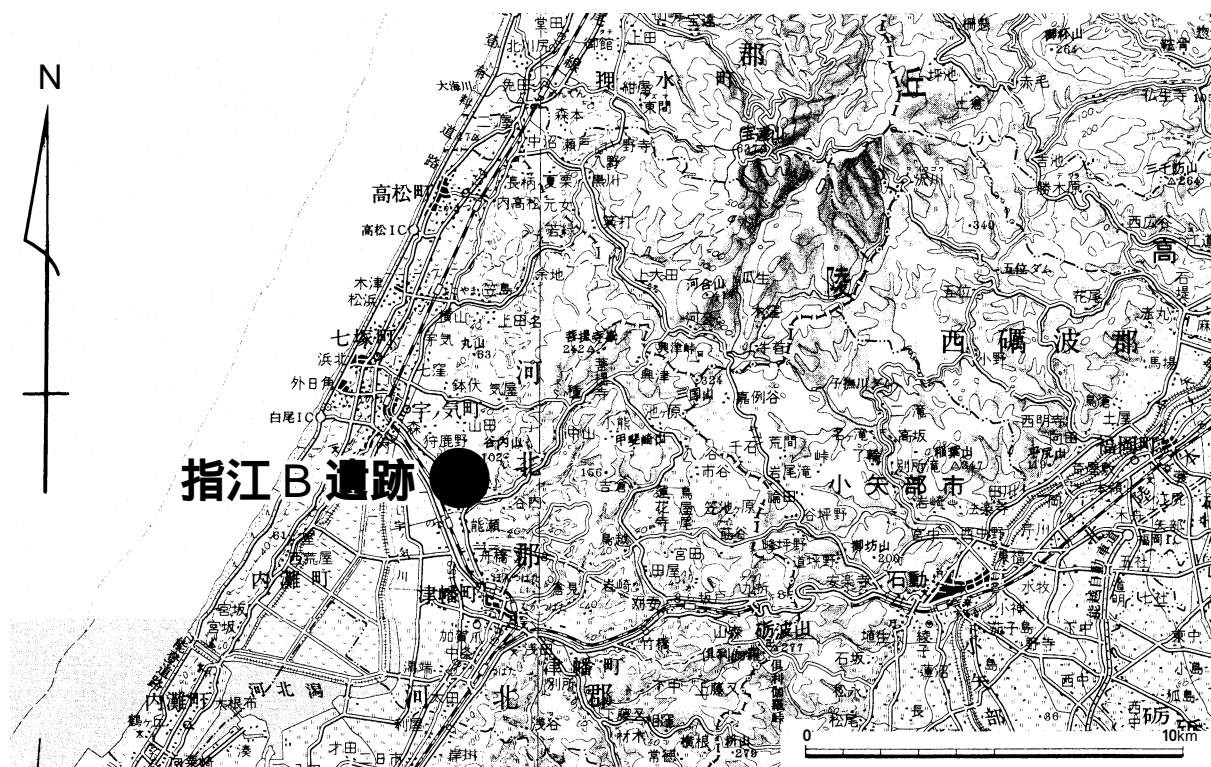


図 1 指江 B 遺跡位置図

## 遺跡の概要

指江B遺跡は、縄文後期中葉～中世までの複合遺跡であり、古墳後期TK47式併行期～古代期が中心であり、中世の遺構も多い。調査区は大きく3地区に分かれ、丘陵斜面北側のA・E・G区、春日神社を挟んで南側のF・H・I区、丘陵裾のB～D区である。北側では、古墳後期にG区に高殿と思われる5×4間の掘立柱建物があり、また韓式系土器が多く出土した。E・A区に続く河道があり、土器・木器の他に、白玉などの玉類も多量に出土した。E区では河道の北側に鞍部(SX01)があり、南側には5×4間の掘立柱建物が存在する。古代では、E区北側には掘立柱建物が多く確認され、多足机や「大宮」「大國別社」「小神」などの文字資料があり、神社の存在が想定される。南側では、古墳後期の遺構・遺物は少なく、古代・中世の遺構が殆どであり、F区を中心に須恵質埴輪片が多く出土した。H区には古代の2×3間で4面庇付き掘立柱建物が存在し、I区では「寺」の文字資料から、周辺に寺院の存在が想定される。河道からは斎串・玉類・漆器鉢などが出土した。D・B区は丘陵裾に位置し、中・近世の溝から埴輪が出土した。また南側のやや高い地点で3点を表採した。

須恵質埴輪は、全部で26点が出土し、北側ではE区1点、南側では12点、丘陵裾では13点が出土した。圧倒的に丘陵南側とその南西裾に集中するが、古墳後期の遺構・遺物は少なく、当時の河道も検出していない。E区の1点は、Eb1区の古墳後期の鞍部出土であるが、Ed1区と存在しない注記の可能性が高く、やや問題がある資料の可能性はある。(久田)

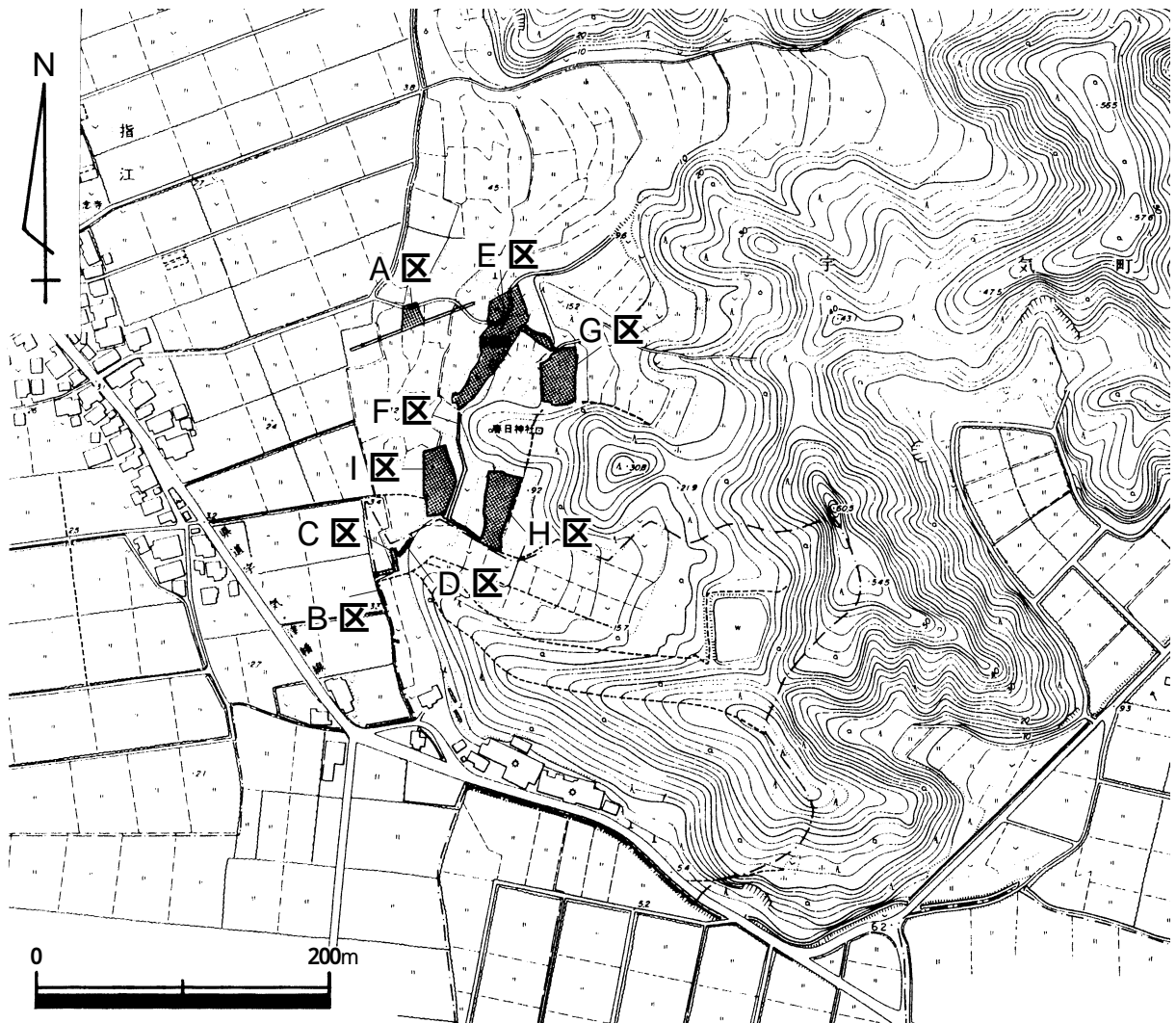


図2 指江B遺跡調査区位置図(報告書より転載)

## 埴輪片について

当報告での埴輪片は総数26点で、いずれも小片である。種類は円筒形埴輪、朝顔形埴輪がある。なお、朝顔形埴輪は胴部の製作技法が円筒形埴輪の製作技法に類似すると考えたため、一括して円筒埴輪として取り扱い、整理を行った。個々については、実測図・観察表を参照されたい。

胎土は、すべてが2mm以下の白色砂粒をまばらに含む。南加賀地域の所産(註3)と考えられ、生産地が推定できる。

調整は、内面はナデ調整が多い。横ハケを施しているものが2点を数えるが、両調整とも円筒埴輪の内面に広く見られることから、別段問題ない。ただ、特筆するものとして、同心円文の当て具痕跡をもつものがある。これは、東海地域に広く分布している倒立技法(註4)の内面に残る痕跡と同様のものとする。一方、外面は縦方向のハケ調整が多い。1cmあたりのハケ単位は4本/cm~8本/cmであるが、多くは6本/cm前後である。

色調は、大別して2種類ある。灰色とにぶい橙色である。また、焼成はすべて黒斑がなく硬質である。いわゆる須恵質埴輪と呼称されているものである。当報告では窖窯焼成のなかでも窯内の燃焼温度の高低さでもって還元炎焼成・酸化炎焼成と分けて呼称しても大過ないと考えた。実測図では、断面黒ぬりを前者、白ぬきを後者として表している。

その他の特徴として、突帯と透かし孔がある。双方とも資料数は少ないが、突帯はほとんど断面が低い台形を呈している点や端面が凹状である点が共通している。透かし孔は円形と想定できるものが多い。また、透かし孔の穿孔方向が反時計回りのものと時計回りのものがある。(松尾)

## 埴輪片の時期

すべてが窖窯焼成の埴輪片である。外面の調整はほとんど縦方向のハケである事、突帯は断面が低い台形である事から、指江B遺跡出土の埴輪片の時期は、川西編年(註5)のV期と推定でき、古墳時代後期の所産と考える。(松尾)

## 小結

埴輪片を整理した結果、古墳時代後期に南加賀地域にある生産地によって製作・焼成され、当該地域周辺にあった古墳の造営に伴って生産された円筒埴輪の一部であったと判断できる。

当該地域周辺は地理的環境や層位的解釈を考慮すると、開拓が古代以降に連続と継続して行われたと想定でき、円筒埴輪を樹立していた古墳が後の時代の開拓によって破壊され、埴輪が小片となって古代の河道・土坑・落ち込みなどに混じり込んだと考える。埴輪片が総数26点という少量については古代以降の度重なる開拓や自然環境の変化等で、拡散されたためと理解した。古代以降の層位から出土していることがその傍証といえよう。

一方、当初の解釈を考えると、古墳時代後期頃に埴輪を直接的、間接的に破砕してその小片を河に捨てる祭祀行為があったならば、河道からの出土数が少ないという問題が生じる。調査報告によると、古墳時代後期における当該遺跡を「当地域周辺の豪族が深く関与する拠点集落(註6)」と評価している。埴輪片を用いた祭祀が執り行われていたと想定されるならば、より多く出土していてもおかしくない。また、埴輪本来の役割(註7)を考えると祭祀行為を行ったという解釈に齟齬が生じる。

さらに、問題点がある。第一に、埴輪の破片という事と数量の些少さという資料の限界性である。第二に、表面採集・混入といった出土地による資料価値の低さである。これらについては、埴輪が出土する場所を考えることによって説明ができると考えた。古墳・窯跡・集積場などが想起できるが、

遺跡周辺の立地や出土地の状況等で、もっとも妥当性のある古墳の存在を考えるに至った。

したがって、指江B遺跡出土の埴輪片は直接的・間接的にしろ、祭祀行為に伴う遺物であった蓋然性がきわめて低いと判断せざるを得ない。むしろ、当地域周辺に埴輪を伴った古墳の存在があったと推定の方が妥当と考える。

特筆するものとしては、内面に同心円文の当て具痕跡がある埴輪片である。当地域においても倒立技法で行った埴輪の存在があったことが指摘できる。これにより、古墳時代後期における埴輪製作工人の動向や政治状況の一端を知ることができると思う。

指江B遺跡出土の埴輪片は、資料的な制約と古墳という具体的な形がないものの、古墳時代後期におけるその価値は高い。また要衝の地であったことが窺え、周辺地域を支配していた首長の存在が想起できる。本例は当地域における政治的・社会的動向を知る上で貴重な資料と強調したい。

以上、指江B遺跡出土の埴輪を整理・検討し、報告を行った。次に、そこから派生して、石川県下での埴輪が出土している遺跡を集成し、それについての私見と今後の課題を述べたい。（松尾）

## 石川県下での埴輪出土地について

前述のとおり、指江B遺跡出土の埴輪片から当地域周辺に埴輪を伴った古墳の存在があったと仮定して、埴輪が出土した遺跡からどのようなことが把握できるのか述べてみたい。（註8）

管見ゆえに不備な点に至るところにあるが、埴輪が出土した遺跡を集成した。石川県下における埴輪が出土した遺跡は47箇所を数える。（註9）

古墳時代を通してみると、以下の傾向が捉えられる。前期後半頃に埴輪を伴う古墳が少数存在し始める。そして、中期後半になると急激に増加し、後期前半につづく。後期後半には古墳がまったく見られない。前期では有力首長のなかで畿内からの埴輪祭祀を導入した時期と考えられる。中期末から後期前半にかけては、埴輪祭祀が展開していく。南加賀地域において埴輪が生産され、その生産を管理・掌握していた首長の下、小地域の各首長に敷衍したと考える。これには生産地である南加賀古窯跡群（石川県南部に所在する小松丘陵窯跡群）にある二ツ梨殿様池窯跡群の存在が重要となる。後期前半の矢田野エジリ古墳より出土した埴輪が南加賀古窯跡群にある二ツ梨殿様窯跡群のものだと判断された報告（註10）がある。また当地域に存在した古墳の埴輪もそこから供給された可能性が高いことから、当報告における埴輪も二ツ梨殿様池窯跡群から生産された可能性があり、広範囲な需要・供給関係があったと想定できる。（註11）なお、集成した埴輪片の中にも須恵質埴輪がいくつかある。今後、再検討を行うことにより、それらの関係が浮き彫りになるであろう。さらに、埴輪祭祀を受け入れた地域の各首長の増加と生産地との関係を探ることにより、当地域における政治的・社会的構造の一端が導出できる可能性がある。後期の後半になると、埴輪生産が停止してしまう。それまで行われた埴輪祭祀が途絶える。埴輪生産も停止せざるをえなくなる。各地域に造営される群集墳の出現といった従来の社会構造の再編成が生じたと考える。

一方、平面的にみると、遺跡のほとんどが比較的開けた立地の良い場所に分布しているのが見て取れる。（図3）前述した展開期には、このような状況であったと把握できる。このことより、小地域での拠点的な箇所に埴輪祭祀が広まったことが指摘でき、首長間のネットワークが急速に構築されていったと想起する。（松尾）

## 結語

石川県下での埴輪出土地の私見を述べた。以下にまとめる。



図3 埴輪出土地分布図

- 1、埴輪を生産した窯の出現を定点として、古墳時代中期末から後期にかけて一つの画期があり、南加賀地域において埴輪生産が開始したことは、一元的に埴輪生産を管理・掌握していた首長と、広範囲による各小地域の首長との間に需要・供給関係があった可能性を指摘した。
- 2、埴輪が出土している地点は各地域の主要な箇所であり、そこから各首長間のネットワークが急速に構築された可能性のあることを指摘した。

課題としては、埴輪を伴わない古墳との相対関係、在地の南加賀型木芯粘土室（註12）を主体部にもつ古墳との関係、さらに倒立技法の持つ埴輪より専門工人の動向などといった各側面からのアプローチと比較検討の必要性である。将来、古墳時代の社会・政治的動向を具体的に知る上で不可欠となろう。なお、より基礎資料の厳密性を追求することは当然行っていく。今後の再検討によって、石川県下における古墳時代の社会的・政治的動態にアプローチできると考える。（松尾）

### おわりに

私の不勉強さゆえに本報告の内容に不備な点が多く生じたことは否めない結果となった。今後、先学の方々からのご叱正・ご指導・御教授を頂き、真摯な態度で改善、発展していきたいと考えています。

最後に本報告を行うにあたり、久田正弘氏には本報告の機会を与えて頂いた。また、以下の方々にもご指導・ご教示頂いた。記して感謝の意を表します。（松尾）

岩瀬由美氏 大西 顕氏 柿田祐司氏 川畑 誠氏 藤藪勝則氏

< 註 >

- (註1) 石川県埋蔵文化財情報第4号「指江遺跡・指江B遺跡」2000 石川県埋蔵文化財センター
- (註2) 「指江遺跡・指江B遺跡」2002 石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- (註3) 当センター久田正弘氏・柿田祐司氏・岩瀬由美氏より実見して頂き、またご教示頂いた。
- (註4) 倒立技法とは、「粘土紐を積み上げて、ある段階で、倒立させて上下を逆転し、倒立前に底部であったところに更に粘土を積み上げる」と認識しておきたい。特徴では、倒立接合部内面に同心円文の当て具痕がみられる。以下の文献に詳細にまとめられている。  
池下古墳 1991 (財)愛知県埋蔵文化財センター  
矢田野エジリ古墳 1992 石川県小松市教育委員会
- (註5) 川西宏幸 1978 「円筒埴輪総論」『考古学雑誌』六四 - 二 日本考古学会
- (註6) 前項(註1)p11
- (註7) 春成秀爾氏がこの事について簡単かつ明瞭に言及されている。「埴輪の基本的な性格を葬儀終了後にむしろ個人との関係で古墳上に樹立するものとみるならば、こうした古墳以外の出土品にかぎって、葬送とは無関係で、しかも祭式過程で直接的に用いられたとは考えにくい」と述べられている。本報告でも出土状況等から春成氏の意見に準拠する。  
春成秀爾 1979 「埴輪」 考古資料の見方<遺物編> 甘粕健編 柏書房 p234~p235
- (註8) 石川県遺跡地図を見ると、指江B遺跡付近の丘陵上に指江古墳が見られるが、それと結び付けるのは、根拠の希薄さゆえにあまりにも短絡であるので避けておきたい。
- (註9) 遺跡といっても、その実、古墳・窯となるが、遺跡内の遺構などに伴うものも若干あり、当報告では集積の対象とした。
- (註10) 三辻利一 1992 「矢田野エジリ古墳出土埴輪・須恵器の蛍光X線分析」  
矢田野エジリ古墳 石川県小松市教育委員会 p153~p157
- (註11) 埴輪の内面に同心円文当て具痕跡があるものに、生産地である二ツ梨殿様池窯跡、供給先として、矢田野エジリ古墳、本例があることは同一の倒立技法を有する埴輪製作工人の存在の可能性が想起できる。
- (註12) 望月精司 1988 「第 章 考察 - 所謂箱形粘土槨について - 」  
後山無常堂古墳・後山明神3号墳 小松市教育委員会 p73~p93

< 参考文献 >

- 野上文助 1976 「埴輪生産をめぐる諸問題」 考古学雑誌61 - 3 日本考古学会
- 赤塚次郎 1979 「円筒埴輪製作覚書」 古代学研究90 古代学研究会
- 古川 登 1983 「越前及び加賀における6世紀代の埴輪について」  
石川考古学研究会会誌第26号 石川考古学研究会
- 季刊考古学 第20号 - 埴輪をめぐる古墳社会 - 1987 雄山閣出版
- 望月精司 1990 「第 章 考察 - 南加賀古窯群成立期の様相 - 」  
二ツ梨東山子用古窯跡・矢田野向山古窯跡 小松市教育委員会
- 中司照世 1992 「北陸」 古墳時代の研究 第9巻 雄山閣出版
- 近藤義郎編 1992 前方後円墳集成 中部編 山川出版社
- 高橋克壽 1994 「埴輪生産の展開」 考古学研究41 - 2 考古学研究会
- 春季特別展図録「はにわ」 1994 石川県立歴史博物館

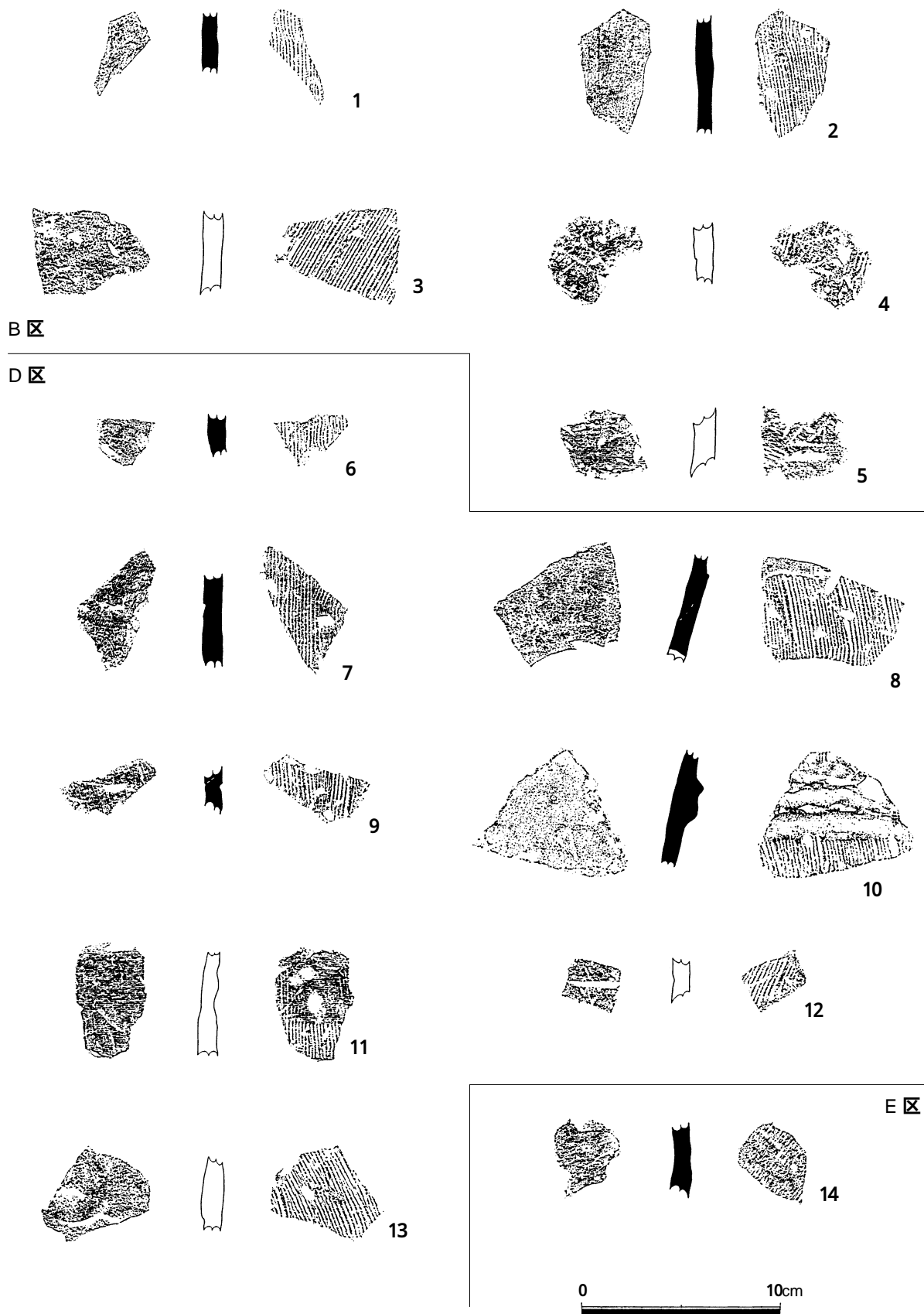


图4 指江B遺跡出土埴輪片(1)

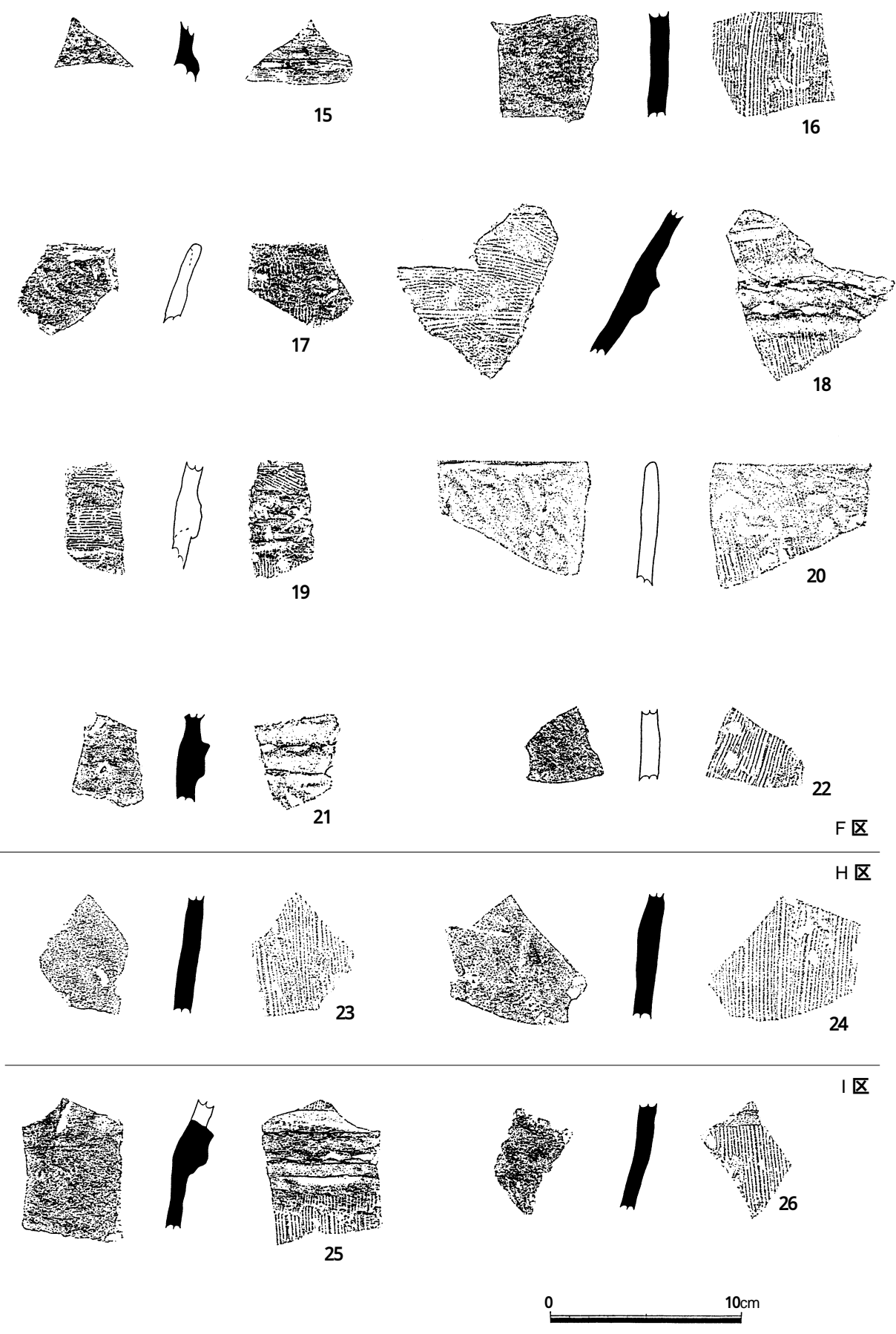


图5 指江B 遗址出土埴輪片(2)

報告番号	整理番号	報告書掲載番号	地区	層位	遺構	胎土	調整（内面・外面）	色調（内面・外面・断面）	焼成	突帯の有無（形状・突帯高）	その他特徴
1	八 - 7	459	B区		SX01上層	2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（7本/cm）	（内）灰（N5/0） （外）灰（N5/0） （断）黄褐（2.5Y5/3）	良好 還元炎	なし	
2	八 - 8	458	B区		SX01下層	2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（6.5本/cm）	（内）灰（5Y4/1） （外）灰（5Y4/1） （断）灰黄褐（10YR5/2）	良好 還元炎	なし	
3	八 - 17	460	B区	表探		2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（5.5本/cm）	（内）にぶい橙（10YR6/4） （外）にぶい橙（7.5YR7/4） （断）橙（7.5YR6/6）	良好 酸化炎	なし	内面に粘土つなぎ目あり
4	八 - 19	463	B 地点	表探		2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（5本/cm）	（内）にぶい橙（7.5YR7/4） （外）にぶい橙（10YR6/4） （断）暗灰黄（2.5Y5/2）	良 酸化炎	なし	表面の磨耗が著しい 面に粘土つなぎ目あり
5	八 - 18	462	B 地点	表探		2mm以下の白色・黒色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（5本/cm）	（内）灰黄（2.5Y7/2） （外）赤灰（10R6/1） （断）灰黄（2.5Y7/2）	良 酸化炎	なし	表面の磨耗が著しい。
6	八 - 4	448	D区	包含層		2mm以下の白色・透明色砂粒を含む	（内）ナデ （外）縦ハケ（6.5本/cm）	（内）暗灰黄（2.5Y5/2） （外）灰黄褐（10YR4/2） （断）灰黄褐（10YR5/2）	良好 還元炎	なし	透かし孔の一部が残存 透かし孔を時計回しに穿つ
7	八 - 5	445	D区	包含層		1mm以下の白色・黒色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（6本/cm）	（内）灰（7.5Y5/1） （外）灰（5Y5/1） （断）灰白（N7/0）	良好 還元炎	なし	内面に粘土のつなぎ目あり
8	八 - 16	449	D区	表探		2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ（一部当て具痕跡あり） （外）縦ハケ（5.5本/cm）	（内）灰黄（7.5YR5/2） （外）オリープ灰（2.5GY5/1） （断）灰白（N7/0）	良好 還元炎	あり （突帯は剥離）	透かし孔の一部が残存 透かし孔を反時計回しで穿つ 内面に粘土つなぎ目あり
9	八 - 20	464	D 地点	表探		2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（5.5本/cm）	（内）暗灰黄（2.5Y5/2） （外）灰（7.5Y5/1） （断）灰（N6/0）	良好 還元炎	なし	内面に粘土つなぎ目あり
10	八 - 27	443	D区	包含層		3mm以下の白色・黒色砂粒含む	（内）ナデ （外）縦ハケ（5.5本/cm）横ナデ	（内）暗灰黄（2.5Y5/2） （外）暗灰黄（2.5Y5/2） （断）暗灰黄（2.5Y5/2）	良好 還元炎	あり 断面形状は低い（0.6cm）胎形 端面は凹状になる	
11	八 - 1	444	D区	包含層		2mm以下の白色砂粒含む	（内）横ナデ （外）縦ハケ（5.5本/cm） 一部ハケのちに横ナデあり	（内）浅黄橙（10YR8/4） （外）浅黄橙（7.5YR8/4） （断）灰（10Y6/1）	良好 酸化炎	なし	外面に一部指頭圧痕あり
12	八 - 6	447	D区	包含層		2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（6本/cm）	（内）にぶい橙（7.5YR7/4） （外）褐灰（7.5YR6/1） （断）緑灰（10GY5/1）	良好 酸化炎	なし	内面に粘土のつなぎ目あり
13	八 - 2	446	D区	包含層		3mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（6本/cm）	（内）にぶい褐（7.5YR6/3） （外）にぶい橙（7.5YR6/4） （断）灰（N6/0）	良好 酸化炎	なし	内面に粘土のつなぎ目あり

指江 B 遺跡出土埴輪片観察表（1）

報告番号	整理番号	報告書掲載番号	地区	層位	遺構	胎土	調整（内面・外面）	色調（内面・外面・断面）	焼成	突帯の有無（形状・突帯高）	その他特徴
14	八 - 12	461	E 区		SX01下層	2mm以下の白色・黒色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（5.5本/cm）	（内）灰（5Y5/1） （外）灰（5Y5/1） （断）灰白（7.5Y7/1）	良好 還元炎	なし	透かし孔の一部が残存
15	八 - 9	454	F 区		落ち込み	2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）縦ハケ（？本/cm） 横ナデ	（内）灰（5Y5/1） （外）灰（5Y5/1） （断）灰白（7.5Y7/1）	良好 還元炎	あり 断面形状は低い（0.5cm） 台形	
16	八 - 10	455	F 区		落ち込み下層	2mm以下の白色・茶色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（4本/cm）	（内）にぶい襷（7.5YR6/3） （外）灰（5Y5/1） （断）灰（5Y6/1）	良好 還元炎	なし	内面に褐灰（10YR 5 / 1） のしみあり
17	八 - 14	450	F 区	黒褐色層		3mm以下の白色砂粒含む	（内）横ナデ （外）縦ハケ（？本/cm）の ち横ナデ	（内）にぶい襷（7.5YR7/4） （外）襷灰（7.5YR7/4） （断）明緑灰（10GY7/1）	良好 酸化炎	なし	円筒埴輪の口縁部片 口縁端部は面取り 内面に粘土のつなぎ目あり
18	八 - 26	452	F 区	暗褐色層		2mm以下の白色砂粒含む	（内）横ハケ（6.5本/cm） （外）縦ハケ（6.5本/cm） 横ナデ	（内）灰（N5/0） （外）灰（N5/0） （断）灰白（7.5Y7/1）	良好 還元炎	あり 断面形状は低い（0.6cm） 台形 端面は凹状・指頭圧痕あり	朝顔形埴輪片 内面に粘土のつなぎ目・一部 指頭圧痕あり
19	八 - 13	457	F 区	暗褐色層		2mm以下の白色砂粒含む	（内）横ハケ（6.5本/cm） ナデ （外）ハケ（8本/cm） 横ナデ	（内）灰黄（2.5Y6/2） （外）にぶい襷（5YR7/4） （断）灰（N6/0）	良好 酸化炎	あり 断面形状は低い（0.4cm） 台形	
20	八 - 25	451	F 区	灰色砂層		3mm以下の白色・赤褐色砂粒含む	（内）ナデ （外）縦ハケ（6本/cm）のち 横ナデ	（内）にぶい襷（5YR7/4） （外）にぶい襷（7.5YR7/4） （断）にぶい襷（5YR7/4）	良好 酸化炎	なし	円筒埴輪の口縁部片 口縁部は内面凹状である 外面に粘土のつなぎ目あり
21	八 - 28	453	F 区	灰色粘土層		3mm以下の白色砂粒含む	（内）横ナデ （外）縦ハケ（？本/cm） 横ナデ	（内）灰襷（5YR5/2） （外）灰黄襷（10YR5/2） （断）灰黄襷（10YR5/2）	良好 還元炎	あり 断面形状は低い（0.6cm） 台形 端面は凹状になる	透かし孔の一部が残存
22	八 - 15	456	F 区	灰色粘土層		2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（5.5本/cm）	（内）にぶい襷（7.5YR6/4） （外）にぶい襷（5YR6/4） （断）灰白（N7/0）	良好 酸化炎	なし	
23	八 - 21	278	H 区		SK48	2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（6本/cm）	（内）にぶい赤襷（5YR5/3） （外）灰襷（5YR4/2） （断）灰黄襷（10YR5/2）	良好 還元炎	なし	
24	八 - 22	279	H 区		河道	2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ一部当て具痕跡あり） （外）ハケ（5.5本/cm）	（内）襷灰（10YR5/1） （外）灰（5Y5/1） （断）灰（5Y5/1）	良好 還元炎	なし	透かし孔の一部が残存 透かし孔を反時計回りで穿つ
25	八 - 23	295	I 区	側溝掘り		2mm以下の白色・黒色・赤褐色砂粒含む	（内）ナデ （外）縦ハケ（6本/cm） 横ナデ	（内）灰（5Y5/1） （外）灰（5Y5/1） （断）襷灰（10YR6/1）	良好 還元炎	あり 断面形状は低い（0.5cm） 台形 端面は凹状になる	
26	八 - 24	294	I 区	側溝掘り		2mm以下の白色砂粒含む	（内）ナデ （外）ハケ（6本/cm） 一部ナデ	（内）灰襷（5YR5/2） （外）灰（10Y5/1） （断）青灰（10BG6/1）	良好 還元炎	なし	

指江 B 遺跡出土埴輪片観察表（2）

埴輪出土遺跡一覧

番号	古墳名	所属古墳群	所在地	墳形	円筒埴輪の有無	その他の種類	時期	参考文献
1	敷地A群1号墳	敷地A古墳群	加賀市敷地	円墳?			中期後半～後期前半	1
2	敷地A群2号墳	敷地A古墳群	加賀市敷地	円墳?(約20m)			後期前半	1
3	敷地A群3号墳	敷地A古墳群	加賀市敷地	円墳?			後期前半	1
4	敷地A群4号墳	敷地A古墳群	加賀市敷地	円墳?			後期前半	1
5	吸坂丸山2号墳	吸坂古墳群	加賀市吸坂町	方墳(約15m)	x	鶏形土製品	前期	2
6	吸坂丸山5号墳	吸坂古墳群	加賀市吸坂町	円墳(約16m)		人物埴輪	中期後半	2
7	富塚丸山古墳		加賀市富塚町	円墳?(帆立貝式前方後円墳か?)			中期～後期	1
8	狐山古墳		加賀市二子塚町	前方後円墳(約56m)	須恵質埴輪	形象埴輪(盾?)	中期後半	3
9	二子塚2号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町	円墳(約18m)			中期後半～後期前半	4
10	二子塚3号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町	不明			中期後半～後期前半	4
11	二子塚4号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町	不明			中期後半～後期前半	4
12	二子塚5号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町	不明			中期後半～後期前半	4
13	二子塚6号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町	不明			中期後半～後期前半	4
14	二子塚7号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町	前方後円墳(約30m)	須恵質埴輪(顔料塗布)	朝顔形・形象埴輪	中期後半	4
15	御幸塚古墳		小松市今江町	前方後円墳(約30m)	須恵質埴輪		後期前半	5
16	土百古墳		小松市今江町	円墳(約10m)	須恵質埴輪		中期～後期	1
17	借屋4号墳	矢田借屋古墳群	小松市月津町	円墳(約13m)	須恵質埴輪	形象埴輪?	後期前半	6
18	借屋7号墳	矢田借屋古墳群	小松市月津町	前方後円墳(25m以上)			中期後半	6
19	借屋9号墳	矢田借屋古墳群	小松市月津町	円墳(約13m)	須恵質埴輪・土師質埴輪		後期前半	7
20	借屋12号墳	矢田借屋古墳群	小松市月津町	不明	須恵質埴輪		後期前半	7
21	矢田野エジリ古墳		小松市矢田野町	前方後円墳(約30m)	須恵質埴輪	朝顔形・人物形・馬形埴輪	後期前半	8
22	長坂二子塚古墳		金沢市長坂町	前方後円墳(68m以上)		朝顔形?・壺形埴輪	前期後半	9
23	指江B遺跡		河北郡宇ノ気町	河川・土坑・表採など	須恵質埴輪	朝顔形埴輪	後期前半	10
24	柴垣観音山古墳		羽咋郡柴垣町	円墳(約50m)	(野焼き)	朝顔形・器財埴輪の可能性あり	中期	12
25	滝大塚古墳	滝古墳群	羽咋郡滝町・一ノ宮町	円墳(帆立貝式前方後円墳か?)(約90m)			中期～後期	12
26	滝1号墳	滝古墳群	羽咋郡一ノ宮町	円墳(約8m)			中期～後期	12
27	滝2号墳	滝古墳群	羽咋郡一ノ宮町	円墳(約18m)			後期前半 f	12
28	滝5号墳	滝古墳群	羽咋郡一ノ宮町	円墳(約50m)			中期～後期	12
29	水白鍋山古墳		鹿島郡鹿島町	円墳(約50m)			前期後半	11
30	矢田丸山古墳	矢田古墳群中瀬支群	七尾市矢田町	円墳(40m以上)	(野焼きか?)		中期前半	13

埴輪出土の窯跡一覧

番号	窯跡名	所属窯跡群	所在地	特徴	円筒埴輪の有無	備考	時期	参考文献
31	二ツ梨殿様池1号窯	小松丘陵窯跡群	小松市二ツ梨	埴窯兼用窯		内面に同心円文のタタキあり	中期末～後期前半	14
32	二ツ梨殿様池2号窯	小松丘陵窯跡群	小松市二ツ梨	埴窯兼用窯		内面に同心円文のタタキあり	中期末～後期前半	14
33	二ツ梨殿様池3号窯	小松丘陵窯跡群	小松市二ツ梨	埴窯兼用窯（存在の可能性）		内面に同心円文のタタキあり	中期末～後期前半	14

二次的ではあるが、埴輪が出土した遺跡一覧表である。今回文献をあたることが適わなかったが、列記した。なお、後に文献をあつれたものは追記した。

番号	古墳名	所属古墳群	所在地	墳形	円筒埴輪の有無	その他の種類	時期	参考文献
34	新黒瀬遺跡		加賀市黒瀬町					
35	下福田古墳群	下福田古墳群	加賀市下福田町					
36	二子塚1号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町					
37	二子塚10号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町		(円筒期)	朝顔形埴輪	後期	
38	二子塚東田1号墳	二子塚古墳群	加賀市二子塚町					
39	借屋8号墳	矢田借屋古墳群	小松市月津町		(円筒期)		後期	
40	借屋遺跡		小松市月津町				中期～後期	
41	滝6号墳	滝古墳群	羽咋郡一ノ宮町					
42	二所宮宮山1号墳		羽咋郡志賀町					
43	二所宮宮山3号墳		羽咋郡志賀町					
44	冬野大塚古墳		羽咋郡押水町					
45	森本大塚古墳		羽咋郡押水町	円墳(約40m)		朝顔形・壺形埴輪	中期後半	15
46	大海川河口		羽咋郡押水町			人物埴輪	後期	
47	小竹ガラボ山古墳		鹿島郡鹿島町	前方後円墳(約50m)		家形埴輪	中期前半	

参考文献

- 1) 江沼古墳群分布調査報告 1978 石川考古学研究会
- 2) 吸坂丸山古墳群 1990 加賀市教育委員会
- 3) 史跡 孤山古墳周溝調査概要報告書 1974 石川県加賀市教育委員会
- 4) 加賀市二子塚遺跡群調査概要 1974 石川県教育委員会
- 5) 小松市文化財紀要 1969 小松市教育委員会
- 6) 小松市史4 1965 小松市教育委員会
- 7) 矢田借屋古墳群 1999 小松市教育委員会
- 8) 矢田野エヅリ古墳 1992 石川県小松市教育委員会
- 9) 河村義一 1969 「金沢市長坂二子塚古墳について」 石川考古学研究会会誌第12号 石川考古学研究会
- 10) 指江遺跡・指江B遺跡 2002 石川県教育委員会・石川県埋蔵文化財センター
- 11) 石川県鹿島町史 資料編 1966 石川県鹿島町役場
- 12) 羽咋市史 原始・古代編 1973 羽咋市役所
- 13) 新修七尾市史1 考古編 2002 七尾市役所
- 14) 小松高校地歴部・近間 強 1985 「小松丘陵窯跡群分布調査報告」 石川考古学研究会会誌第31号 石川考古学研究会
- 15) 橋本澄夫 1966 「石川県押水町森本大塚古墳の予備的調査」 石川考古学研究会会誌第10号 石川考古学研究会

# 実験 古代の塩づくり

安 英樹

## はじめに

当センターが平成13年10月27日(土)に実施した「古代体験ひろば 収穫まつり」(以下、収穫まつり)の中には、「実験 古代の塩づくり」というコーナーがあった。このコーナーは、収穫まつりで扱われたような諸々の食材を加工し調味・保存する上で深く関係するであろう古代の塩について、一般の参加者に理解を深めてもらうことを目的として企画したものである。当センターでは過去にも種々の公開実験を行ったことがある<sup>1)</sup>が、古代の塩づくりについては初めての試みであり、準備から手探りの状態であった<sup>2)</sup>が、何とか目的を果たして無事終了することができた。

小文ではその内容をまとめることで、少しでも古代の生活復元に役立てたい。また、今後、同種の実験が容易に行えるように、経過と要点を記録するものでもある。なお、小文は、実験を企画した当センター企画課ほか関係者の了解を得て筆者がまとめ、文責を負うものとする(以下、敬称略)。

## 1 実験の準備

実験の方法は、遺跡からの出土品をモデルに復元製作した古代の製塩土器を使用して、海水を濃縮した鹹水<sup>かんすい</sup>を煮詰めることによって、塩を得るものである。当日までの準備作業については、製塩土器の製作、鹹水の確保、予備実験の三項目に分けて整理できる。以下は、項目別の概要を記す。

### 製塩土器の製作

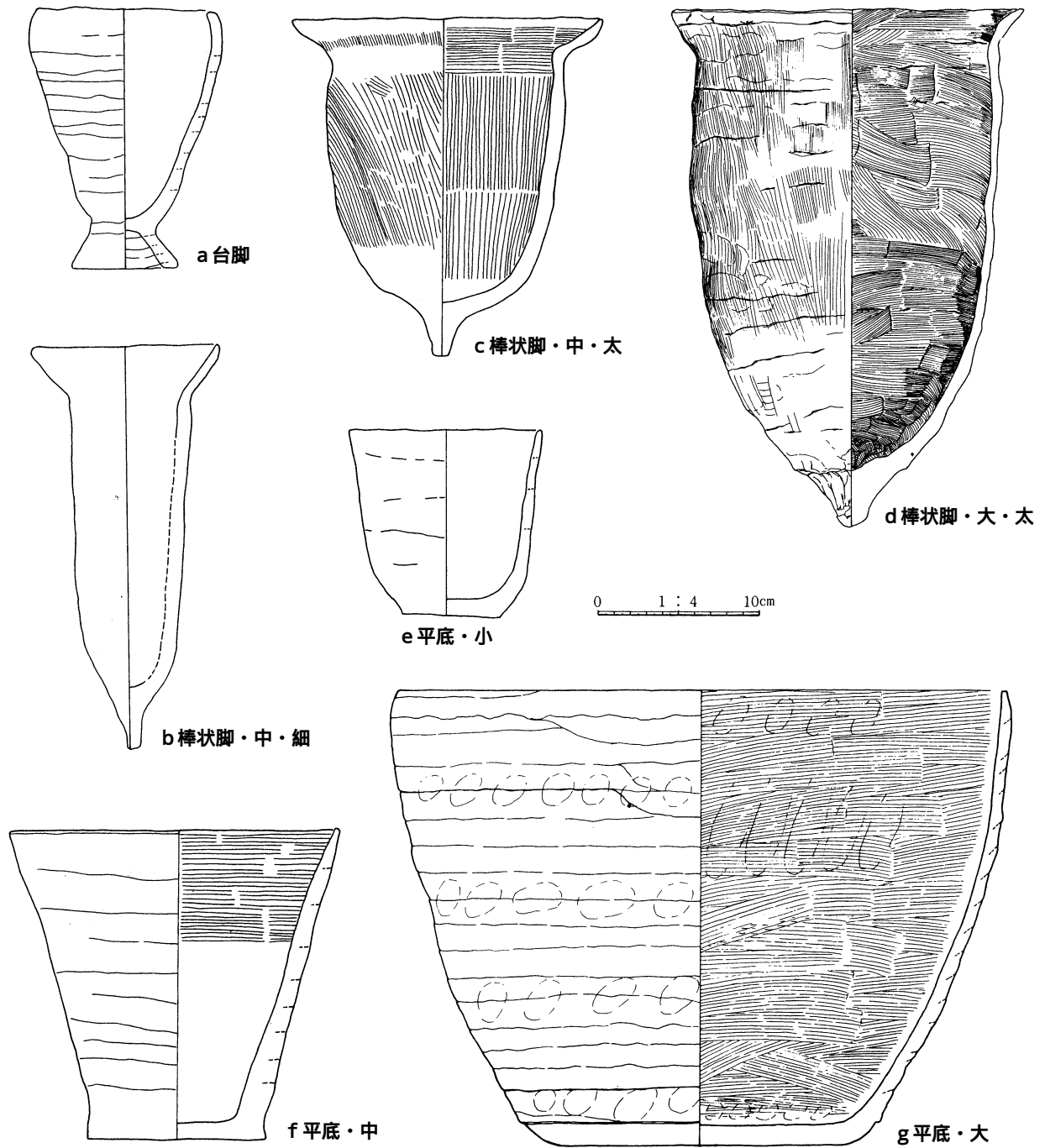
実験に使う製塩土器の製作は、川畑誠と柿田祐司が中心となって9月の末ごろから着手した。胎土は砂礫30%を混和した瀬戸の陶土を用い、技法は回転台を使用して紐積みで成形した。基本的な調整はナデで、大型のものはハケを施している。乾燥には1~2週間を費やした。焼成は本来なら野焼きを試みるところであるが、期間が限られており、失敗をさけるため電気窯で行った。作成したのは台脚の付いたタイプ1点、棒状脚の付いたタイプ15点、平底タイプ7点の合計23点である。詳しく言うと台脚タイプは小型1点、棒状脚タイプは小型で細身が4点、中型で細身が6点、中型で太身が1点、大型で細身が2点、大型で太身(中島町ヤトン谷内遺跡モデル)が2点で、平底タイプは小型が2点、中型が3点、大型(羽咋市寺家遺跡モデル)2点であった(第1図)。ちなみに土器編年上では、台脚、棒状脚、平底の順に推移し、鉄釜に切り替わるものとされる。

### 鹹水の確保

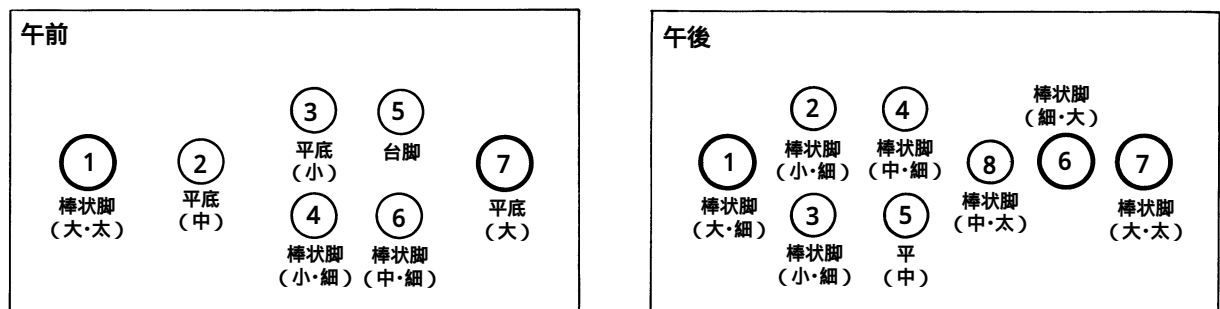
鹹水は海水を採取して煮沸し、濃縮することで確保した。鹹水の生成は、製塩土器の製作と並行して行われ、主に中島俊一、中山由美が担当した。具体的には海水を大鍋に入れてガスコンロで煮詰めることによって、300ℓを超える量の海水から約60ℓの鹹水が得られた。単純計算であるが塩分濃度3.8%の海水を約5倍に濃縮していることから、鹹水の塩分濃度は15~20%程度と予測される。大鍋1杯(有効容量約10ℓ)の海水を濃縮するにはほぼ日中が費やされており、きわめて多くの時間と熱量、燃料が必要であった。また、これ以上煮詰めると水中に塩の結晶があらわれることがあり、このあたりが濃縮の限界に近いということも明らかになっている。

### 予備実験

以上のように準備した製塩土器と鹹水の一部を使って、実験前々日の10月25日(木)の午後1時から5時まで、中島、中山、安で予備実験を行った。山砂を盛って炉床とし、製塩土器(棒状脚タイプの小型細身1点、平底タイプの中型1点)を置き、薪を並べて実際に点火してみたものである。



第1図 製塩土器実測図 (a~c・e・fは当センター製作品、dはヤトン谷内遺跡出土品、gは寺家遺跡出土品)



第2図 製塩土器の配置

その結果、塩づくりには成功したものの、点火から沸騰までは約40分と時間がかかる、棒状脚タイプと平底タイプでは平底タイプの沸騰が遅い、棒状脚タイプが激しく沸騰するのに対して平底タイプは穏やか、水分をほとんど蒸発させてしまえば一定量の塩が得られるが、かなり時間がかかる、など熱効率に関わる問題が明らかになった。については炉床の山砂が湿っていたことが関係すると思われ、実験当日までに乾燥させておくこと、については土器の形状で火の当たり方が異なるようであり、平底タイプには支脚を使用して底上げすること、といった対策が講じられ、については当日もっと観察してみようということで、実験本番にのぞむことになった。

## 2 実験の経過

### 実験条件

収穫まつり当日の10月27日(土)は明け方冷え込んだがよく晴れ、暖かい一日となった。当日の気象は、金沢市の記録では「天候快晴、湿度50%、風速4 m/s、気圧1024hpa、最高気温20.9、最低気温9.8」となっている。実験の時間は、収穫まつりの行程上、午前と午後の2回とし、1回目を午前10時から12時まで、2回目を午後1時から3時までに設定した。

実験コーナーの状況は、約3m×1mの長方形の範囲に乾いた山砂を盛って炉を設営した(写真5)。山砂の厚さは製塩土器の棒状脚を沈めて安定する程度とした。燃料にはナラなど広葉樹雑木の薪を使用し、予備実験で必要とされた支脚には耐火レンガを使用した。その他、製塩土器と鹹水以外で準備した物品は、火ばさみ、軍手、バケツ、計量カップ、デジタルカメラ、柄杓、タオル、救急箱、筆記用具、記録用紙などである。

当日の実験は中島、中山、安が担当した。以下は、1回目と2回目の状況を記す。

### 1回目(午前)

製塩土器は7点を第2図～のように配置した。については支脚を使用した(写真7)。着火はまずとの周辺(10:07)に行われ、順次とに挟まれた～の範囲へ広がっていった(10:30)。沸騰はまず(10:42)、次いで(10:45)で、さらに(10:48)、(10:49)、(10:52)と進む。については沸騰を書き漏らしてしまった。予備実験の時と比べると製塩土器のタイプによる熱の伝わり方に大きな差はでないようであり、支脚の効果がわかる。しかし、全般に棒状脚タイプは対流が起きやすく沸騰が強いが、平底タイプは穏やかでなかなか強くなかった。一方、大きさについても中小型は沸騰が早い、大型もそれほど時間差が開かない。については水漏



写真1 予備実験遠景



写真2 予備実験近景



写真3 予備実験の塩生成状況(棒状脚タイプ)

れがひどく、加水を繰り返しても全くたまることがなかった。

沸騰が強くなると土器内面の噴水線に白色の固形物がリング状に付着し広がり始めた。塩の生成である。以降、鹹水を加えていったが、水分を蒸発させるのは思った以上に時間がかかり、次々と何回も加水できたのは中小型のみで、大型のものは1回加水したのみであった。終了の時間が迫り、薪を除けて(11:50)、火を消した(12:00)が、この時点では・・はほとんど水分が残らず、・は少し残った。しかし・も炉と土器自体の余熱によってほとんど干上がっている(12:30)。煮詰めて生成したものは、土器の側面に生じた固形塩と底面に生じた結晶塩であり、棒状脚タイプでは前者がより顕著であった。1回目の実験で消費した鹹水は9.9ℓ、燃料は薪8束であった。

#### 2回目(午後)

製塩土器は8点を第2図～のように配置した。については不注意で経過を記録できなかった。着火はまずの周辺(13:17)で、次いで～まで広がった(13:37)。この時点でには細かい泡が対流し沸騰が始まっており、次いで(13:42)、(13:45)、(13:49)と沸騰が始まった。とについては書き漏らしてしまったが、ほとんど変わらない時間に沸騰が始まっている。については火力が強すぎて鹹水が吹きこぼれる一幕もあった。1回目と比べると、沸騰の状況は同様であるが、時間は明らかに早くなっている。炉が暖まり乾燥が進んだ効果であろうか。

以降は鹹水を加えていったが、については水漏れが多かった。終了の時間が迫り、水分が蒸発して干上がりかけたものから順に薪を除けて火を消していった(~15:00)。については、火力と余熱でほとんど干上がったが、大型のはある程度水分が残り、余熱でも干上がらせることはできそうになかった。塩のでき方については1回目とあまり変わるところがなかった。2回目の実験で消費した鹹水は11.8ℓ、燃料は薪3~4束であった。

#### その他

なお、実験にあたり、塩づくりの工程や、製塩土器の変遷、製塩遺跡の分布をパネルで表示し、遺跡から出土した製塩土器破片や、実験で生じた塩、実験には使用しなかったが海藻などを展示した(写真15)。塩は味見できるように盛り付けられており、コーナーを訪れるまつり参加者の反応は上々で



写真4 実験コーナー遠景



写真5 炉の設営状況



写真6 1回目(午前)実験の着火状況

土器 番号								
土器 種類	棒・大・太	平・中	平・小	棒・小・細	台	棒・中・細	棒・大・太	棒・中・太
当初 水量	2,500cc	1,000cc	300cc	200cc	500cc	500cc	3,000cc	3,000cc
経	10:00	開始	開始	開始	開始	開始	開始	開始
	10:07	着火						着火
	10:13							
	10:30		着火	着火	着火	着火	着火	
	10:42	沸騰						
	10:45	沸騰(強)						沸騰
	10:48		沸騰					
	10:49				沸騰			
	10:52						沸騰	
	10:54				+100cc		+200cc	
過	10:57						沸騰(強)	
	10:59					+200cc		
	11:00				+100cc			
	11:02						沸騰	
	11:04					+200cc		
	11:10						+100cc	
	11:15		+400cc					
	11:16	+400cc						
	11:18			+200cc	+200cc			
	11:23						+100cc	+400cc
11:50	薪除ける	薪除ける	薪除ける	薪除ける	薪除ける	薪除ける	薪除ける	
12:00	終了	終了	終了		終了		終了	
12:30				終了		終了		
実験 結果	成功	成功	成功	成功	水漏れ 失敗	成功	成功	成功
合計 水量	2,900cc	1,400cc	500cc	600cc	700cc	1,100cc	3,400cc	3,400cc

第1表 塩づくり実験チャート(午前)

土器 番号								
土器 種類	棒・大・細	棒・小・細	棒・小・細	棒・中・細	平・中	棒・大・細	棒・大・太	棒・中・太
当初 水量	1,000cc	300cc	300cc	500cc	500cc	2,000cc	4,000cc	未記入
経	13:00	開始	開始	開始	開始	開始	開始	開始
	13:17					着火	着火	
	13:37	着火	着火	着火	着火		沸騰	
	13:42					沸騰		未記入
	13:43					沸騰(強)		未記入
	13:45		+100cc		沸騰			未記入
	13:48				+200cc		沸騰(強)	未記入
	13:49	沸騰						未記入
	13:52	沸騰(強)						未記入
	13:53	+200cc				+200cc		未記入
過	13:56		+100cc	+200cc				未記入
	13:58	+1000cc		+100cc				未記入
	14:08			+100cc	+100cc	+100cc	+100cc	未記入
	14:11					+300cc		未記入
	14:26					+400cc		未記入
	15:00	終了	終了	終了	終了	終了	終了	終了
実験 結果	成功	成功	成功	成功	水漏れ 失敗	成功	水分残 成功	成功
合計 水量	2,200cc	400cc	500cc	1,100cc	1,200cc	2,400cc	4,000cc	-

第2表 塩づくり実験チャート(午後)

\*1 第1表 と第2表 は沸騰時間を書き漏らしたものであり、実際は他と大きく変わらない状況で沸騰している。  
 \*2 実験結果の「成功」は塩A・塩Bとも生成したものであり、生成した量は問わない。



写真7 平底タイプ(午前)の耐火レンガによる支脚



写真8 平底タイプ(午前)の沸騰状況



写真9 棒状脚タイプ(午前)の沸騰状況



写真10 平底タイプ(午前)の実験終了状況



写真11 1回目(午前)実験の土器配置



写真12 2回目(午後)実験の水漏れ



写真13 2回目(午後)実験の土器配置



写真14 棒状脚タイプ(午後)の吹きこぼれ

あった。

また、午前と午後の実験を通して感じたことだが、火前で作業を行ったため、火熱を受けて顔の皮膚などがひりひりした。この症状がひどくなると熱射病になるかもしれない。中でも火前で行う薪の調節と鹹水を投入する作業は最もつらいものであった。かぶりものや柄の長い柄杓は必ず備えておくべきであろう。今回はタオルや棒などを応急的に使ってしのいでいる。

さらに余談であるが、まつり参加者の中から「私もむかし塩水を煮詰めたことがある」「むかし近所の海岸で塩田を見た」という内容のお話を複数うかがうことができた。場所は北加賀の海岸で、戦中戦後のころという条件が一致していた。近代の塩づくりは能登地方が有名であるが、食糧難の時代には加賀地方でも身近なものだったようである。



写真15 パネル・展示状況

### 3 実験の成果から

今回の実験では、私たちの経験不足もあり、水漏れや記録ミスなどの至らなかった点が多いが、それでも古代の塩づくりを復元する上で手がかりとなりそうな結果が得られ、一定の成果があったと感じている。以下は、あれこれ考えてみたことについて、実験の手順に沿って記す。

#### 製塩土器と鹹水づくり

製塩土器づくりで最も苦心したのは棒状脚タイプであり、棒状脚をどのように付けるかという点であった。棒を最初に作ると置けなくなって製作しづらくなるが、最後に付けようとする大型のものでは体部を支えられないし、細身のものには内部に手が入りにくいのである。また、正位で立てることができないため、乾燥させる時は逆位に置かざるを得ない。出土品の口縁端部に面ができているものが多いのはこれと関係している可能性がある（製作者談）。

鹹水づくりについては、岩塩が少ない日本においては塩づくりの重要な工程の一つである。この工程をばさまずに海水を直接煮詰めていけば、確実に塩は得られるであろうが、実に多くのエネルギーを消費することも確実であり、効率の悪さはすでに指摘されている〔小澤1984〕。今回は海水を濃縮する「採鹹」と呼ばれる工程を煮詰めて行ったが、おそらくはこの後の土器で鹹水を煮詰める「煎熬」と呼ばれる工程以上に時間と熱量を費やしている。このように全ての行程を煮詰めて行くと、「塩山」と呼ばれた山林〔廣山1983〕に依存していたらしい燃料はすぐに尽きてしまうだろう。少なくとも採鹹の工程には、調査成果や文献で見ると塩田法〔富山大・石考研1991、廣山1983〕や藻塩法〔森1991、廣山1983〕といった、燃料を低減できる方法がとられたと考えるのは自然なことではないだろうか。

#### 煮詰めてできた塩

実際に鹹水を製塩土器に入れて煮詰めてみると、中でできてくる塩状の物質は、側面に帯状に付着する固形塩（塩A）と、底に沈殿する結晶塩（塩B）が見分けられた（第3図）。塩Aはまず鹹水の噴水線に沿って環状に白色化が始まり、煮詰め続けると噴水線が下がるのに連動して帯状に広がり、下方ほど濃く厚みを増していくが、厚い部分はフジツボ状に固まり、薄い部分は皮膜状で、ともに器面に強く貼り付いており、きれいに採取するのは難しい状況であった。塩Bは底にできるため水分

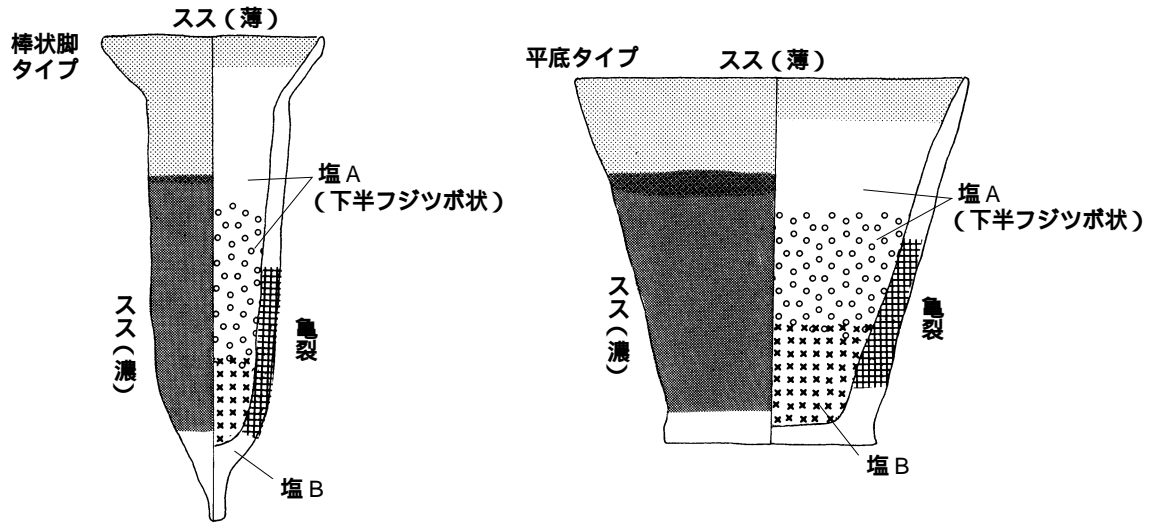
が多いうちは取り出しにくい、水分が減ってくると容易に採取される。味はどちらもとても塩辛くてうまみがあるが、個人的には塩 B の方が上質な感じがして好ましい。成分としては、塩 A は沸騰時に鹹水中のマグネシウム Mg がカルシウム Ca が不純物を含む塩分を凝固させた [近藤1984] ものと思われ、塩 B はにがりとして若干のマグネシウム Mg を含むが結晶塩 NaCl と思われる。

製塩土器のタイプ別で比べてみると、台脚タイプは水漏れで使えなかったが、棒状脚タイプと平底タイプでは、沸騰の状況と塩のでき方に違いが見られた。棒状脚タイプでは沸騰が早く対流が顕著であるが、平底タイプはやや遅れ、穏やかである。また、沸騰の状況とも関連して棒状脚タイプは前述した塩 A の付着が多く、土器側面から外反する口縁部にまで及ぶものも珍しくないが、これに対して平底タイプでは少ない傾向がある。沸騰の状況は土器の形に起因して異なることが明らかであり、棒状脚タイプの熱効率が良いことになる。ただし、それは棒状脚の存在ばかりでなく縦長の器形による影響も大きい。両タイプの器形と新古関係を考えると、棒状脚タイプは熱効率の良さで伝統的に選択された器形のように思われる。一方、平底タイプは容量を大きくすることが容易な器形であり、熱効率は劣るが支脚を使用することによってかなり改善できることから、不純物を含んだ塩 A の生成を抑えて良質な塩 B を多く取り出すことを主な目的として採用された器形のように思われる。

#### 製塩土器の使い方

実際に製塩土器を使ってみて気が付いたのは、それほど強火で煮続けなくても、一度沸騰してしまえばオキ火でもそれを維持できるし、余熱でもある程度は水分を蒸発させることができるということであった。古代の塩づくりの光景として、縄文土器野焼きのようにガンガン火をたいて鹹水を激しく沸騰させることを漠然とイメージしていたが、現実的にはかなり火加減をコントロールして進めた方が不純物を含む塩 A を少なくすることができ、燃料消費も抑えられ、結果として効率がよいことになりそうである。ただし、この場合だと時間は確実に長くかかるので、今回のように2時間程度で終われるものではなく、もっと長時間のサイクルで行われた可能性があろう<sup>3</sup>。季節的には気温が高く、天候が安定する夏が最も行いやすく、それ以外の季節は考えにくいだろう。

また、実験後に製塩土器を観察すると、外面はススが付着するが、上半は薄く均一に黒色化し、下半は厚く多く付着しており、底にはほとんど何も付着していない(写真16・18)。内面は上半が塩 A の薄い部分、下半が厚い部分、底には塩 B が生じている(写真17・19)。何も付着していない部分についても、熱を受けたことにより、全体に赤く変色している。また、器面は外面下方から継ぎ目とそれに直交してアミダクジ状の亀裂が入るものが多く、部分的に剥離したものも見られた。いずれの土器も繰り返し使うことは不可能であろう。以上が、今回の実験で生じた製塩土器の使用痕跡パターンである(第3図)。遺跡から出土したものと比較すると、塩は溶出して残らないものとしても、赤変、剥離、亀裂、器面の薄い黒色化、灰白色の皮膜はよく観察されるものであり、共通する特徴である。そして、遺跡から出土する製塩土器に細かく砕けたものが多いことには、今回の実験で行ったような集中的な被熱と塩分の浸入・収縮が作用している [近藤1984] ことも器面の損耗から推定できる。しかし、ススが厚く付着したものについては、遺跡から出土したものにはほとんど全く見ることができないことには注意を促したい。今回の実験でも見られた(写真14)が、繰り返しの加熱でススが酸化して消えたり [小林2001a]、吹きこぼれがススを消すようなことはある [小林2001b] が、すべてのススが消えるとはどうも考えられない。製塩遺跡の立地するような塩分が多い土壌ではススも消えてしまうのであろうか。それとも前述したような火加減や燃料<sup>4</sup>によりススの消長も異なるのだろうか。あるいは実は塩づくりに使われたものではない [中口1982] ののだろうか。素朴な疑問が残った。



第3図 実験製塩土器の使用痕跡パターン



写真16 実験後の棒状脚タイプ(午前)外面



写真18 実験後の平底タイプ(午前)外面

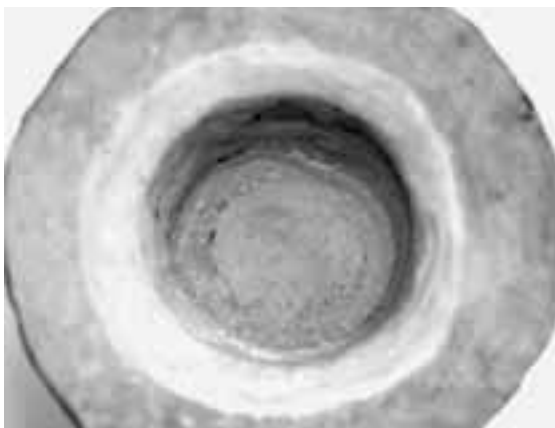


写真17 実験後の棒状脚タイプ(午前)内面



写真19 実験後の平底タイプ(午前)内面

## おわりに

以上のように、実験は常に手探りの状態であったが、進めていくうちにコツがつかめてきて、今後に生かせる経験となった。また、実験結果からは古代の塩づくりについて考える多くの視点が与えられた。実験で検討すべき問題は、土器づくりから塩ができるまでの過程で実に多いが、特に海水の濃縮や火加減などについては、遺跡の調査・研究だけではなかなか得られない内容である。残念ながら個々の問題解明を目的として環境条件を厳密に設定していないため、不明な部分、曖昧な部分は多い。しかし、古代の塩づくりの実態を具体的に示す考古資料がほとんど存在しない現在、その成果は重要であろう。

最後に、現在、各地の埋蔵文化財関係機関で盛況を博している一般向けの古代生活体験企画についてふれたい。このような企画は考古学の調査・研究成果を社会に還元するものであるが、実際に体験してみると理屈をぬきにして具体的な仕組みやコツを体感できる。それは考古学の知識があって企画を立案し準備する側である私たちでも同じであると思う。今回のような体験企画に盛り込まれた公開実験は珍しいケースであろうが、一般向けに公開しつつも実験として調査・研究に還元できる十分な成果があり、私たち自身も新鮮な体験ができたことを記しておきたい。企画者の発想と努力に敬服するとともに、小文が少しでもその慰労となれば幸いである。

## 注

- 1 当センターが平成11年度から実施している「古代体験まつり」の中で、平成11年度と平成12年度にガラス玉製作を行っている【(財)石川埋文2001・2002】
- 2 同種の催しを先駆的に行っている中島町の唐川明史氏、能都町の加藤三千雄氏に教示を得た。
- 3 事実、当日の実験よりも長い時間をかけて煮詰めた予備実験のほうがよく塩が生成している(写真3)。
- 4 塩づくりの燃料についても実態は不明であり、大きな疑問である。木炭の使用も想定すべきかもしれない。

## 参考文献

- 石川県中島町教育委員会 1995 『ヤトン谷内遺跡 能登における古代製塩遺跡の調査』
- 石川県立埋蔵文化財センター 1988 『寺家遺跡発掘調査報告』
- 小澤清男 1984 「縄文時代土器製塩の復元 - 土器製作・製塩実験・中性子放射化分析 - 」『考古学ジャーナル』240  
ニュー・サイエンス社
- 小林正史 2001a 「土鍋のコゲから何が分かるか(その2)」『石川考古』第263号 石川考古学研究会
- 小林正史 2001b 「土鍋のコゲから何が分かるか(その3)」『石川考古』第266号 石川考古学研究会
- 近藤義郎 1984 『土器製塩の研究』青木書店
- 財団法人石川県埋蔵文化財センター 2001 『年報2(平成11年度)』
- 財団法人石川県埋蔵文化財センター 2002 『年報3(平成12年度)』
- 富山大学人文学部考古学研究室・石川考古学研究会 1991 『能登滝・柴垣製塩遺跡群 - 古代揚浜式塩田・鉄釜炉・土器製塩炉の調査 - 』
- 中口 裕 1982 「土器製塩説との論争」『実験考古学』雄山閣出版
- 廣山堯道 1983 『日本製塩技術史の研究』雄山閣出版
- 森 勇一 1991 「珪藻分析によって得られた古代製塩についての一考察」『考古学雑誌』第76巻第3号 日本考古学会

---

---

## 石川県埋蔵文化財情報

### 第 8 号

発行日 2002(平成14)年 9月30日

発行者 財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920 1336 石川県金沢市中戸町18番地 1

TEL 076 229 4477 FAX 076 229 3731

URL <http://www.ishikawa-maibun.or.jp/>

E-mail address [mail@ishikawa-maibun.or.jp](mailto:mail@ishikawa-maibun.or.jp)

印 刷 株式会社 橋本礎文堂